

青森県埋蔵文化財調査報告書 第550集

# 八幡遺跡Ⅱ

# 千石屋敷遺跡Ⅱ

— 一般国道104号八戸市八幡歩道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2015年3月

青森県教育委員会



八戸市大字櫛引字仙日平から



八戸市大字櫛引字寺沢から

八幡・千石屋敷遺跡 遠景①



八戸市大字櫛引字一日市から



SP459・471・474 (NE →)



SP471 出土銭 (NW →)



SP474 出土銭 (N →)

八幡・千石屋敷遺跡 遠景②・千石屋敷遺跡の柱穴出土銭（永楽通寶）

# 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成25年度に一般国道104号八戸市八幡歩道整備事業予定地内に所在する、八幡遺跡及び千石屋敷遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、八幡遺跡では古代の竪穴住居跡などの遺構や、縄文から江戸時代にかけての遺物を発見し、千石屋敷遺跡でも縄文時代の土坑や中近世の竪穴・柱穴などの遺構とともに、縄文から江戸時代の遺物を発見し、この地域が縄文時代から断続的に利用されていたことが分かりました。

この調査成果が、埋蔵文化財の保護等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省青森地方整備局青森河川国道事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成27年3月

青森県埋蔵文化財調査センター  
所長 三上盛一

## 例 言

- 1 本書は、国土交通省青森河川国道事務所による一般国道104号八戸市八幡歩道整備事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成25年度に発掘調査を実施した八戸市八幡遺跡及び千石屋敷遺跡の発掘調査報告書である。同事業にかかる平成23年度調査については青森県埋蔵文化財調査報告書第524集で報告済である。平成23年度調査を第1次調査、平成25年度調査を第2次調査とする。
- 2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下のとおりである。

八幡遺跡	(青森県遺跡番号203026)	青森県八戸市大字八幡字館ノ下外
千石屋敷遺跡	(青森県遺跡番号203038)	青森県八戸市大字八幡字五日町外
- 3 遺跡の調査面積は以下のとおりである。

八幡遺跡	160㎡
千石屋敷遺跡	920㎡
- 4 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成25年5月14日～同年7月29日
整理・報告書作成期間	平成26年4月1日～平成27年3月31日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は佐藤智生文化財保護主査が担当した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

樹種・種実・漆塗膜・骨の同定・分析	株式会社パレオ・ラボ
遺物の写真撮影	(有)無限、シルバーフォト
- 8 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 9 発掘調査及び整理・報告書作成に際し、下記の機関・方々からご協力・ご指導を得た(敬称略・五十音順)。

柴田知二、田中美穂、中村隼人、船場昌子、村木 淳
- 10 発掘調査成果の一部は、ホームページや発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 11 本書に掲載した地形図(遺跡位置図)は、国土地理院発行の「数値地図25000(地図画像)」を複製・加工して使用した。
- 12 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2000)に基づく平面直角座標第X系による。
- 13 挿入中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、挿入毎にスケール等を示した。
- 15 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりである。

S I - 竪穴住居跡    S D - 溝跡    S K - 土坑・竪穴遺構    S V - 溝状土坑    S P - 柱穴

- 16 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 17 遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居跡・溝跡・土坑を1/60、柱穴を1/100とし、挿図毎にスケールを示した。
- 18 遺跡の基本土層番号にはローマ数字、遺構内堆積土層番号には算用数字を使用した。
- 19 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2006年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。
- 20 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。
- |   |      |   |       |   |      |   |     |   |      |
|---|------|---|-------|---|------|---|-----|---|------|
|  | : 焼土 |  | : 炭化物 |  | : 柱痕 |  | : 骨 |  | : 攪乱 |
|---|------|---|-------|---|------|---|-----|---|------|
- 21 遺物については、層位ないしグリッド一括遺物を除き、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、次のとおりである。
- P - 土器    S - 礫・石器    C - 炭化物
- 22 遺物実測図には、挿図毎に1から通し番号を付した。
- 23 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器・土師器は1/3、錢貨は2/3に統一し、挿図毎にスケール等を示した。
- 24 遺物実測図に使用した網掛けは、次のとおりである。
- |   |             |
|---|-------------|
|  | : 土師器内面黒化処理 |
|---|-------------|
- 25 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、各表に指示内容を示した。
- 26 遺物写真には遺物実測図と共通の番号を付した（例：図1-1 は1-1 と表記）
- 27 遺物写真の縮尺は不同である。

# 目次

序

例言

目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理の方法	1
第3節 調査の経過	3
第4節 遺跡周辺の地形・遺跡・歴史的背景	4
第2章 八幡遺跡	7
第1節 竪穴住居跡 (SI)	7
第2節 溝跡 (SD)	7
第3節 土坑 (SK)	7
第4節 柱穴 (SP)	7
第5節 遺構外出土遺物	11
第3章 千石屋敷遺跡	16
第1節 土坑 (SK)	16
第2節 溝状土坑 (SV)	18
第3節 柱穴 (SP)	18
第4節 遺構外出土遺物	34
第4章 自然科学分析 (千石屋敷遺跡)	47
第1節 千石屋敷遺跡出土炭化材および木材の樹種同定	47
第2節 千石屋敷遺跡出土の種実遺体	50
第3節 千石屋敷遺跡出土漆器の塗膜分析	51
第4節 千石屋敷遺跡から出土した骨	55
第5節 千石屋敷遺跡から出土した人骨	56
第6節 千石屋敷遺跡出土人骨の放射性炭素年代測定	59
第7節 千石屋敷遺跡出土人骨の炭素・窒素安定同位体比分析	62
第5章 総括	65
引用・参考文献	67
写真図版	69
報告書抄録	85
奥付	

## 第1章 調査概要

### 第1節 調査に至る経緯

一般国道104号八戸市八幡歩道整備事業に伴い平成20年度に国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所（以下「青森河川国道事務所」）から青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）に埋蔵文化財の取り扱いについて照会があり、平成21年5月に青森河川国道事務所と文化財保護課による現地踏査が行われ、当該事業予定地内の八幡遺跡発掘調査、千石屋敷遺跡隣接地については試掘調査が必要であると判断された。隣接地で平成21年度に実施された八戸市教育委員会の調査結果を受け、千石屋敷遺跡の範囲変更が平成22年7月に行われたことに伴い、平成22年8月に文化財保護課による試掘調査が行われ、千石屋敷遺跡も発掘調査の実施が必要と判断された。

平成22年9月に青森河川国道事務所、文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターが現地協議を行い、平成23年5月から青森県埋蔵文化財調査センターが当該区域の発掘調査を実施した（青森県埋蔵文化財調査報告書第524集）が行われた。

その後、未調査区域の買収及び建物移転等が進んだことから再度協議が行われ、平成25年度に残りの発掘調査を実施することとなった。

事業者側からの本報告にかかる区域の土木工事等のための発掘に関する通知は、平成25年4月25日付け三八県局整備第25号でなされ、これを受けて青森県教育委員会教育長から、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施を平成25年5月7日付け青教文第300号で通知されている。

### 第2節 調査・整理の方法

#### (1) 発掘作業

##### 〔測量基準点・水準点の設置〕

測量基準点は、 $X = 54.216$ 、 $Y = 50.596$ を使用した。遺構測量には打設済みの用地幅杭を座標確認後に用い、測量に支障が生じた場合は調査区内に任意点を設けた。基準点及び幅杭の座標値については、国土交通省より提供を受けた。また、水準原点は3級基準点16.258mを用い、用地幅杭及び調査区内に任意点を設けた。

##### 〔グリッドの設定・呼称〕

$4 \times 4$  mを1グリッドとした。南北方向はアルファベットとローマ数字を組み合わせ、東西方向は算用数字を付し、南西隅の組み合わせで呼称している。原点はI A - 1である。

##### 〔基本土層〕

表土から順にI層・II層とローマ数字を付した。細分層については連続するアルファベットの小文字を用いている。

##### 〔表土の調査〕

掘削には主に重機を用い、人力を併用した。千石屋敷遺跡の調査は、進捗によりA～D区に分けて行った。出土遺物は、調査区またはグリッド毎に一括して取り上げた。

## 〔遺構の調査〕

検出遺構には、確認順に種類別の番号を付して精査した。堆積土観察用のセクションベルトは、遺構の形態・大きさに応じて、基本的には4分割または2分割で設定し、適宜増減した。遺構内の堆積土層には算用数字を付し、ローマ数字を用いた基本土層とは区別している。遺構実測と遺物取上は、簡易遣り方測量のほか、トータルステーションと株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いて記録した。遺構の実測図は縮尺1/20を基本とし、遺構の規模や性格に応じて縮尺を変更した。

## 〔遺物包含層の調査〕

上層から順に人力で掘削し、遺物はグリッドおよび層位毎に取り上げた。

## 〔写真撮影〕

35mmフィルムカメラと1790万画素のデジタルカメラの併用を原則とし、発掘作業状況、土層堆積状況、遺物出土状況、精査状況、完掘後の全景等を記録した。

## (2) 整理・報告書作成作業

調査の結果、八幡遺跡では竪穴住居跡3軒、溝跡1条、土坑1基、柱穴101基を検出し、遺物は遺構内や包含層から古代等の遺物が段ボール箱に換算して2箱出土した。他方、千石屋敷遺跡では土坑30基、溝状土坑1基、柱穴369基を検出し、遺物は遺構内や包含層から縄文時代・古代・中世・近世の遺物が段ボール箱に換算して5箱出土した。検出された遺構の構築時期や変遷等に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

## 〔遺構図面類の整理〕

トータルステーションによる測量で作成した遺構の平面図や堆積土層断面図は、遺構毎に図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

## 〔遺構写真類の整理〕

35mmモノクロームフィルムは、撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは、発掘作業状況、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付した。

## 〔遺物の注記〕

調査年度、遺跡名、遺構名、層位、取上番号等を略記し、剥片石器・金属器等直接注記できないものは収納したポリ袋に注記した。接合・復元は、出土地点・層位等の整理をあわせて実施した。

## 〔掲載遺物の選別〕

遺物全体の分類・検討を適切に行った上で所属時代・型式・器種等の分かる資料等を掲載遺物として抽出した。図化にあたっては選別資料を慎重に観察し、あわせて観察表・計測表等を作成した。写真撮影は業者に委託して行ったが、実測図等では表現したい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるよう留意した。

## 〔図面の浄書・編集・版下作成〕

株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」、アドビシステムズ「Illustrator」・「Photoshop」・「InDesign」を適宜用いた。

## 〔遺構の検討・分類・整理〕

遺構毎に種類や特徴を整理し、構築時期や性格等について検討を加えた。

## 〔遺物の検討・分類・整理〕

時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・個体数等について検討した。

## 〔調査成果の検討〕

遺構・遺物の検討結果および自然化学分析結果等を踏まえて、遺跡の歴史的な位置づけについて整理・検討した。

## 第3節 調査の経過

## (1) 発掘作業の経過

平成25年度の発掘調査事業は、平成25年5月14日から同年7月29日まで行った。発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	柿崎 隆司 (現青森県立郷土館館長)
次長 (総務GM)	高橋 雅人
調査第一GM	中嶋 友文
文化財保護主幹	野村 信生
文化財保護主査	佐藤 智生

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼 邦彦	前弘前大学教授 (考古学)
〃	福田 友之	青森県考古学会会長 (考古学)
〃	松山 力	日本地質学会会員 (地質学)

発掘作業の経過および業務委託状況等は、以下のとおりである。

- 4月上旬 青森河川国道事務所、文化財保護課と調査前の打合せを行い、工事の優先箇所や発掘作業の進め方等について確認した。
- 5月中旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等の事前準備を行い、5月14日より調査を開始した。
- 5月下旬 千石屋敷遺跡から遺構が検出されたため精査を開始した。
- 7月下旬 7月29日に全ての発掘作業を終了し、現地から撤収した。

## (2) 整理・報告書作成作業の経過

平成25年度に実施した発掘調査に関する報告書刊行事業は、平成26年4月1日から平成27年3月31日まで行った。八幡遺跡・千石屋敷遺跡は、共に縄文時代と古代～近世の複合遺跡であるため、これに応じた作業工程を計画した。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター  
文化財保護主幹 野村 信生  
文化財保護主査 佐藤 智生

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

- 4月上旬 写真・図面類の整理および遺物の接合・復元作業を開始。

- 6月上旬 報告書掲載遺物の検討・選別・図化を開始。
- 11月下旬 各図面の浄書・割付・版下作成を開始。
- 11月下旬 報告書掲載遺物の写真撮影。
- 1月下旬 印刷業者の選定・版下入稿。
- 3月下旬 3回の校正を経て本書を刊行。記録類・出土品を整理・収納した。

#### 第4節 遺跡周辺の地形・遺跡・歴史的背景

平成24年度に刊行された第1次調査報告（青森県教育委員会2013）を参照のこと。基本土層については、写真（写真2・千石屋敷遺跡土層注記冒頭）を示す。（野村・佐藤）

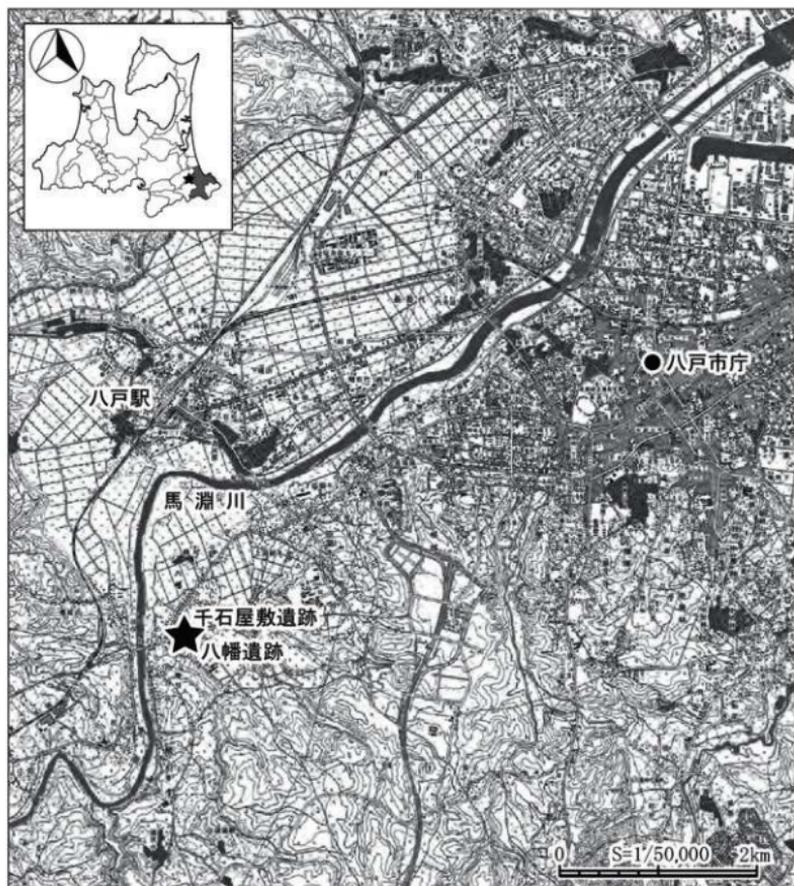
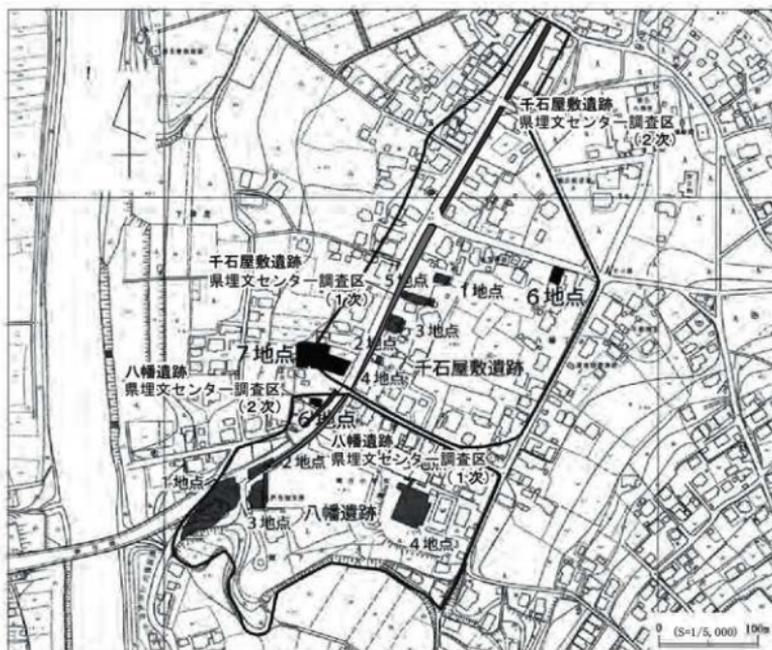


図1 遺跡位置



八戸市教育委員会2014を加筆・転用

図2 遺跡周辺・調査地点

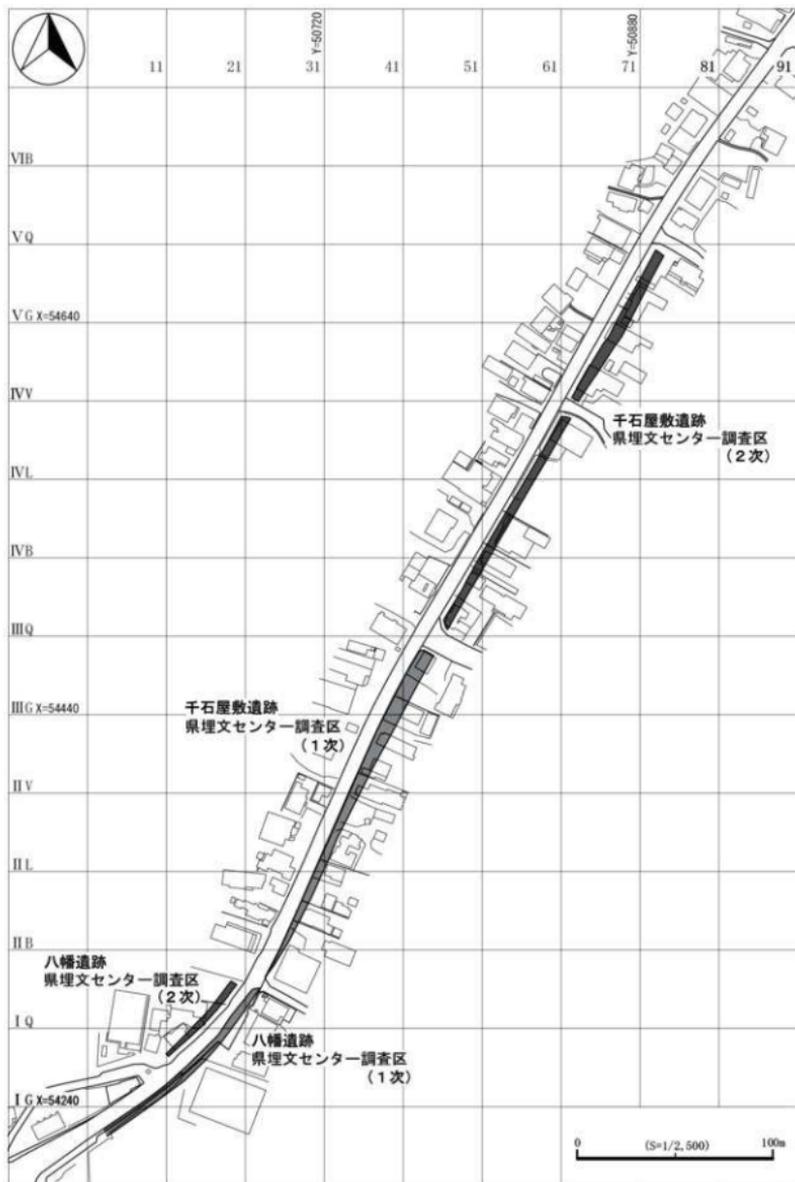


図3 千石・八幡遺跡調査区域

## 第2章 八幡遺跡

本報告は第1次調査報告（青森県教育委員会2013）に続く第2次調査の成果である。調査対象は、前回の調査同様、主に歩道拡幅部分となっており、作業の工程上、調査区をA区（I T～I W）・B区（I M～I S）に分け、状況により各区を細分化した。以下、遺構番号は既報告の続きを付し、要点中心の記載とする。土層注記および遺構・遺物に関する基礎的事項は各表に適宜まとめる。

### 第1節 竪穴住居跡（SI）

3棟認められた（図6）。いずれもⅣ層で確認・検出している。後述のとおり、各遺構の上部および周辺は、近世～現代にかけて形成された整地・攪乱・柱穴が顕著であるため、遺存状態は不良である。

**SI01** 長軸4.5mほどの規模である。主柱穴・壁溝・カマドは存在しない。竪穴部の覆土は黒色土由来の自然堆積を主とする。特徴的な降下火山灰は認められない。平安時代の土師器甕（図7-1）を掲載する。出土位置は3層直上部の2層中である。降下火山灰および土器の特徴から9世紀代の遺構と想定される。

**SI05** 調査番号はSI02である。長軸1.8m以上、短軸1.6mほどの規模である。主柱穴・壁溝は存在しない。カマドは南東側壁際のやや右寄りに設置されている。遺存状態は不良であり、破壊された状況を示すと考えられる。煙道部は地下式であり、住居跡の外側に向かうにつれ傾斜しながら深くなる。煙道部長は1.2m程度である。火床面は特に認められない。竪穴部の覆土は黒色土由来の自然堆積を主とし、4層に白頭山火山灰が微量含まれる。降下火山灰の堆積状況より、白頭山火山灰降下以後の構築・廃絶と考えられる。平安時代の土師器甕（図7-2～4）を掲載する。3はカマド煙道部覆土中から出土した。

**SI06** 調査番号はSI03である。カマド煙道部のみを調査した。煙道部は地下式であり、北西に向かって延びるため、南東側の調査区外に竪穴部が存在すると考えられる。カマドが設置されている方角のみで考えるならば、SI05以前の段階が想定される。出土遺物なし。

### 第2節 溝跡（SD）

1条認められた（図6）。

**SD01** 確認面幅1.5m、底部幅1.2mほどである。断面形状は逆台形を呈し、覆土は黒色土由来の自然堆積を主体とする。覆土中から出土した土師器（図7-5・6）・縄文土器（図8-1～3・5・7）を掲載する。平安時代以後の構築・廃絶と考えられる。

### 第3節 土坑（SK）

1基認められた（図6）。

**SK07** 調査番号はSK01である。平面形状は円形ないし隅丸方形を呈し、南東隅に小柱穴らしき凹みが存在する。覆土は黒色土由来の自然堆積である。断片化した新寛永通寶1（図7-7）が出土したため、本遺構は1697年以後の構築・廃絶を示す。

### 第4節 柱穴（SP）

101基確認した（図5）。遺構の年代・時期は、無遺物の遺構ではほぼ占められている点および調査

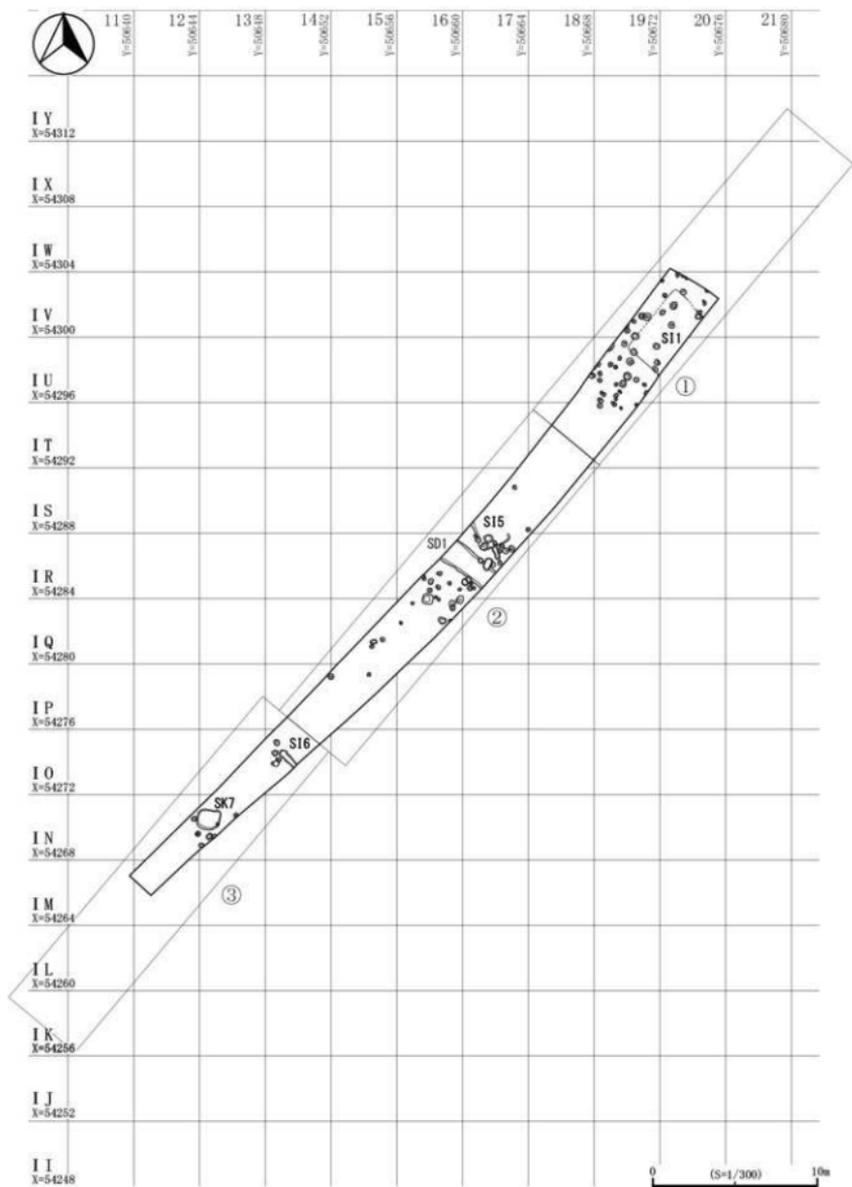


図4 遺構配置①(八幡遺跡)

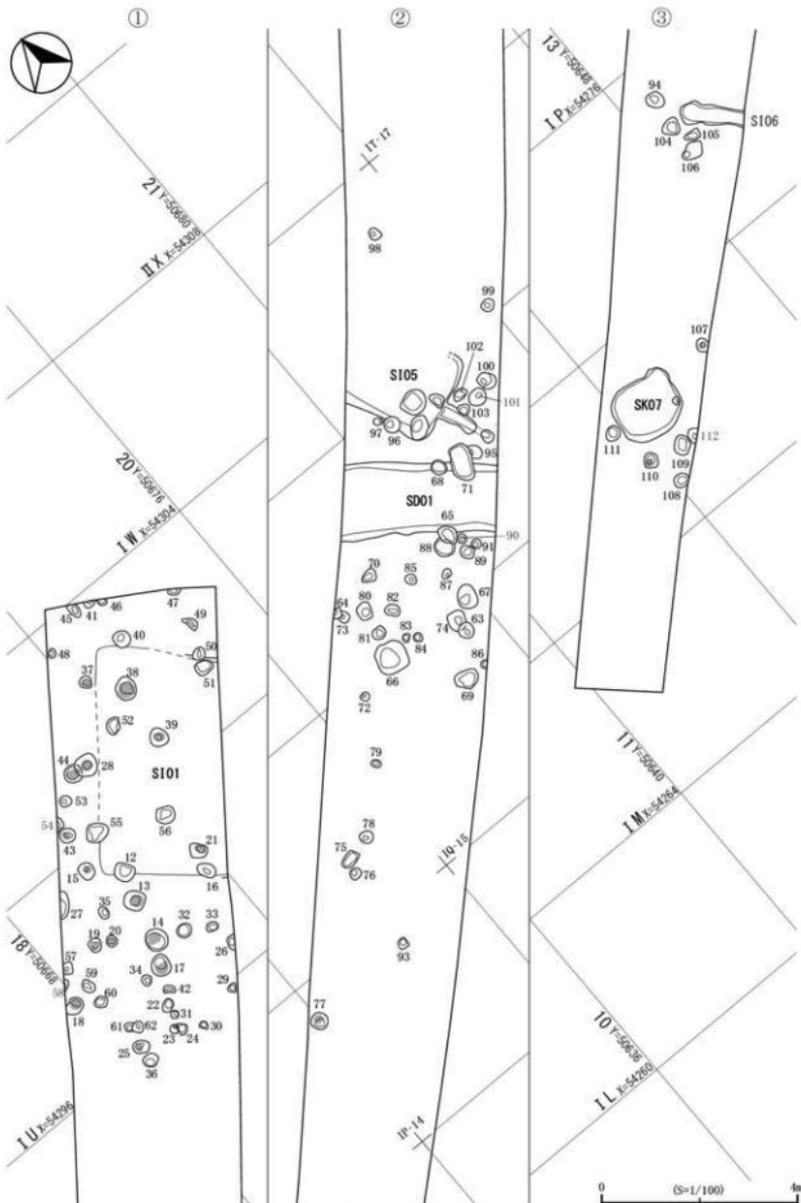
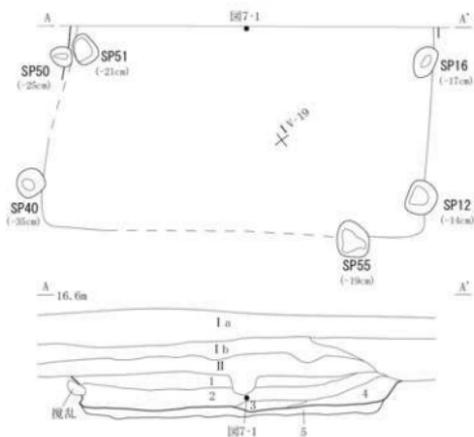
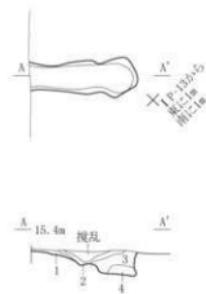


図5 遺構配置② (八幡遺跡)

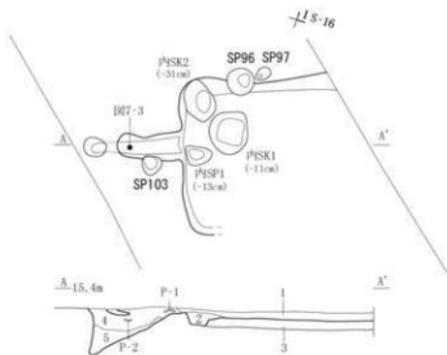
第1号竪穴住居跡



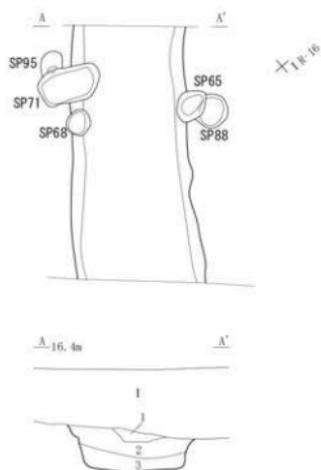
第6号竪穴住居跡



第5号竪穴住居跡



第1号溝跡



第7号土坑

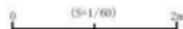
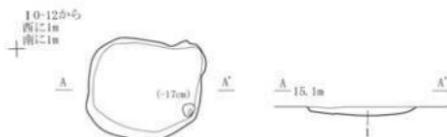


図6 竪穴住居跡・溝跡・土坑（八幡遺跡）

区全体が近現代の整地・攪乱を受け遺構構築面が不明瞭である点から、具体性に欠ける。一部の遺構については、重複関係から平安時代半ばの建物跡より新しい傾向が認められる。但し、近・現代の遺物を含む遺構も散見されたことに加え、覆土の締まり具合が弱い事例が多かったことなどを加味すると、歴史的に相当新しい遺構が一定量存在する可能性を残す。ゆえに、柱穴配置を手掛かりとする施設の復元は、調査範囲も狭く、困難である。なお、出土遺物が認められた下記の2遺構については、一定の年代推定が可能である。

SP16 寛永通寶(古)が1点出土(図7-8)したため、本遺構は1636年以降の構築・廃絶を示す。

SP25 洪武通寶が1点出土(図7-9)したため、本遺構は1368年以降の構築・廃絶を示す。

### 第5節 遺構外出土遺物

縄文時代から江戸時代の遺物が僅かに出土した(図8)。

縄文時代早期 貝殻文系土器の胴部片が1点出土している(1)。

縄文時代晩期 中葉～後葉の土器片を主体とする(2～9)。深鉢・台付鉢のほか、壺ないし注口土器が認められる。SD01覆土中の出土が多く、周辺に同時期の包含層の存在も想定される。

奈良時代 坏・甕の破片が出土しており、いずれも口縁と胴部の境に段が形成される(10～14)。

平安時代 土師器坏・須恵器坏・土師器甕が出土した(15～20)。9世紀代の資料が主体である。

江戸時代 1863年初鋳の文久永寶が1点出土した(21)。 (佐藤)

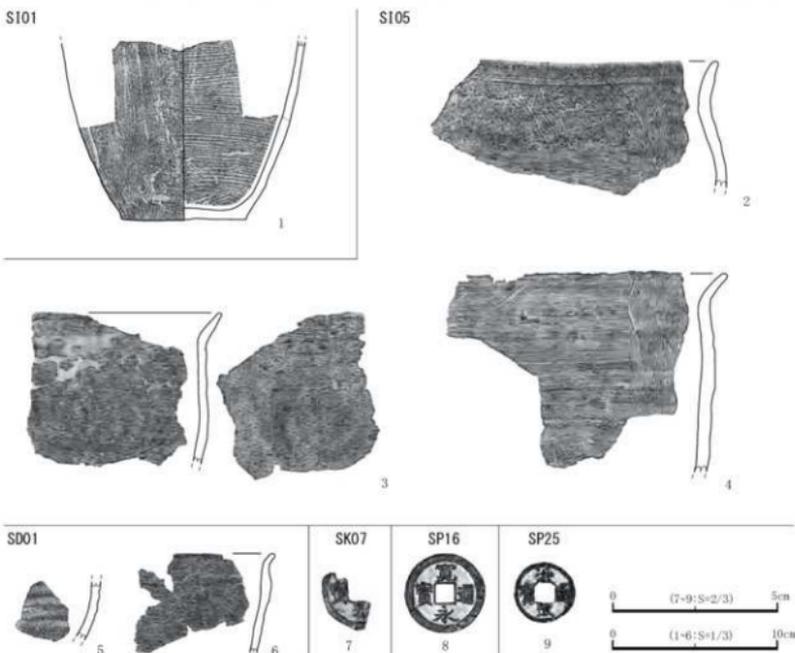
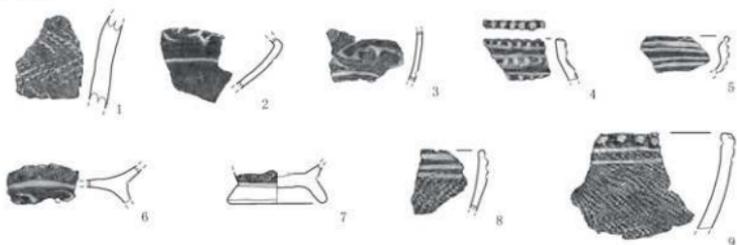
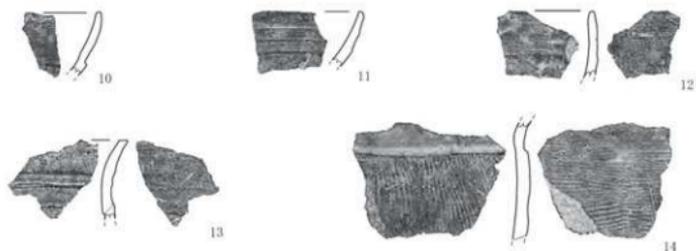


図7 遺構内出土遺物(八幡遺跡)

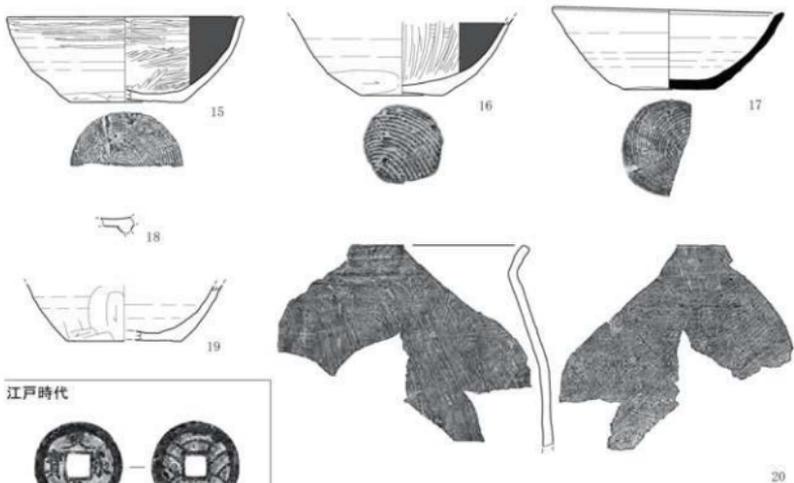
縄文時代



奈良時代



平安時代



江戸時代



図8 遺構外出土遺物 (八幡遺跡)

## 土層注記

第1号掘穴住居跡 (S01) 図6

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	10YR4-6褐色土 (φ1~3mm) 1%、浮石 (φ1~3mm) 1%
2	黒褐色土	10YR2/2	10YR4-6褐色土 (φ1~4mm) 3%
3	黒色土	10YR1/1	5YR5-6明赤褐色粘土20%、炭化物 (φ50mm) 2%
4	黒褐色土	10YR2/2	10YR4-6褐色土 (φ1~20mm) 7%
5	黒褐色土	10YR2/3	10YR4-6褐色土40%

第5号掘穴住居跡 (S05) 図6

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	10YR4-6褐色土 (φ10~30mm) 5%
2	黒褐色土	10YR2/2	10YR4-6褐色土20%
3	黒褐色土	10YR2/3	10YR4-6褐色土30%
4	黒褐色土	10YR2/3	5YR4-4C:ぶい赤褐色土10%、白旗山次山灰 (B-Tm) 1%、10YR4-6褐色土 (φ10mm) 1%、5YR4-4C:ぶい赤褐色焼土1%
5	黒色土	10YR1/1	

第6号掘穴住居跡 (S06) 図6

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	暗褐色土	10YR3/3	25YR4-6C:ぶい赤褐色焼土20%
2	黒色土	10YR2/1	10YR4-6褐色土 (φ1~5mm) 1%、焼土1%
3	黒褐色土	10YR2/2	10YR6-6暗褐色焼土20%
4	黒色土	10YR1/1	10YR4-6褐色焼土 (φ3mm) 1%

第1号溝跡 (S001) 図6

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	10YR4-4褐色土30%
2	黒色土	10YR1/1	10YR4-4褐色土 (φ1~5mm) 1%
3	黒色土	10YR1/1	10YR4-4褐色土10%

第7号土坑 (S007) 図6

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1/1	10YR4-4褐色土 (φ3~6mm) 5%、浮石 (φ1~10mm) 3%

## 遺構一覧表

掘穴建物跡 (S)

原図( )は残存量

遺構番号	回	主な位置	確認面	底面	取柄 (m)	深さ (cm)	カマド位置	主柱穴	B-Tm	遺構	備考
1	6	IV-19	八戸V	八戸V	4.5×2(6)	40	不明	無	-	S01<SP012・SP016・SP040・SP000・SP001・SP001・SP005	調査時: S01
3	6	III-16	八戸V	八戸V	1.8×1.6	15	南	無	4層 (湯桶)	S10<SP096・SP103	調査時: S02 構造部長 1.2m
6	6	III-13	八戸V	八戸V	-	-	北西	-	-	-	調査時: S03

溝跡 (SD)

原図( )は残存量

遺構番号	回	位置	確認面	底面	開口部取柄 (cm)	底面取柄 (cm)	深さ (cm)	遺構	備考
1	6	III-16	八戸V	八戸V	(311)×130	(311)×120	33	S01<SP006・SP008・SP071	

土坑 (SK)

原図( )は残存量

遺構番号	回	位置	確認面	底面	開口部取柄 (cm)	底面取柄 (cm)	深さ (cm)	遺構	備考
7	6	III-12	八戸V	八戸V	156×134	145×121	15	-	

柱穴 (SP)

原図( )は残存量

遺構番号	回	主な位置	確認面	底面	開口部取柄 (cm)	底面取柄 (cm)	柱面取柄 (cm)	深さ (cm)	遺構	備考
012	5	II-18	八戸V	八戸V	40×33	23×20	22×19	14	SP012・SP016・SP040・SP000・SP001・SP005<S01	調査時: SP001
013	5	II-18	八戸V	八戸V	40×38	19×17	26×25	31	-	調査時: SP002
014	5	II-18	八戸V	八戸V	46×43	36×20	30×22	20	-	調査時: SP003
015	5	II-18	八戸V	八戸V	33×28	10×8	16×13	45	-	調査時: SP004
016	5	II-18	八戸V	八戸V	40×24	18×8	20×15	17	SP012・SP016・SP040・SP000・SP001・SP005<S01	調査時: SP005
017	5	II-18	八戸V	八戸V	43×35	23×21	28×21	54	-	調査時: SP006
018	5	III-17	八戸V	八戸V	(31)×(31)	17×13	22×21	42	-	調査時: SP007
019	5	II-18	八戸V	八戸V	26×26	16×14	16×11	19	-	調査時: SP008
020	5	II-18	八戸V	八戸V	21×20	14×10	15×12	25	-	調査時: SP009
021	5	II-18	八戸V	八戸V	33×26	17×13	23×15	56	-	調査時: SP010
022	5	II-18	八戸V	八戸V	26×18	16×14	-	18	-	調査時: SP011
023	5	IT-18	八戸V	八戸V	16×10	6×5	8×6	13	-	調査時: SP012
024	5	IT-18	八戸V	八戸V	23×16	16×15	-	12	-	調査時: SP013
025	5	II-18	八戸V	八戸V	32×24	18×12	18×12	30	-	調査時: SP014
026	5	II-18	八戸V	八戸V	302×(15)	(11)×(10)	-	13	-	調査時: SP015
027	5	II-18	八戸V	八戸V	(65)×(16)	(34)×(10)	-	27	-	調査時: SP016
028	5	IV-18	八戸V	八戸V	44×38	18×16	23×22	23	SP020<SP044	調査時: SP017
029	5	IT-18	八戸V	八戸V	15×14	12×10	-	14	-	調査時: SP018

八幡道路目・千石屋敷道路目

道路番号	区	主令位置	確認前	既面	開口部規格 (mm)	取組規格 (mm)	仕組規格 (mm)	区5 (mm)	重数	備考
000	5	IT-18	△F/W	△F/W	16×11	11×11	-	10	-	調査時: SP019
001	5	IU-18	△F/W	△F/W	15×15	10×6	-	7	-	調査時: SP020
002	5	IU-18	△F/W	△F/W	29×25	22×20	-	12	-	調査時: SP021
003	5	IU-18	△F/W	△F/W	22×15	16×11	-	11	-	調査時: SP022
004	5	IU-18	△F/W	△F/W	21×17	13×10	-	25	-	調査時: SP023
005	5	IU-18	△F/W	△F/W	24×17	13×10	-	19	-	調査時: SP024
006	5	IT-18	△F/W	△F/W	27×26	19×14	-	41	-	調査時: SP025
007	5	IV-19	△F/W	△F/V	24×23	16×12	16×14	66	-	調査時: SP026
008	5	IV-19	△F/W	△F/W	46×39	29×25	34×32	33	-	調査時: SP027
009	5	IV-19	△F/W	△F/W	35×35	16×12	20×19	34	-	調査時: SP028
040	5	IV-19	△F/W	△F/W	35×32	15×13	23×21	35	SP012・SP016・SP040・SP050・SP061・SP065→S01	調査時: SP029
041	5	IV-19	△F/W	△F/W	(24)×(12)	(10)×(5)	-	23	-	調査時: SP030
042	5	IU-18	△F/W	△F/W	23×12	18×6	-	15	-	調査時: SP031
043	5	IV-18	△F/W	△F/W	31×29	15×10	17×15	31	-	調査時: SP032
044	5	IV-18	△F/W	△F/W	(34)×(24)	(25)×(25)	(27)×(19)	25	SP028→SP044	調査時: SP033
045	5	IV-19	△F/W	△F/W	(26)×(19)	15×9	-	13	-	調査時: SP034
046	5	IV-19	△F/W	△F/W	(21)×(12)	(14)×(8)	-	13	-	調査時: SP035
047	5	IV-19	△F/W	△F/W	(28)×(12)	(12)×(8)	-	32	-	調査時: SP036
048	5	IV-19	△F/W	△F/W	17×12	10×8	-	11	-	調査時: SP037
049	5	IV-19	△F/W	△F/W	31×16	18×5	-	14	-	調査時: SP038
050	5	IV-19	△F/W	△F/W	23×22	17×7	-	25	SP012・SP016・SP040・SP050・SP061・SP065→S01	調査時: SP039
051	5	IV-19	△F/W	△F/W	35×28	28×21	-	21	SP012・SP016・SP040・SP050・SP061・SP065→S01	調査時: SP040
052	5	IV-19	△F/W	△F/W	34×26	27×17	-	13	-	調査時: SP041
053	5	IV-18	△F/W	△F/W	23×22	11×8	-	18	-	調査時: SP042
054	5	IV-18	△F/W	△F/V	(30)×(14)	(14)×(6)	-	51	-	調査時: SP043
055	5	IV-18	△F/W	△F/W	46×39	28×27	-	19	SP012・SP016・SP040・SP050・SP061・SP065→S01	調査時: SP044
056	5	IU-18	△F/W	△F/W	38×37	24×19	-	14	-	調査時: SP045
057	5	IU-18	△F/W	△F/W	(19)×(16)	9×7	-	38	-	調査時: SP046
058	5	IU-18	△F/W	△F/W	(20)×(17)	(12)×(10)	-	17	-	調査時: SP047
059	5	IU-18	△F/W	△F/W	29×21	17×9	-	13	-	調査時: SP048
060	5	IU-18	△F/W	△F/W	28×22	17×15	-	10	-	調査時: SP049
061	5	IU-18	△F/W	△F/W	(17)×(15)	(10)×(10)	-	10	SP062→SP061	調査時: SP050
062	5	IU-18	△F/W	△F/W	22×21	10×6	-	20	SP062→SP061	調査時: SP051
063	5	IQ-15	△F/W	△F/V	(30)×(29)	12×10	-	53	SP063→SP074	調査時: SP052
064	5	IR-15	△F/W	△F/W	(16)×(16)	(10)×(7)	-	36	SP064→SP073	調査時: SP053
065	5	IR-16	△F/W	△F/W	42×32	29×17	-	29	SP065・SP068・SP071→SD01	調査時: SP054
066	5	IQ-15	△F/W	△F/W	70×60	41×37	-	23	-	調査時: SP055
067	5	IQ-15	△F/W	△F/W	47×36	23×19	-	32	-	調査時: SP056
068	5	IR-16	△F/W	△F/W	30×27	27×20	-	38	SP065・SP068・SP071→SD01	調査時: SP057
069	5	IQ-15	△F/W	△F/W	46×37	31×29	-	15	-	調査時: SP058
070	5	IR-15	△F/W	△F/W	30×24	20×11	-	13	-	調査時: SP059
071	5	IR-16	△F/W	△F/W	75×42	63×36	-	21	SP065・SP068・SP071→SD01 SP071→SP065	調査時: SP060
072	5	IQ-15	△F/W	△F/W	16×16	7×5	-	31	-	調査時: SP061
073	5	IR-15	△F/W	△F/W	(19)×(14)	(9)×(8)	-	25	SP064→SP073	調査時: SP062
074	5	IQ-15	△F/W	△F/W	41×40	17×13	-	42	SP063→SP074	調査時: SP063
075	5	IQ-14	△F/W	△F/W	36×22	31×16	-	18	-	調査時: SP064
076	5	IQ-14	△F/W	△F/W	21×20	11×10	-	44	-	調査時: SP065
077	5	IP-13	△F/W	△F/V	32×31	19×14	18×17	48	-	調査時: SP066
078	5	IQ-14	△F/W	△F/W	26×23	12×9	-	18	-	調査時: SP067
079	5	IQ-15	△F/W	△F/W	19×13	10×9	-	14	-	調査時: SP068
080	5	IR-15	△F/W	△F/W	34×28	16×15	-	30	-	調査時: SP069
081	5	IR-15	△F/W	△F/W	27×24	15×13	-	12	-	調査時: SP070
082	5	IR-15	△F/W	△F/W	28×21	20×10	-	19	-	調査時: SP071
083	5	IR-15	△F/W	△F/W	16×12	11×9	-	5	-	調査時: SP072
084	5	IQ-15	△F/W	△F/W	17×15	14×11	-	4	-	調査時: SP073
085	5	IR-15	△F/W	△F/W	22×19	9×7	-	30	-	調査時: SP074
086	5	IQ-15	△F/W	△F/W	(17)×(11)	(10)×(8)	-	14	-	調査時: SP075
087	5	IR-15	△F/W	△F/W	21×15	7×6	-	20	-	調査時: SP076
088	5	IR-16	△F/W	△F/W	(40)×(28)	(35)×(28)	-	17	SP065→SP088	調査時: SP077
089	5	IR-16	△F/W	△F/W	29×26	18×15	-	13	-	調査時: SP078
090	5	IR-16	△F/W	△F/W	17×16	10×9	-	12	-	調査時: SP079

道路番号	区	主な位置	確認前	既面	開口部規格 (m)	底面規格 (m)	仕上り規格 (m)	深さ (m)	重数	備考
091	5	IR-16	入戸用	入戸用	19×18	12×10	-	10	-	調査時：SP080
092	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-
093	5	IP-14	入戸用	入戸用	23×21	12×12	-	46	-	調査時：SP082
094	5	IO-13	入戸用	入戸用	36×30	18×14	-	57	-	調査時：SP083
095	5	IR-16	入戸用	入戸用	(24)×(21)	(11)×(7)	-	48	SP071>SP065	調査時：SP084
096	5	IR-16	入戸用	入戸用	31×31	15×14	-	37	SP006・SP103>SH5	調査時：SP085
097	5	IR-16	入戸用	入戸用	18×12	5×4	-	12	-	調査時：SP086
098	5	IS-16	入戸用	入戸用	23×20	9×8	-	18	-	調査時：SP087
099	5	IS-16	入戸用	入戸用	25×23	12×10	-	15	-	調査時：SP088
100	5	IR-16	入戸用	入戸用	37×31	13×8	-	41	-	調査時：SP089
101	5	IR-16	入戸用	入戸用	34×32	12×9	-	37	-	調査時：SP090
102	5	IR-16	入戸用	入戸用	28×19	18×12	-	15	-	調査時：SP091
103	5	IR-16	入戸用	入戸用	22×21	14×14	-	15	SP096・SP103>SH5	調査時：SP092
104	5	IO-13	入戸用	入戸用	36×31	24×18	-	14	-	調査時：SP093
105	5	IO-13	入戸用	入戸用	31×18	20×12	-	20	-	調査時：SP094
106	5	IO-13	入戸用	入戸用	47×32	13×11	-	65	-	調査時：SP095
107	5	IN-12	入戸用	入戸用	(23)×(20)	11×9	15×13	32	-	調査時：SP096
108	5	IN-12	入戸用	入戸用	(26)×(20)	18×15	-	30	-	調査時：SP097
109	5	IN-12	入戸用	入戸用	39×32	27×17	-	33	-	調査時：SP098
110	5	IN-11	入戸用	入戸用	31×30	23×17	-	7	-	調査時：SP099
111	5	IN-11	入戸用	入戸用	31×25	20×16	-	29	-	調査時：SP100
112	5	IN-12	入戸用	入戸用	(31)×(18)	11×7	-	52	-	調査時：SP101

## 遺物観察表

土籍（調査）

（ ）復元値

調査	器種	出土地点	層位等	外面特徴	内面特徴	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
8.1	深鉢	SD01	覆土	具收斂縁文	ナデ	-	-	-	-
8.2	注口土器小	SD01	覆土	沈澱・ミガキ	ナデ	-	-	-	-
8.3	鉢	SD01	覆土	LR・沈澱・ミガキ	ミガキ	-	-	-	-
8.4	鉢	IV-16→IB-22	表土	沈澱・削突	ミガキ	-	-	-	-
8.5	鉢	SD01	覆土	沈澱・ミガキ	沈澱・ミガキ	-	-	-	-
8.6	合付鉢	BC-22→EE-24	表土	RL・縦割・沈澱・ミガキ	ミガキ	-	-	-	-
8.7	合付鉢	SD01	覆土	RL・縦割・沈澱・ミガキ	ミガキ	-	(24)	5.8	-
8.8	鉢	BC-22→EE-24	表土	LR・沈澱	ケズリ	-	-	-	-
8.9	深鉢	BG-25	表土	削突・RL・沈澱	沈澱・ミガキ	-	-	-	-

土籍（土層部・相忠部）

（ ）復元値

調査	器種	出土地点	層位・取上位置	外面特徴	内面特徴	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
7.1	甕	SH1	覆土 P2 P5	ケズリ	ハラナデ	-	(11.0)	7.8	外底面：ケズリ
7.2	甕	SH5	覆土	ヨコナデ→ケズリ	ヨコナデ→ハラナデ	-	-	-	-
7.3	甕	SH5	覆土 P-2	ケズリ	ハラナデ	-	-	-	口縁部ハラナデ部略
7.4	甕	SH5	覆土	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ→ハラナデ	-	-	-	外面：胴部の一部に白色物質付着 内面：縦状物質付着
7.5	杯	SD01	覆土	ロクロナデ	ロクロナデ→ミガキ	-	-	-	内面：黒化処理
7.6	甕	SD01 P60	覆土	ヨコナデ→ケズリ	ヨコナデ→ハラナデ	-	-	-	内面：白色物質付着
8.10	杯	IV-16→IB-22	表土	ヨコナデ→ケズリ	ミガキ	-	-	-	内面：黒化処理
8.11	杯	IV-16→IB-22	表土	ヨコナデ→ケズリ	ミガキ	-	-	-	内面：黒化処理
8.12	甕	IV-16→IB-22	表土	ヨコナデ→ミガキか	ヨコナデ	-	-	-	-
8.13	甕	IV-16→IB-22	表土	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-
8.14	甕	IV-16→IB-22	表土	ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ→ハケメ	-	-	-	-
8.15	杯	BG-25	表土	ロクロナデ→ケズリ・ミガキ	ロクロナデ→ミガキ	(14.7)	5.3	(6.9)	内面：黒化処理
8.16	杯	BG-25	表土	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ→ミガキ	-	(4.6)	4.8	内面：黒化処理
8.17	杯	BG-25	表土	ロクロナデ	ロクロナデ	14.3	3.1	6.0	外底面：尖脚状
8.18	杯	BG-25	表土	ロクロナデか	ミガキ	-	-	-	内面：黒化処理
8.19	杯	BG-25	表土	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	-	(3.5)	(7.0)	外底面：ケズリ
8.20	甕	BG-25	表土	ロクロナデ→ケズリ→ミガキ	ロクロナデ→ミガキ	-	-	-	-

## 瓦葺

調査	出土地点	取上番号	層位	瓦種	初測年	表径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
7.7	SK07	-	覆土	「工」型	-	-	-	09	-
7.8	SP16	-	覆土	寛永通寶（古）	1636	2.4	06	20	-
7.9	SP25	-	覆土	洪武通寶	1368	1.9	06	09	-
8.21	BG-25	-	表土	文久永寶	1863	2.7	07	40	-

## 第3章 千石屋敷遺跡

本報告は第2次調査分に該当し、第1次調査同様、歩道拡幅部分を調査対象としている。作業工程上、調査区をA区(ⅢQ～ⅢX)・B区(VB～VP)・C区(ⅣJ～ⅣT)・D区(ⅢY～ⅣI)・E区(ⅣU～ⅣA)に分割し、状況に応じて更に各区区内を細分化した。遺構確認は八戸火山灰最上層の黄褐色土で行った。遺構番号は既報告の続きを付す。以下、要点中心の記載とし、土層注記および遺構・遺物に関する基礎的事項は、各表に適宜まとめる。

### 第1節 土坑(SK)

30基確認した。構築・廃絶時期の判別可能な遺構は半数程度である。これらは縄文時代ないし中・近世に大別され、後者には土坑墓や堅穴遺構に類似する施設が含まれる。

#### (1) 縄文時代(図16)

2基確認した。SK38・SK44が該当する。双方とも平面は円形、断面は逆台形を呈し、底面に小ピットが認められる。覆土は黒色土由来の自然堆積を主体とする。出土遺物を伴わないため具体的な構築時期は不明だが、一般的に縄文時代早期の構築・廃絶とされる。

#### (2) 中世ないし中世以降の構築(図15～17)

4基確認した。SK22・29・45・50が該当する。SK22は土坑墓であり、SK50もその可能性がある。SK29は、銅製品の捉え方により、近世以降の構築・廃絶となる可能性を残す。

**SK22**(図15) 土坑墓である。楕円形を呈し、堆積土は黒色土を主体とする。人骨のほか、渡来銭(図20-1～12)・紅皿(図19-1)が出土した。紅皿は断片化しており、時代も大きく異なるため、副葬品とはみなし難く、後世の偶発的混入が疑われる。被葬者は成人(後半)～熟年であり、女性の可能性が高く、骨粗鬆症が認められる。放射性炭素年代測定では15世紀、あるいはこれよりやや新しい時期とされる。海産物を主食としていた可能性が示されたほか、同じくイネ等のC<sub>3</sub>植物やアワ・ヒエ・キビ等の雑穀が含まれるC<sub>4</sub>植物を摂取していた可能性も示された。埋葬年代は、宣徳通寶の初鑄年である1433年以降を示す。

**SK29**(図15) 深さ90cm以上の円形を呈し、柱穴の可能性も考えられる。□武□寶1(図20-13)、銅製品1(図21-22)が出土した。銅製品は縁辺の整形も考えられ、表面には梅ヶ枝のような隆起も観察される。近世鑄造の柄鏡等の断片の可能性が挙げられるが、詳細不明である。本遺構の年代は、銅銭を洪武通寶と捉えた場合、1368年以降の構築・廃絶を示す。

**SK45**(図16) 円形の井戸とみられ、深さは160cm以上である。安全対策上、一定の深さで作業を中断した。永楽通寶1(図20-28)の出土により、1408年以降の構築・廃絶を示す。

**SK50**(図17) 平面形状はやや不整形気味、断面形状は袋状を呈する比較的大型の土坑である。明確な人為堆積層(2層)が認められる。覆土中より青磁片1(図19-10)・永楽通寶4(図20-32～35)・和釘1(図21-18)・骨片が出土した。骨片は哺乳綱の確認に留まった。最新遺物より、1408年以降の構築・廃絶を示す。

#### (3) 近世ないし近世以降の構築(図15～17)

11基確認した。SK30・33・34・36・37・41・43・46・47・48・49が該当する。SK43は土坑墓である。

SK33もその可能性が高い。SK47は江戸時代後期頃に廃絶した竪穴遺構とみられ、注目される。その他は、近世以降のいずれかの段階における構築・廃絶を示す。

**SK30** (図15) 遺構の重複関係においてSK33より後出する。よって、1697年以降の構築を示す。

**SK33** (図15) 土坑墓の可能性が高い。円形ないし楕円形とみられる。渡来銭(図20-14~16)・寛永通寶(図20-17)・種実遺体・骨片が出土した。骨は、哺乳綱の確認に留まった。種実遺体は銭に付着しており、ヒエの有ふ果と同定された。全ての試料に苞が認められないため、脱殻後のものを副葬したと考えられる。最新遺物より、1697年以後の埋葬を示す。

**SK34** (図15) 規模は比較的大きいが、不整形で底面の凹凸も著しい。寛永通寶1(図20-18)が出土した。最新遺物より、1636年以後の構築・廃絶を示す。規格的・恒久的施設というよりも、むしろ土取りや廃芥処理などというような一過性の強い施設を想起させる。

**SK36** (図16) 円形ないし楕円形を呈する。寛永通寶1(図20-19)、和釘1(図21-12)が出土した。最新遺物より、1636年以後の構築・廃絶を示す。

**SK37** (図16) 円形ないし楕円形を呈する。寛永通寶1(図20-20)が出土した。最新遺物より、1697年以後の構築・廃絶を示す。

**SK41** (図16) 平面形状は方形である。底面の四隅周辺に小規模な柱穴が複数設けられ、長軸2m、短軸1.5m程の規模だったことが解る。確認面から底面までの深さは70cmほどを測るが、上面の攪乱・削平を加味すれば更に数十cmほど深かったと考えられる。底面は平坦化されており、全体的に硬化している。覆土中には、明確な人為堆積(3・4・6層)が認められる。永楽通寶3(図20-21~23)・寛永通寶1(図20-24)が出土した。最新遺物より、1697年以後の構築・廃絶を示す。

**SK43** (図16) 円形の土坑墓である。人骨のほか、寛永通寶3(図20-25~27)・漆塗膜の副葬品が出土している。被葬者は4~5才の幼児であるため性別不明だが、男性の可能性が指摘された。漆器とみられる塗膜片は、炭粉下地にベンガラの赤色漆層1層と判明した。最新遺物より、1668年以後の埋葬を示す。

**SK46** (図17) 平面が一辺2m以上の規模となる方形ないし長方形の竪穴遺構である。深さは70cm以上あったとみられ、底面ないし床面は平坦化されている。覆土は全て人為的な埋戻しである。本遺構の構築は、寛永通寶1(図20-29)の出土により1636年以後である。廃絶は隣接するSK47との重複・新旧関係から江戸時代後期以前と考えられる。

**SK47** (図17) 3.3m四方の竪穴遺構である。壁面は人為的に粘質土が貼り付けられており(5層)、本来、いわゆる地山が露出しない状態で機能していたと考えられる。底面上には柱穴が規格のかつ等間隔気味に並ぶ。東西方向は柱間90cm(3尺)で3間と推測され、東西方向は5間で柱間は不等長である。確認面から底面までの深さは100cmほどを測るが、本来の深さは上部の攪乱・削平を加味すれば更に数十cmほど深かったと考えられる。底面は平坦化され、全体的に硬化している。底面上には炭化材を伴う広範囲かつ不整形気味の被熱範囲が認められ、焼失したことをうかがわせる。覆土は炭化物や黄褐色の土塊を多く含む人為堆積であり、焼失直後の埋戻しが想定される。出土遺物は、寛永通寶(図20-30)・煙管吸口(図21-21)・和釘等の鉄製品(図21-13~15)・陶磁器(図19-2~8)・漆器片である。底面の被熱範囲付近および覆土(4層)には炭化材(コナラ属コナラ節)・生木(マツ属複雑管束亜属)が含まれている。前者は3cm角以下の破片を主体とし、角材らしき部位や、みか

人割り状の部位を含む。後者は半径2cm以下の丸木である。また、漆器の塗膜片は、炭粉下地にベンガラ赤色漆層1層であり、SK43出土品よりもベンガラの含有量がやや多い。陶磁器および鉄製品は、人為堆積土である4層に一括廃棄された状況を示す。最新遺物より江戸後期頃の廃絶が考えられる。碗(8)が小久慈焼だとすれば、その操業開始年とされる文化10年(1813)以降の廃絶となる。

**SK48**(図17) 長方形の規格的な堅穴遺構とみられる。北隣に類似するSK49が存在し、重複関係からすると本遺構の方が新しい。遺構上面は攪乱・削平が著しいものの、少なくとも50cm以上の深さがあったとみられる。底面ないし床面は平坦化されている。床面直上には黒色土(4層)が形成され、その上部に粘土層(3層)と焼土層(2層)が、更に上部には人為的な埋戻し(1層)も認められる。覆土中から寛永通寶1(図20-31)・和釘1(図21-16)・産地不明の陶器片1(図19-9)が出土した。最新遺物より1697年以後の構築・廃絶を示す。

**SK49**(図17) SK48に隣接し、かつ同様に長方形の規格的な堅穴遺構とみられる。平面形状は長方形、底面は平坦化されている。深さはSK48よりも本遺構の方がわずかに深い。和釘1(図21-17)が出土した。遺構の重複・新旧関係より、1697年以後の構築・廃絶を示すSK48以前に構築され、廃絶している。

#### (4) 時期不明(図15～17)

13基確認した。SK23・24・25・26・27・28・31・32・35・39・40・42・51が該当する。年代推定の根拠となる遺物を伴わず、遺構構築面や遺構重複・新旧関係などからの検討も困難な遺構である。SK24は柱穴の可能性も考えられる。以下、特徴のある遺構についてのみ言及する。

**SK27**(図15) 骨片出土により、土坑墓の可能性がある。調査区内における類例からすると、中世もしくは近世のいずれかに設けられたと考えられる。骨は哺乳綱の確認に留まった。

**SK35**(図16) 平面が一辺2.1m程の規模となる方形ないし長方形の堅穴遺構である。深さは100cm以上あったとみられ、底面ないし床面は平坦化されている。南西隅が近・現代の攪乱によって大きく破壊されているため、これ以前の構築・廃絶を示す。

**SK42**(図16) 円形を呈する井戸である。安全対策上、一定の深さで作業を中断した。

**SK51**(図17) 平面が一辺2.1m程の規模となる方形の堅穴遺構である。深さは70cm以上あったと考えられ、底面ないし床面は平坦化されている。2点鏝着したとみられる和釘(図21-19)が出土した。1636年以後の構築・廃絶を示すSK46に類似する。

## 第2節 溝状土坑(SV)

1基確認した。平坦地に築かれている。

**SV01**(図18) 長軸は北西から南東方向となる。遺構内の堆積土は黒色土由来の自然堆積を主とする。出土遺物を伴わないため具体的な構築時期は不明であるが、考古学的傾向より縄文時代後期の構築・廃絶と思われる。

## 第3節 柱穴(SP)・掘立柱建物跡

369基認められた(図9～14)。建物の一部ないしは堀などの施設が存在した様子を示す。最も古い事例は中世後半段階に位置づけられ、その他は中・近世のいずれかの段階が時期不明となる。なお、調査区内には近・現代の柱穴も散在していたため(調査・報告対象外)、報告中の遺構についても比

較的最近の事例を含んでいる可能性が否定できない。各遺構の年代決定および建物等の施設復元は、出土遺物を伴わない遺構が大多数を占めるうえ、調査範囲の制約およびその全体におよぶ整地・攪乱の影響等もあり容易ではないが、まずは出土遺物に基づいて年代推定が可能な遺構を整理したのち、各区分に従って施設の復元および年代推定を試みる。

#### 1. 出土遺物

12基認められる。SP459・471・474は永楽通寶のみの選択的埋納の可能性が極めて高い。SP322も、これに類似する可能性がある。他は断片化した資料が中心であり、構築・廃絶時等の混入とみられる。

SP294(図14左) 銅製品1(図21-23)が出土した。緑金の一種あるいは襖の把手のようにもみえる。製作年代は不明であるため、遺構の構築・廃絶についても言及し難い。

SP313(図14左) 永楽通寶1(図20-36)が出土したため、1408年以後の構築・廃絶を示す。

SP322(図14左・18) SP326と重複し、本遺構が古い。永楽通寶2(図20-37・38)、不明貨幣1(図20-39)が出土した。よって、本遺構は1408年以後の構築・廃絶を示す。永楽通寶が一定量出土する特徴は、後述するSP459などに類似する。

SP325(図14左) 陶器片1(図19-11)が出土した。瀬戸・美濃編年の大釜4期後半～末(1590年代末～1610年頃)の折縁皿とみられる。よって、本遺構は上記の年代以後の構築・廃絶を示す。

SP326(図14左・18) SP322と重複し、本遺構が新しい。煙管雁首(図21-20)が出土した。製作年代は古泉弘氏の示すⅢ段階(18世紀前半)とみられるため、本遺構の構築・廃絶は上記の年代以後である。

SP384(図11) 瓶類と思われる陶器片(図19-12)が出土した。産地および時期不明。江戸時代半ば以降の製品か。よって、本遺構は上記の製作年代以後の構築・廃絶と思われる。

SP459・471・474(図12左・18) 本節2項にあるとおり、一連の施設を構成する。各遺構からは永楽通寶のみが出土しており、SP459で2点(図20-40・41)、SP471で10点(図20-42～46、図21-1～5)、SP474で4点(図21-6～9)を掲載した。大多数が非常に脆く、更には遺構内からの取上すら困難だったものも幾つか存在したため、掲載以上の数が埋納されていたことは確かである。銭貨の出土位置は、3基とも平面上は南東側の壁際に偏る傾向がある。いずれも柱痕は認められなかったが、柱の存在が予測される遺構中央付近からは出土していない。また、断面上は底面付近に多く、一部、遺構確認面付近から遺構中程の深さにも分布する。以上の規則性より、同一施設を構成する3基の柱穴において、柱南東側の壁際埋土中における永楽通寶の選択的・意図的埋納による祭祀・儀礼的行為が働いた可能性が高いとみる。時期は1408年以降の中世後半段階と考えられる。

SP494(図12) 陶器片1(図19-13)が出土した。細い呉須により人物(唐子か)の腕と手が描かれている模様である。肥前系V期(18世紀末～19世紀)の製品か。よって、本遺構の構築・廃絶は上記の年代以後を示す。

SP540(図12) 陶器片1(図19-14)が出土した。瀬戸・美濃系の腰銘碗である。18世紀後半～19世紀の製品とみられることから、本遺構の構築・廃絶は上記の年代以後を示す。

SP582(図13) 陶器片1(図19-15)が出土した。瀬戸・美濃系腰銘碗の小破片とみられる。18世紀～19世紀の製品とみられることから、本遺構の構築・廃絶は上記の年代以後を示す。

## 2. 埋納遺物と考えられる銭貨によって構成される施設（中世後半）

1件提示する。先述のとおり、各柱穴内に永楽通寶を選択的に埋納した稀な事例である。永楽という吉祥文字に因んだ地鎮等の祭祀的行為が想定される。

**SP459・471・474** (図12左) IVR-61一帯に存在する。掘立柱建物の一部もしくは塚か。同程度の規模の柱穴が一直線上に並ぶ。南北軸は $N-34^{\circ}-E$ 。最大の特徴は、いずれの覆土中にも永楽通寶ばかりを一定量含む点にある。このため、これらは同時期に同一の施設として構築された可能性が極めて高いが、東側が調査区外にあたるため、具体的な平面形状は不明である。柱間は、SP471からSP474が240cm（8尺）程、同じくSP474からSP459が270cm（9尺）程、SP471からSP459が510cm（17尺）程である。確認面からの深さはSP459が20cm、SP471が26cm、SP474が25cmと似通っている。参考までに、銭貨の埋納は認められなかったものの、SP459の南西側に位置するSP490・503も同一線上に並ぶ。柱間は、SP459からSP503が240cm（8尺）程、同じくSP503からSP490が240cm（8尺）程となる。

## 3. 塚または掘立柱建物跡とみられる施設の存在が指摘される事例（中世末～近世初頭）

1件提示する。中世後半～近世初期の陶磁器片・銭貨を含む遺構によって構成される。

**SP313・322・325** (図14左) IIIV-48一帯に存在する。柱間240cm（8尺）程で一直線上に並ぶ。南北軸は $N-28^{\circ}-E$ 。覆土中に中世後半～近世初期の陶磁器片・銭貨を含む遺構によって構成される。よって、これらの遺構は同時期に同一の施設として構築された可能性が極めて高い。SP311等によって構成される掘立柱建物跡との関連性については、次の本節4項を参照のこと。

## 4. 掘立柱建物跡とみられる施設の存在が指摘される事例（江戸時代以降）

5件提示する。年代が比較的明らかな遺構との重複関係や位置関係などから、全て江戸時代以降の構築・廃絶を示す事例である。南北軸 $N-28^{\circ}-E$ 前後と $N-32^{\circ}-E$ を示すものは、18世紀以降が確実視されるSK41やSK47などに類似し、柱間190cm（6.3尺）が認められる。他方、SP254ほかは、江戸時代前期から中期頃の構築・廃絶の可能性がある。

**SP460・472・478・486・491** (図12左) IVR-60一帯に存在する。南東および南西側が調査区外に延びる可能性がある。現状は長方形の掘立柱建物跡とみられ、 $1 \times 2$ 間、 $270 \times 380$ cm程の規模である。南北軸は $N-27^{\circ}-E$ 。4隅がSP472・478・491（北東部はSK41との重複により欠失）、中間がSP460・486によって構成される。柱間は190cm（6.3尺）程と270cm（9尺）程がみられる。隣接するSK41との重複・新旧関係については判断できなかったが、SP460・SP472に規模が類似し、かつ同一線上に存在するSP466が本遺構に関わるものとすれば、SK41より後出することになる。

**SP532・535・536・538・541・554・555・562** (図12右) IVL-57一帯に存在する。南西側が調査区外に延びる可能性がある。現状は方形の掘立柱建物跡であり、 $2 \times 2$ 間、210cm（7尺）四方程度の規模となる。南北軸は $N-32^{\circ}-E$ 。四隅はSP532・536・541・555、中間はSP535・538・562で構成される。SP541とSP555の間には柱穴が見当たらず、調査区外への延伸を暗示させる。柱間は90cm（3尺）程、120cm（4尺）程がみられる。重複関係からすると、本建物跡のSP541・562がSK49の覆土中に築かれているため、SK49よりも新しいと判断される。これは同一地点に形成されたSK48と同じである。そのSK48との新旧を明らかにする証拠は見当たらないが、両者の軸方向が非常に近いため、

近似する年代が想定される。あるいは、本建物跡はSK48の上屋だった可能性も考えられる。その場合、SK48の最新出土遺物より1697年以後の構築・廃絶となる。

SP537・542・563・565 (図12右) IVM-57一帯に存在する。南西側が調査区外に延びる可能性がある。現状は長方形の掘立柱建物跡であり、1×1間、120cm(4尺)×190cm(6.3尺)程度の規模である。南北軸はN-29°-E。SK48との前後関係は不明である。前述のSP532と同様に、SK49との軸方向の近似性や位置関係の調和性から判断すると、本建物跡はSK49の上屋だった可能性も考えられる。この場合、SK48とSK49の遺構重複・新旧関係より、1697年以後の構築・廃絶を示すSK48以前の構築・廃絶となる。

SP311・313・314・318・323・326 (図14左) IIIV-48一帯に存在する。南東側と南西側が調査区外に延びる可能性がある。現状は長方形の掘立柱建物跡であり、1×2間、190～200cm(6.3～6.5尺)×510cm(17尺)程の規模となる。南北軸はN-28°-E。四隅はSP311・313・314・326、中間はSP318・323で構成される。柱間は190～200cm(6.3～6.5尺)、240cm(8尺)、270cm(9尺)程がみられる。SP326の年代観からすると本建物は18世紀前半以降の構築・廃絶を示すが、本節1項および3項にあるとおり、位置・南北軸・柱間寸法が中世末～近世初頭以降の構築・廃絶としたSP313・322・325と酷似するため、同施設の改修等を想定しておく必要がある。

SP254・260・261・262・263・264・265・267・268・269・271・272 (図14右) III T-47一帯に存在する。南西側が調査区外に延び、SK31が本構成に加わる可能性がある。現状は長方形の掘立柱建物跡であり、1×2間、150cm(5尺)×480cm(16尺)程の規模となる。南北軸はN-35°-E。3回を上限とする柱の据え直し部分が部分的に表れており、建物改修が複数回実施されたことが見込まれる。四隅はイ、SP254、ロ、SP260・261・262、ハ、SP264・(SK31)、ニ、SP268・269・271、中間はホ、SP263・265・267、ヘ、SP272で構成される。柱間は150cm(5尺)、180cm(6尺)、300cm(10尺)程がみられる。1636年以降の構築を示すSK34より新しく、1697年以降の構築を示すSK33より古い可能性がある。

##### 5. 掘立柱建物跡とみられる施設の存在が指摘される事例(時期不明)

4件提示する。時期不明の掘立柱建物である。南北軸はN-29°-EとN-34°-E前後を示す。前者の値は、江戸時代のSK41・SK47、後者は中世後半段階が確実視される本節2項に近い。柱間は、前者に6.3尺が含まれ、後者は6.5尺が主体的である。

SP327・377・434・435・437・446・448 (図10左) VN-72一帯に存在する。南西側が調査区外に延びる可能性がある。現状は長方形の掘立柱建物跡であり、300cm(10尺)×380cm(12.6尺)程の規模となる。南北軸はN-29°-E。四隅はSP327・434・437・448、中間はSP377・435・446で構成される。SP437とSP448の間は柱穴が見当たらず、調査区外への延伸を暗示させる。柱間は150cm(5尺)と190cm(6.3尺)がみられ、後者の寸法からすると付近のSP422・427・449も本構成に含まれ、より大規模化する可能性がある。

SP572・576・578・590・597 (図13右) IVE-53一帯に存在する。南東側が調査区外に延びる可能性がある。現状は長方形の掘立柱建物跡であり、1×2間、210cm(7尺)×380～400cm(12.6～13尺)程の規模となる。南北軸はN-33°-E。四隅はSP572・576・578・597、中間はSP590で構成される。SP576とSP597の間は柱穴が見当たらず、調査区外への延伸を暗に示す。柱間は190～200cm(6.3～6.5尺)と210cm(7尺)がみられる。

SP277・278・279・280 (図14左) III X-49一帯に存在する。南東側が調査区外に延びる可能性がある。

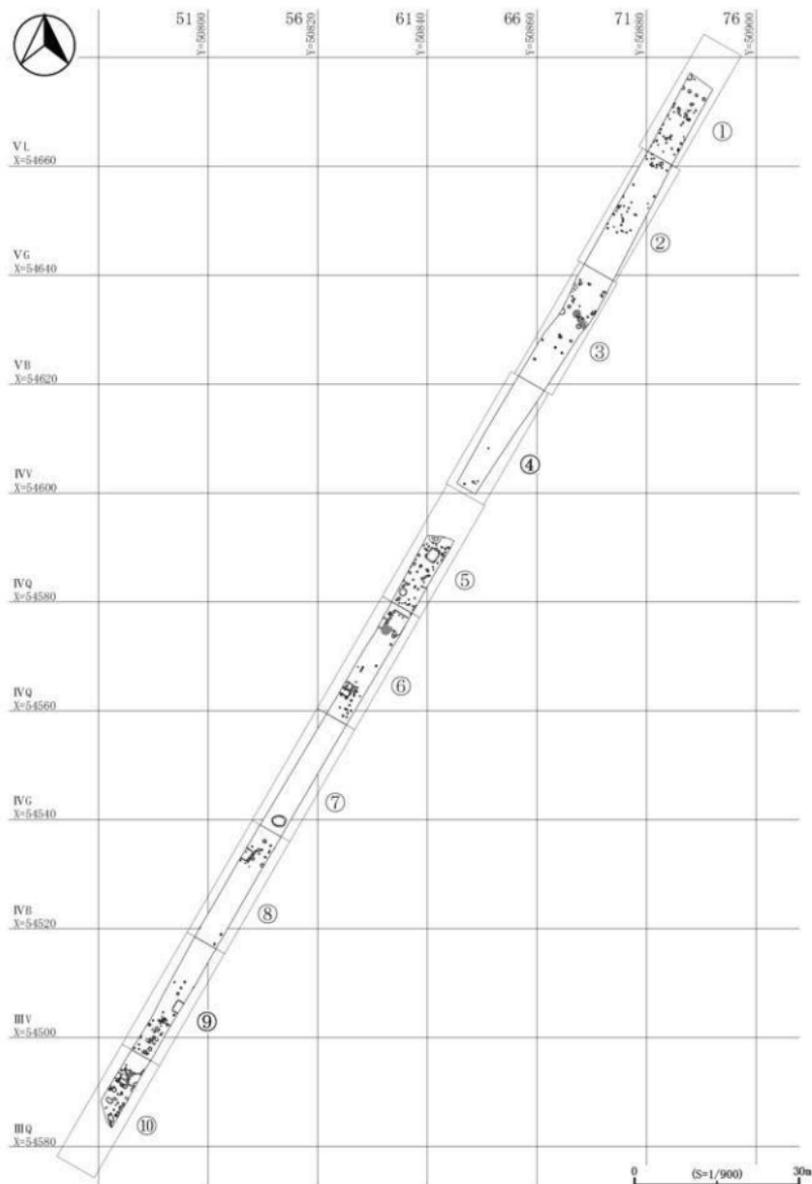


図9 遺構配置① (千石屋敷遺跡)

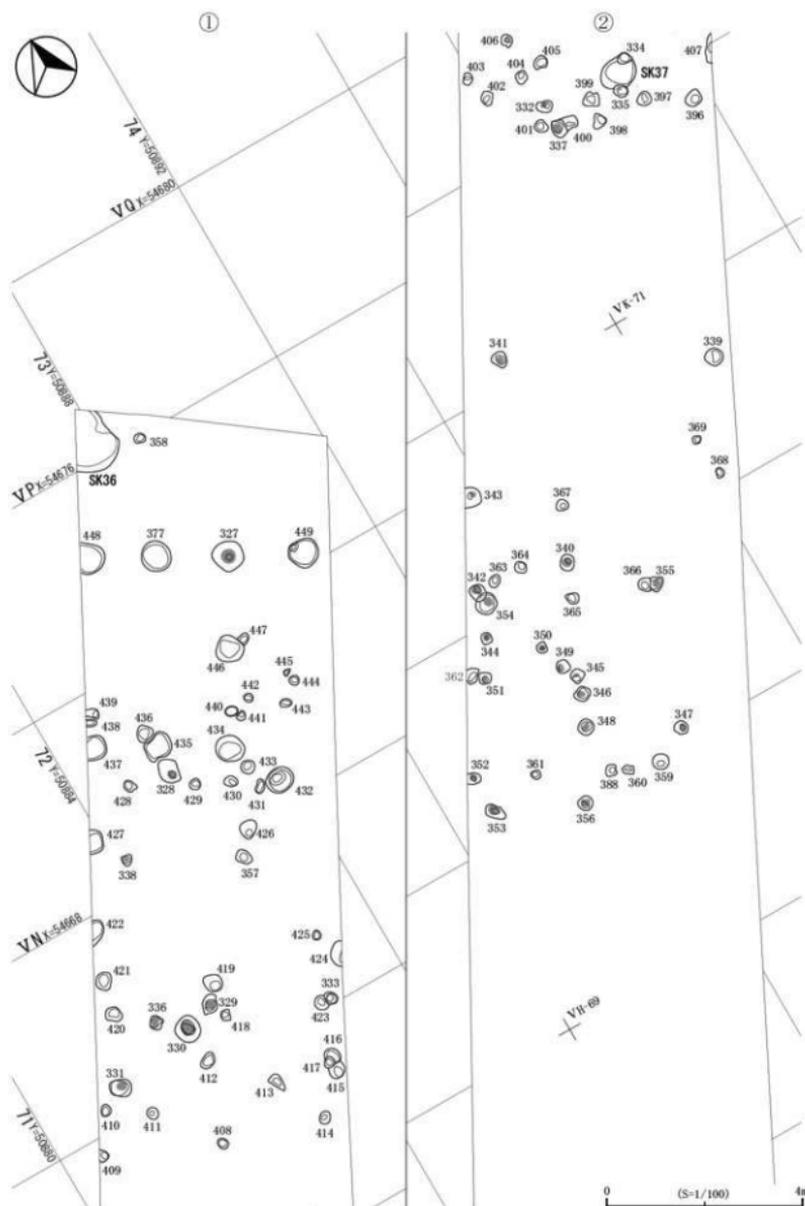


图10 遺構配置② (千石屋敷遺跡)

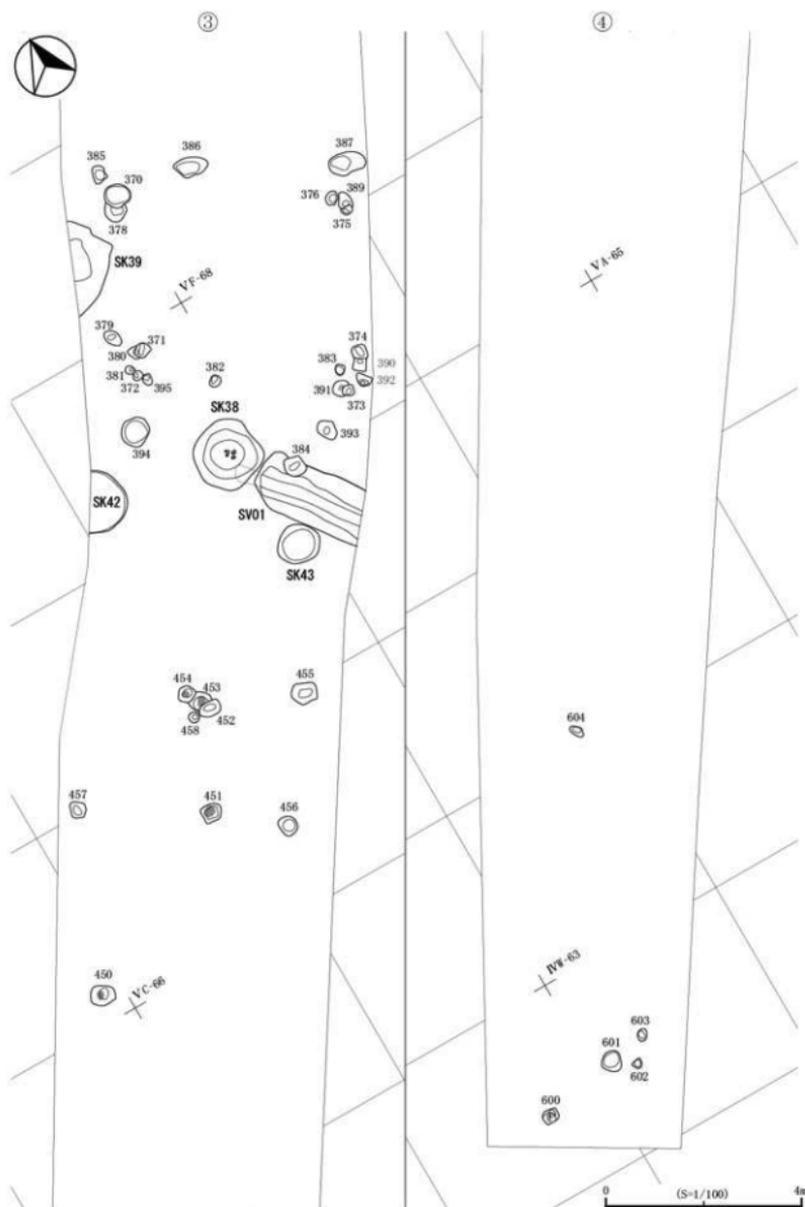


図11 遺構配置③ (千石屋敷遺跡)

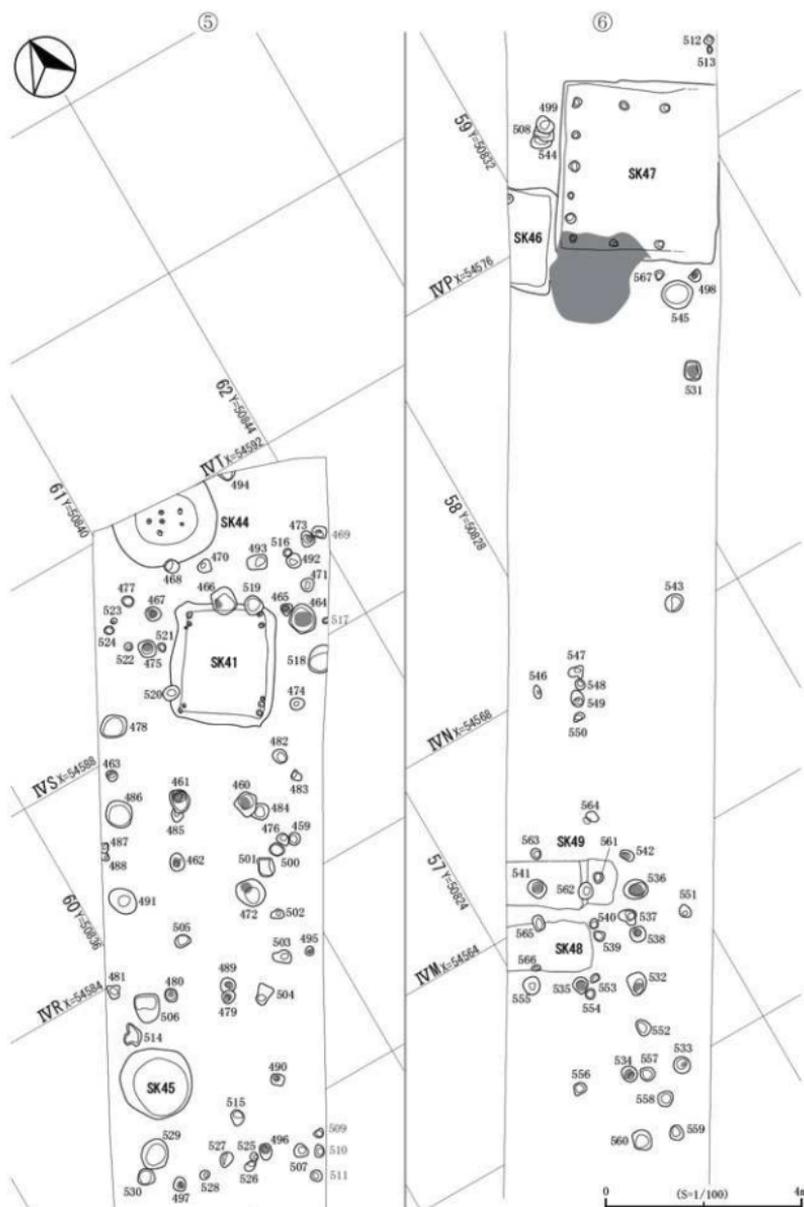


図12 遺構配置④ (千石屋敷遺跡)

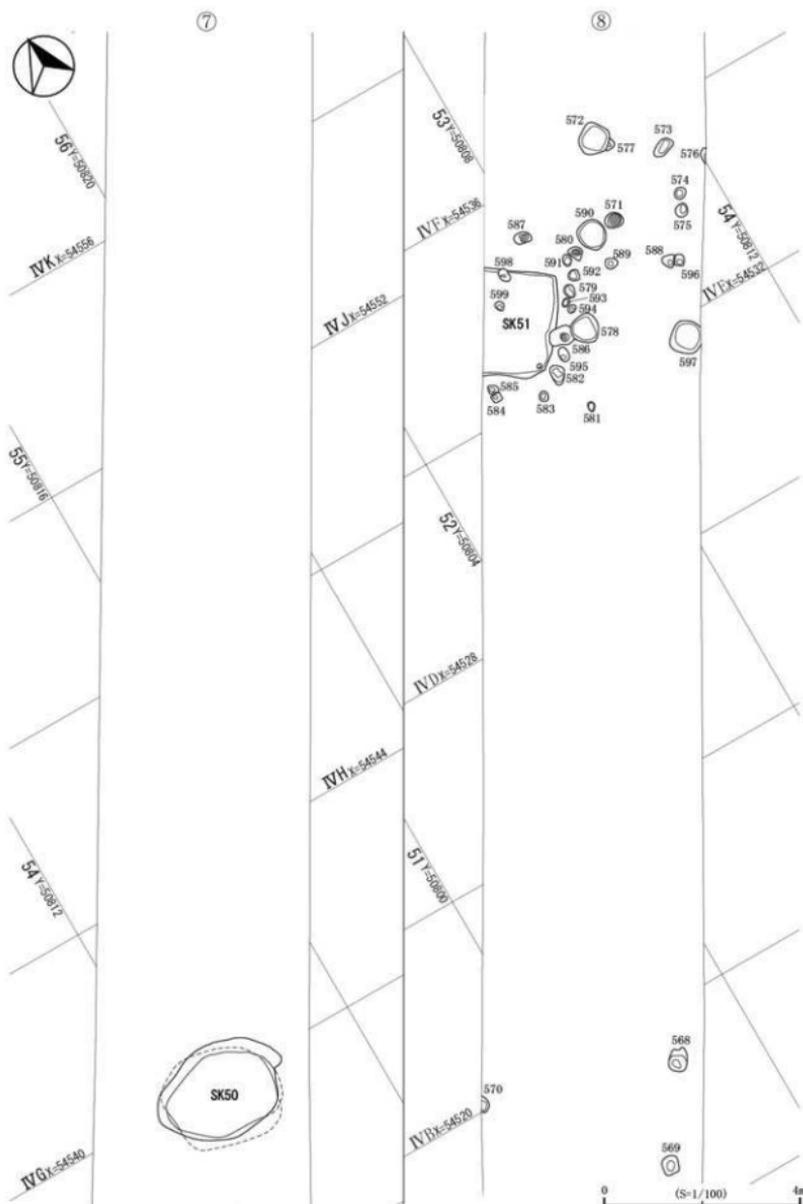


图13 遺構配置⑤(千石屋敷遺跡)

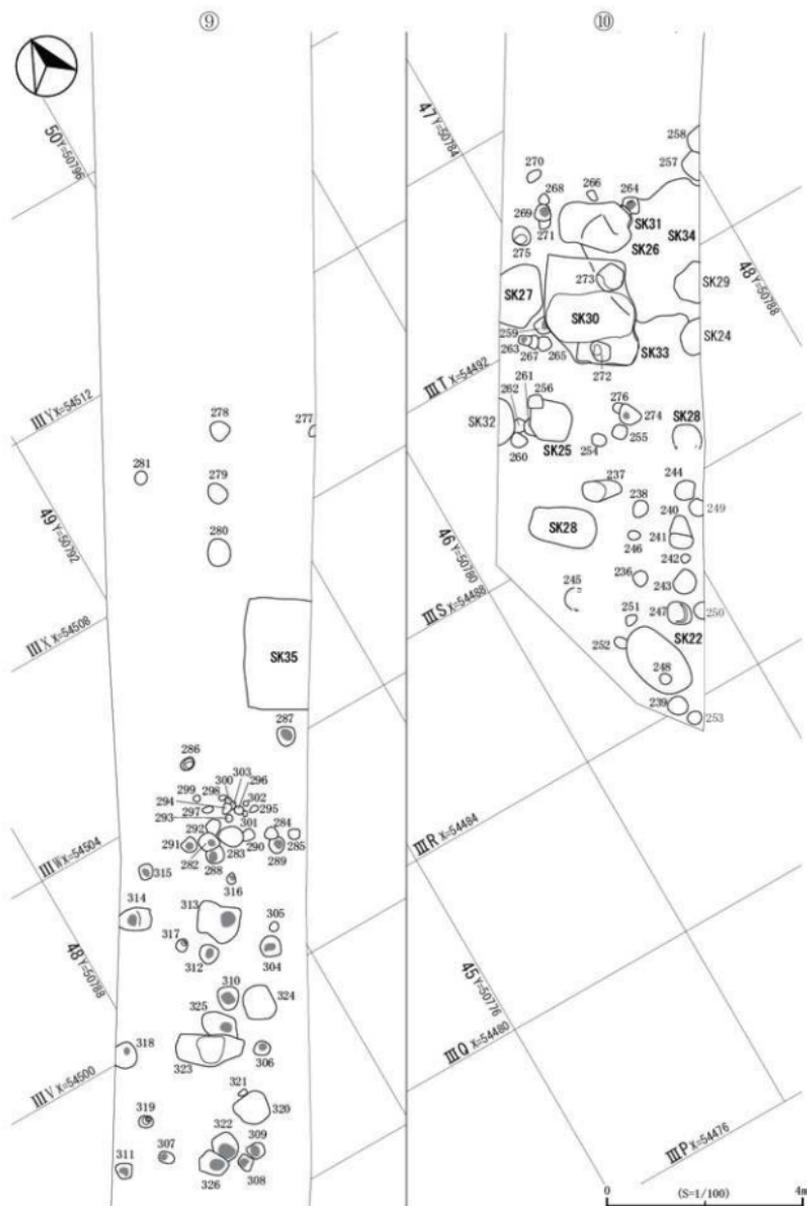


図14 遺構配置⑥ (千石屋敷遺跡)

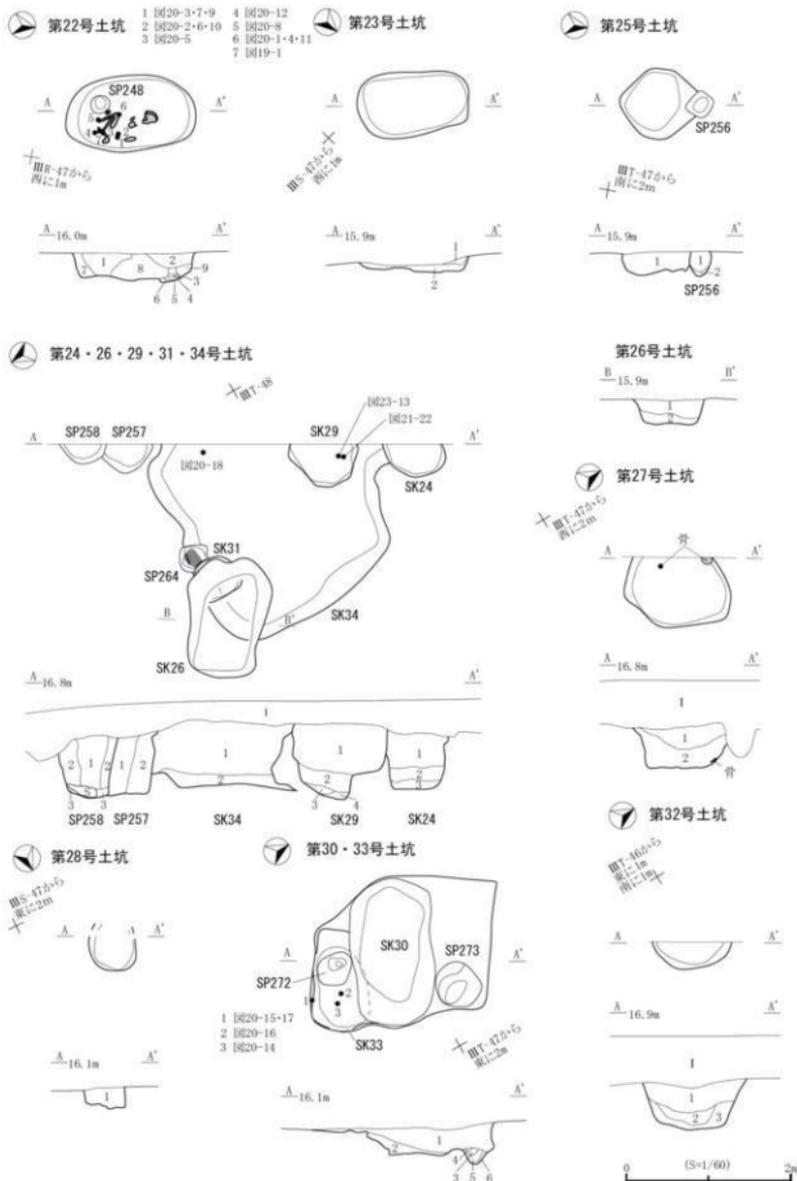


図15 土坑①(千石屋敷遺跡)

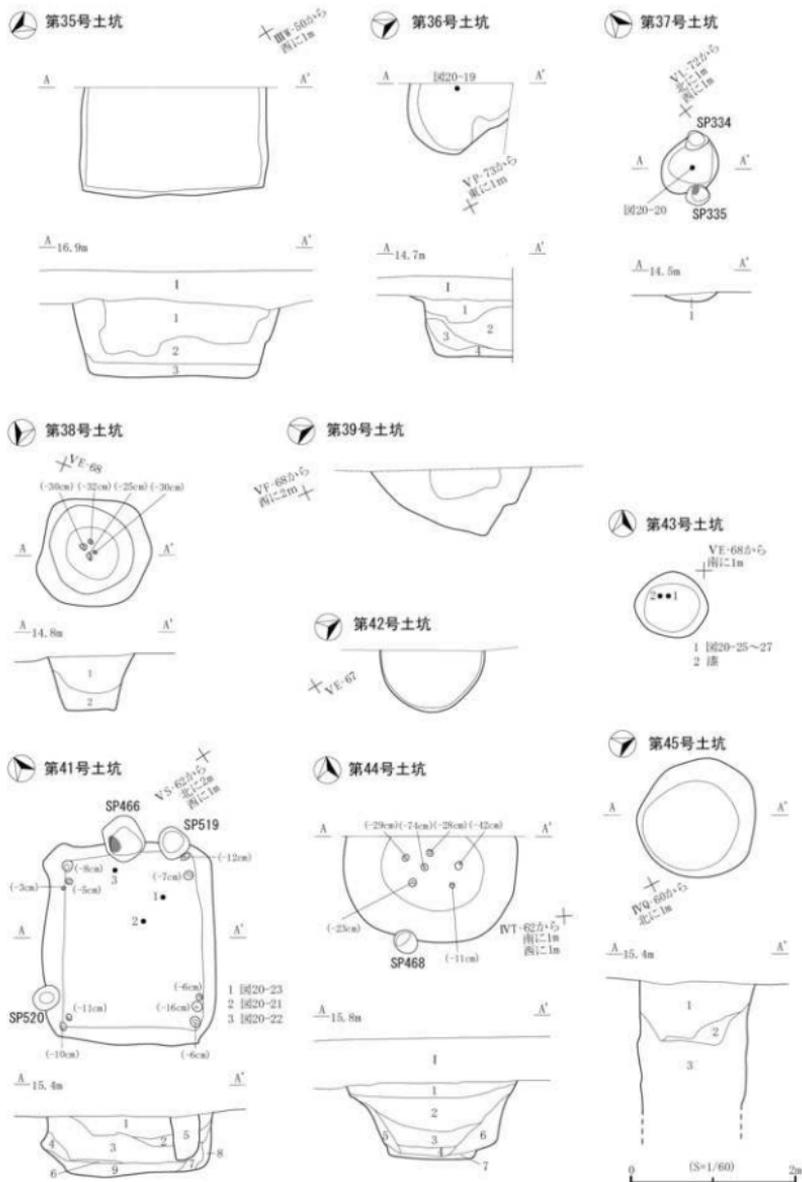
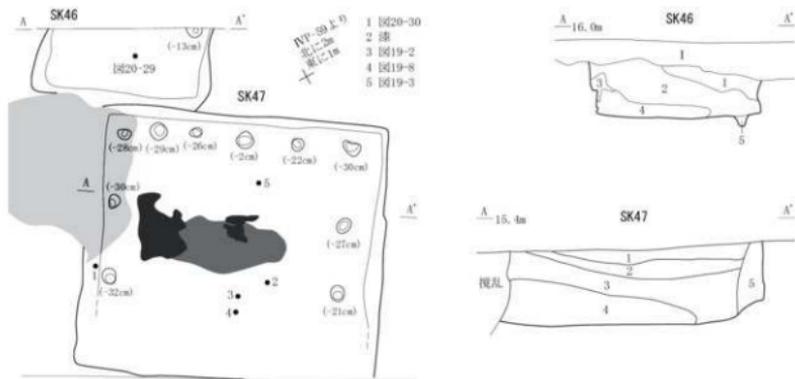
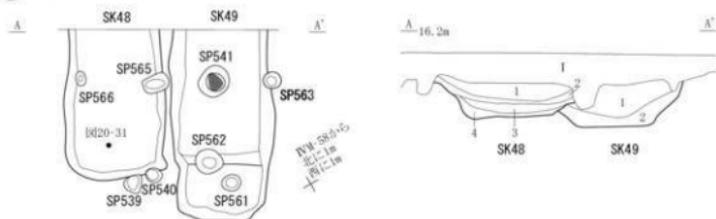


図16 土坑②(千石屋敷遺跡)

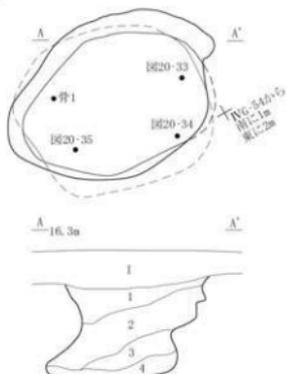
第46・47号土坑



第48・49号土坑



第50号土坑



第51号土坑

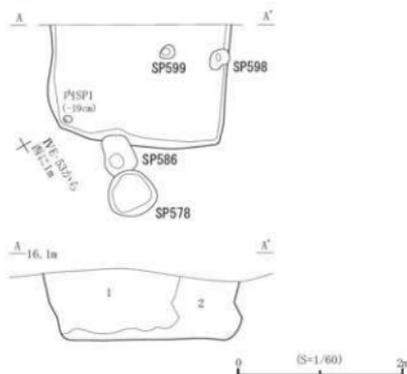


図17 土坑③(千石屋敷遺跡)

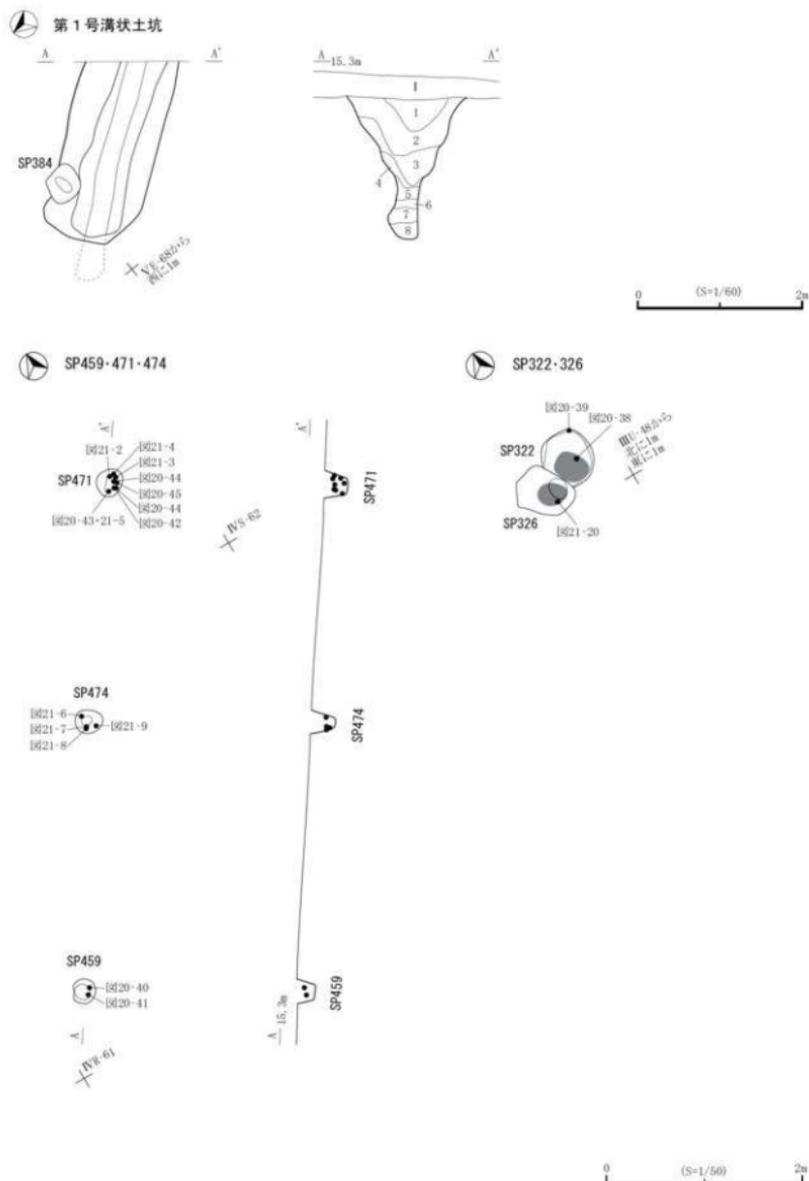


図18 溝状土坑・柱穴 (SP322・326・459・471・474) (千石屋敷遺跡)

現状は長方形の掘立柱建物跡であり、 $1 \times 2$ 間、 $190 \sim 200\text{cm}$  (6.3~6.5尺)  $\times 240\text{cm}$  (8尺) 程の規模となる。南北軸は $N-29^\circ-E$ 。隅はSP277・278・280、中間はSP279で構成される。柱間は $120\text{cm}$  (4尺) 程と $190 \sim 200\text{cm}$  (6.3~6.5尺) 程がみられる。

SP237・239・244・245・247 (図14右) III R-46 一帯に存在する。南東側と南側が調査区外に延びる可能性がある。現状は長方形の掘立柱建物跡であり、 $1 \times 2$ 間、 $200\text{cm}$  (6.5尺)  $\times 440\text{cm}$  (14.5尺) 程の規模となる。南北軸は $N-34^\circ-E$ 。隅はSP237・239・244、中間はSP245・247で構成される。柱間は $2.0\text{m}$  (6.5尺) 程と $2.4\text{m}$  (8尺) 程がみられる。

6. 塀または掘立柱建物跡とみられる施設の存在が指摘される事例 (時期不明)

2件提示する。時期不明であるが、中世後半段階が確実視される本節2項に近い南北軸を示す。

SP287・289・304・306・309 (図14左) III U-48 一帯に存在する。柱間 $210\text{cm}$  (7尺) で一直線に並び、南北軸は $N-35^\circ-E$ 。現状、塀のような施設であるが、調査区南東側に延伸すれば掘立柱建物の一部とも理解される。

SK22



SK47



SK48



SK50



SP325



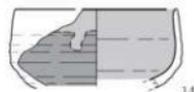
SP384



SP494



SP540



SP582



遺構外



0 (S=1/3) 10cm

図19 遺構内出土陶磁器・遺構外出土土器 (千石屋敷遺跡)

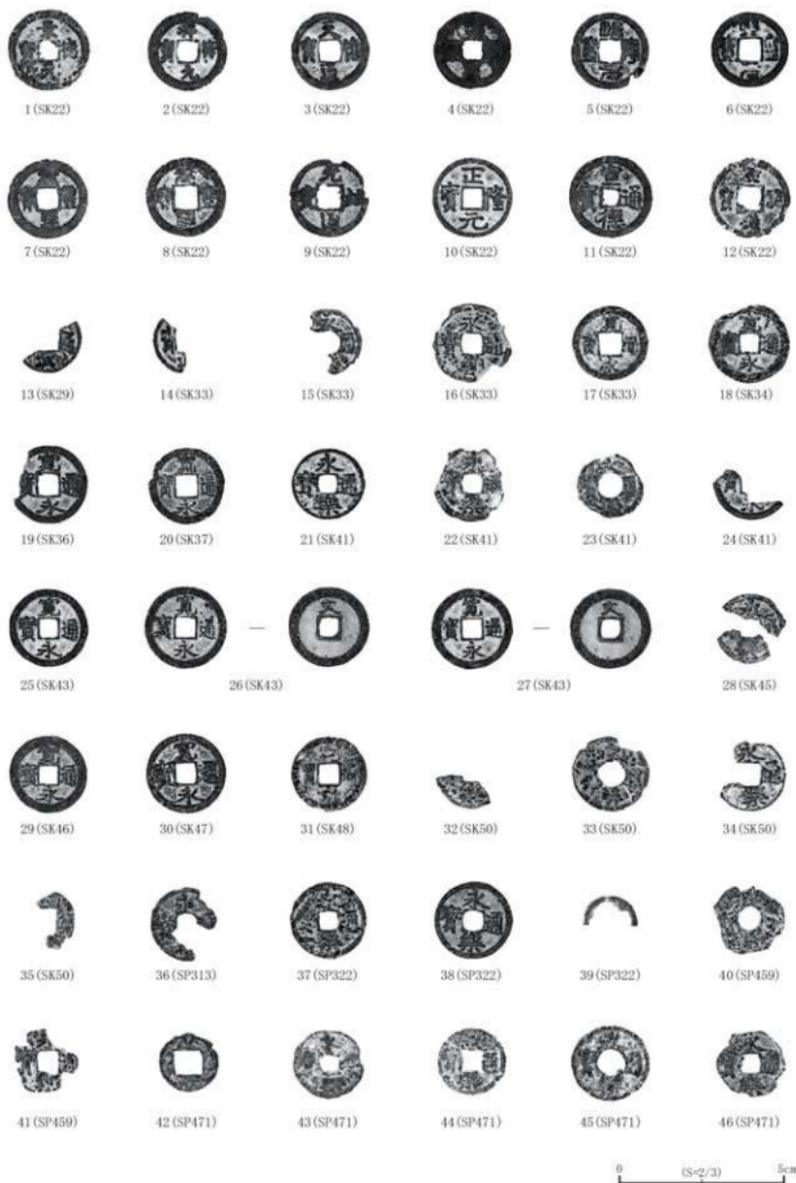


図20 錢貨① (千石屋敷遺跡)

SP258・SK28・SK29 (図14右) ⅢS-47一帯に存在する。柱穴の可能性のある土坑を含む。南北軸はN-34°-E。同一規模の遺構が柱間300cm(10尺)で一直線上に並ぶ。現状、塀のような施設であるが、調査区南東側に延伸し、掘立柱建物となる可能性も考えられる。

#### 7. 塀とみられる施設の存在が指摘される事例(時期不明)

2件提示する。南北軸は、各々、中世後半と江戸時代に調和する。

SP461・462・468・470・485・492・493・505・520 (図12左) ⅣS-61一帯に存在する。南北軸はN-28°-E。塀のような施設か。SP520とSK41の新旧関係より、江戸時代後期以降の構築・廃絶を示す。柱間に統一性はないが、平面上は規格的であるため、存在の指摘に留めておく。

SP479・480・481・489・504 (図12左) ⅣQ-60一帯に存在する。南北軸はN-123°-E。中世後半を示す南北軸に直交する。塀のような施設か。柱間に統一性はないが、一直線に並ぶため存在のみを指摘する。

### 第4節 遺構外出土遺物

縄文時代晩期後半の土器片(図19-16・17)、奈良時代の土師器片(図19-19)・平安時代の土師器片(図19-18)、永楽通寶(図21-10)、寛永通寶(図21-11)を図示した。(佐藤)

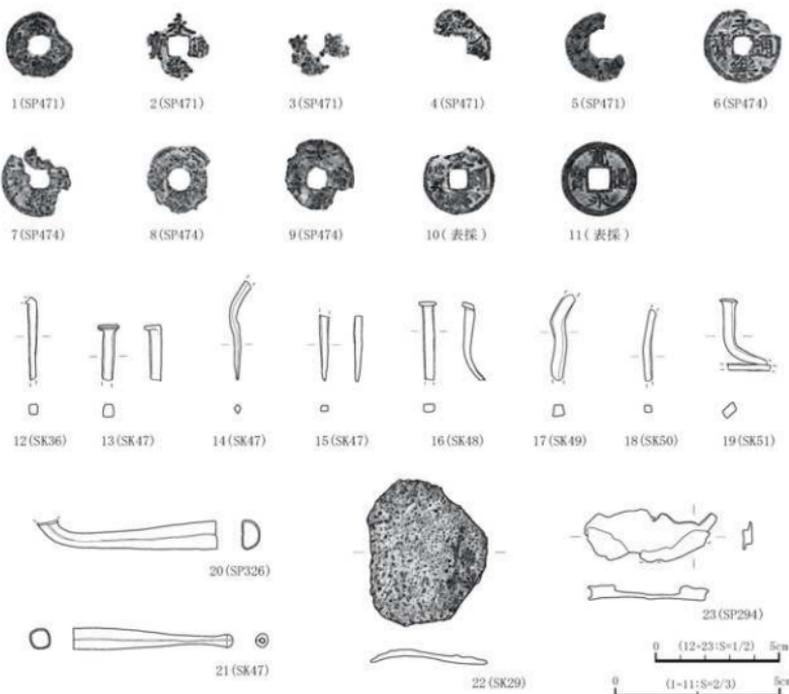


図21 銭貨②・金属製品(千石屋敷遺跡)

## 土層注記

基本層序 (目5-6) 写真2

層番号	土色	マンセル記号	含有物
I	黒褐色土	10YR3/1	礫 (φ10～50mm) 5%、根元および整地層。
II	黒色土	10YR2/1	10YR3-2暗褐色土20%。
III	暗褐色土	10YR3/3	10YR3/1暗褐色土20%、浮石 (φ10mm) 1%。
IV	暗褐色土	10YR3/4	10YR3-2暗褐色土10%、浮石 (φ10mm) 2%、黒色土～黄褐色土の薄層層。
V	黄褐色土	10YR5/6	浮石 (φ10mm) 5%、八丁次山尻官堀。

第22号土坑 (SK22) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	暗褐色土	10YR2/2	黄褐色土 (φ5～10mm) 2%。
2	黒色土	10YR1/1	黄褐色土 (φ1～40mm) 7%。
3	暗褐色土	10YR3/4	
4	黒色土	10YR2/1	
5	褐色土	10YR4/6	
6	黒色土	10YR2/1	
7	暗褐色土	10YR2/2	黄褐色土 (φ3～20mm) 2%。
8	暗褐色土	10YR2/2	黄褐色土 (φ5～40mm) 10%。
9	暗褐色土	10YR2/2	黄褐色土 (φ5～10mm) 1%。

第23号土坑 (SK23) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	
2	黒色土	10YR2/1	10YR6-6明黄褐色土1.30% (プロック状に混入)。

第24号土坑 (SK24) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1/1	10YR5-8黄褐色土 (φ10～50mm) 5%。
2	黒色土	10YR2/1	25YR4-6赤褐色土 (φ20mm) 1%。
3	暗褐色土	10YR2/2	10YR4-6褐色土 (φ40mm) 20%。

第25号土坑 (SK25) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1/1	黄褐色土 (φ3～30mm) 3%。

第26号土坑 (SK26) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	暗褐色土	10YR2/2	浮石 (φ1～15mm) 1%。
2	暗褐色土	10YR2/3	10YR4-6褐色土 (φ30～100mm) 30% (プロック状に混入)、浮石 (φ3～5mm) 3%。

第27号土坑 (SK27) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1/1	浮石 (φ1～3mm) 1%。
2	黒色土	10YR1/1	10YR3-2暗褐色土2.20%、浮石 (φ1～2mm) 1%。

第28号土坑 (SK28) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1/1	10YR3-4暗褐色土1.10%、10YR6-6黄褐色土 (φ1～3mm) 2%。

第29号土坑 (SK29) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1/1	10YR5-8黄褐色土 (φ2～10mm) 10%。
2	黒色土	10YR2/1	10YR5-8黄褐色土 (φ10～40mm) 7%。
3	褐色土	10YR4/6	10YR5-8黄褐色土 (φ5～20mm) 2%。
4	黒色土	10YR2/1	10YR4-6褐色土 (φ30mm) 2%。

第30号土坑 (SK30) 図15

層番号	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1/1	10YR6-6黄褐色土 (φ3～10mm) 5%、浮石 (φ5～20mm) 3%。
2	暗褐色土	10YR2/2	10YR6-6黄褐色土 (φ10～50mm) 10%、浮石 (φ3～10mm) 1%。
3	黒色土	10YR2/1	浮石 (φ1mm) 1%。
4	褐色土	10YR4/6	
5	暗褐色土	10YR2/2	浮石 (φ1mm) 1%。
6	暗褐色土	10YR3/4	10YR7-6明黄褐色土1.5%、浮石 (φ1mm) 1%。

第32号土坑 (SK32) 図15

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	10YR4-6褐色土 (φ1~3mm) 2%、浮石 (φ5~8mm) 1%
2	黒色土	10YR2/1	浮石 (φ5~15mm) 1%
3	黒褐色土	10YR2/2	10YR4-6褐色土 (φ1~5mm) 1%、浮石 (φ5~20mm) 1%

第34号土坑 (SK34) 図15

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	10YR5-8黄褐色土 (φ10~8mm) 7%
2	黒褐色土	10YR2/2	10YR5-8黄褐色土 (φ3~20mm) 2%

第35号土坑 (SK35) 図16

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒褐色土	10YR2/3	10YR3-6黄褐色土1.10% (ブロック状に混入)、浮石 (φ3~20mm) 5%
2	黒褐色土	10YR2/2	10YR3-6黄褐色土 (φ3~10mm) 2%、浮石 (φ1~5mm) 1%
3	黒褐色土	10YR2/3	10YR3-6黄褐色土 (φ5~30mm) 7% (ブロック状に混入)、浮石 (φ5mm) 1%

第36号土坑 (SK36) 図16

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	黄褐色土 (φ5~20mm) 10%、浮石 (φ1~7mm) 3%
2	黒色土	10YR2/1	10YR4-6黄褐色土1.50%、浮石 (φ1~10mm) 5%
3	黒色土	10YR1.7/1	黄褐色土 (φ3~20mm) 7%
4	褐色土	10YR4/6	10YR1.7/1黒色土25%、浮石 (φ2~10mm) 3%

第37号土坑 (SK37) 図16

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒褐色土	10YR2/3	浮石 (φ2~20mm) 2%

第38号土坑 (SK38) 図16

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	浮石 (φ5~20mm) 5%、黒褐色土 (φ2~5mm) 2%
2	黒褐色土	10YR2/3	10YR5-8黄褐色土 (φ3~20mm) 3%

第41号土坑 (SK41) 図16

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	10YR5-8黄褐色土 (φ5~10mm) 2%、浮石 (φ1~5mm) 1%
2	黒褐色土	10YR2/2	10YR5-8黄褐色土 (φ3~10mm) 1%
3	黒色土	10YR2/1	10YR5-8黄褐色土 (φ5~50mm) 7%、炭化土 (φ20mm) 1%
4	明褐色土	10YR6/6	10YR1.7/1黒褐色土30%
5	黒褐色土	10YR2/2	10YR5-8黄褐色土 (φ5~10mm) 1%、炭化土 (φ3~10mm) 1%
6	褐色土	10YR6/1	
7	黒色土	10YR2/1	浮石 (φ10~20mm) 1%
8	黄褐色土	10YR5/6	
9	黒色土	10YR1.7/1	10YR5-8黄褐色土 (φ10mm) 1%

第44号土坑 (SK44) 図16

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	10YR5-8黄褐色土 (φ5~20mm) 2%、浮石 (φ15mm) 1%
2	黒褐色土	10YR2/2	10YR5-8黄褐色土 (φ1~10mm) 2%、浮石 (φ5~10mm) 1%
3	黒褐色土	10YR2/3	10YR4-6褐色土1.30%、10YR5-8黄褐色土 (φ5~10mm) 1%
4	褐色土	10YR4/6	
5	褐色土	10YR4/6	浮石 (φ5~10mm) 2%
6	褐色土	10YR4/6	浮石 (φ5~10mm) 2%
7	黒褐色土	10YR2/2	

第45号土坑 (SK45) 図16

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	10YR3-6黄褐色土1.30%
2	黒褐色土	10YR2/2	10YR3-6黄褐色土1.30%、10YR7/4C:赤・黄褐色土 (φ10~30mm) 2%
3	黒褐色土	10YR2/3	10YR3-6黄褐色土1.30%

第46号土坑 (SK46) 図17

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒褐色土	10YR2/2	10YR4-6褐色土 (φ1~30mm) 5%
2	黒色土	10YR1.7/1	10YR4-6褐色土 (φ1~20mm) 3%
3	黒褐色土	10YR2/2	10YR6/4C:赤・黄褐色土1.5%、10YR4-6褐色土 (φ1~5mm) 1%
4	黒褐色土	10YR2/3	10YR4-6褐色土 (φ10~100mm) 5%
5	赤・黄褐色土	10YR4/3	

第47号土坑 (SK47) 図17

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	褐色土	10YR4/4	10YR2-1褐色土10%、浮石(φ3~5mm)5%。
2	黒色土	10YR2/1	浮石(φ3~5mm)5%、10YR4-4褐色土(φ10~40mm)1%。
3	黒褐色土	10YR2-3	10YR5-6黄褐色土5%(ブロッカ状に堆積)、10YR2-1褐色土1% (ブロッカ状に堆積)。
4	暗褐色土	10YR3/4	10YR3-3暗褐色土5%、砂(φ1mm)2%。
5	褐色土	10YR4/4	10YR2-1褐色土(φ10~20mm)2%、10YR7-3にぶい黄褐色土(φ5~40mm)1%。

第48号土坑 (SK48) 図17

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒褐色土	10YR2-3	10YR4-4褐色土(φ5~30mm)5%、25YR4-8赤褐色土(φ3~5mm)1%。
2	赤褐色土	25YR4-6	炭化土(φ10~40mm)5%。
3	にぶい黄褐色土	10YR5-3	暗褐色粘土混入。
4	黒色土	10YR2/1	

第49号土坑 (SK49) 図17

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	浮石(φ3mm)1%。
2	黒色土	10YR2/1	10YR3-4暗褐色土(φ5~10mm)1%。

第50号土坑 (SK50) 図17

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR2/1	10YR4-4褐色土(φ3~5mm)1%。
2	黒褐色土	10YR2-2	10YR4-4褐色土(φ3~50mm)3%。
3	暗褐色土	10YR2-2	10YR4-4褐色土(φ3~5mm)1%。
4	暗褐色土	10YR2-2	10YR4-4褐色土5%、10YR4-4褐色土(φ1~5mm)2%。

第51号土坑 (SK51) 図17

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	暗褐色土	10YR2/3	25YR4-6赤褐色土(φ3~15mm)2%、浮石(φ3~5mm)2%。
2	黒色土	10YR2/1	10YR5-6黄褐色土(φ2~20mm)5%、炭化物(φ5~130mm)7%。

第1号溝状土坑 (SV01) 図18

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	中粒径浮石3%、10YR5-6黄褐色土(φ3~5cm)2%、浮石(φ3mm)無数量。
2	暗褐色土	10YR2-2	浮石(φ3~20mm)3%。
3	褐色土	10YR4/4	浮石(φ5~10mm)2%。
4	暗褐色土	10YR3/3	浮石(φ1~15mm)1%。
5	黄褐色土	10YR5-6	
6	黒色土	10YR2/1	10YR7-6明黄褐色土(帯状に堆積)。
7	明黄褐色土	10YR7-6	
8	暗褐色土	10YR2-2	

SP256 図15

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	10YR5-8黄褐色土(φ3~40mm)3%。
2	黄褐色土	10YR5-6	10YR5-8黄褐色土(φ5~20mm)40%。

SP257 図15

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	10YR5-8黄褐色土(φ3~20mm)3%。
2	黒色土	10YR1.7/1	10YR5-8黄褐色土(φ2~60mm)10%。

SP258 図15

層番	土色	マンセル記号	含有物
1	黒色土	10YR1.7/1	10YR5-8黄褐色土(φ3~50mm)5%。
2	黒色土	10YR2/1	10YR5-8黄褐色土(φ2~60mm)50%。
3	暗褐色土	10YR2-2	10YR4-6褐色土(φ5~30mm)30%。

## 遺構一覧表

土坑 (SK)

規模：( ) は残存数

遺構番号	図	主な位置	確認面	底面	開口部規模 (cm)	底面規模 (cm)	深さ (cm)	遺構	備考
22	15	ⅡR-46	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	158×93	134×83	45		
23	15	ⅡS-46	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ	138×125	79×67	18	-	
24	15	ⅡS-47	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(71)×(42)	(63)×(37)	68	SK24>SK34	柱状の可能性あり
25	15	ⅡS-46	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(86)×(81)	70×58	30	SK25>SP256	
36	15	ⅡT-47	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	148×90	120×63	31	SK36>SK31>SP264>SK34	
37	15	ⅡS-46	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(126)×(84)	(113)×(82)	49	-	
38	15	ⅡS-47	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ	(58)×(47)	(48)×(45)	24	-	柱状の可能性あり
39	15	ⅡS-47	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(81)×(52)	(82)×(46)	93	-	柱状の可能性あり
30	15	ⅡS-47	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	178×98	139×72	42	SK30>SP259・SP272 SK33>SK30	
31	15	ⅡT-47	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ	(48)×(47)	(45)×(35)	18	SK31>SK33>SP264>SK34	柱状と考えられる
32	15	ⅡS-46	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(97)×(31)	(79)×(27)	51	-	
33	15	ⅡS-47	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(122)×(61)	95×53	40	SK33>SK30	SP272上の前田不明
34	15	ⅡS-47	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(268)×(263)	(247)×(245)	81	SK34>SK31>SP264>SK34 SK24>SK34	
35	16	ⅡW-49	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(223)×(134)	(205)×(128)	96	-	
36	16	VP-72	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(127)×(87)	(111)×(79)	68	-	
37	16	VL-71	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ	(69)×(68)	(53)×(50)	11	SK37>SP34・SP35	
38	16	VE-67	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	135×130	63×62	74	-	
39	16	VF-67	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(196)×(77)	(85)×(35)	44	-	
40		欠番	-	-	-	-	-	-	
41	16	BS-61	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ	(246)×(209)	(246)×(149)	81	SK41>SP466・SP519・SP520	
42	16	VE-67	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(128)×(76)	(120)×(69)	21	-	
43	16	VD-67	里	八戸Ⅱ・Ⅲ	82×82	67×62	38	-	
44	16	BS-61	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(207)×(128)	(125)×(89)	93	SK44>SP468	
45	16	BQ-59	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ	145×144	116×109	162	-	
46	17	BP-58	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(198)×(99)	(140)×(85)	72	SK46>SK47	
47	17	BP-59	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(366)×(323)	(322)×(310)	108	SK47>SK46	
48	17	BL-57	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(180)×(113)	(171)×(89)	41	SK48>SK49	
49	17	BS-57	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(230)×(123)	(221)×(97)	50	SK49>SK49 SP541・562>SK49	
50	17	BP-54	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	255×209	230×222	111	-	
51	17	BE-52	八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(217)×(143)	(207)×(130)	69	-	

溝状土坑 (SV)

規模：( ) は残存数

遺構番号	図	主な位置	確認面	底面	長軸長 (cm)		短軸長 (cm)		深さ (cm)	遺構	備考
					開口部	底面	開口部	底面			
1	18	VD-68	里～八戸Ⅱ	八戸Ⅱ・Ⅲ	(223)	(275)	(114)	(24)	170	SP384>SV01	

柱状 (SP)

規模：( ) は残存数

遺構番号	図	確認面	位置	開口部規模 (cm)	底面規模 (cm)	柱状規模 (cm)	深さ (cm)	遺構	備考
236	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	32×30	22×18	-	23	-	
237	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡS-46	80×41	41×37	-	24	-	
238	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	37×30	26×21	-	28	-	
239	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	41×37	29×24	-	30	-	
240	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-47	(41)×(37)	(34)×(26)	-	22	-	
241	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	48×36	44×25	-	11	-	
242	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	18×16	13×10	-	12	-	
243	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	49×46	36×34	-	35	-	
244	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-47	44×39	35×29	-	14	-	
245	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	(32)×(29)	(32)×(21)	-	22	-	
246	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	25×25	17×16	-	11	-	
247	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	54×46	30×23	-	46	-	
248	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	24×22	16×11	-	10	-	
249	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-47	(35)×(29)	(27)×(25)	-	27	-	
250	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	(32)×(23)	(20)×(19)	-	46	-	
251	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	26×20	16×14	-	14	-	
252	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡR-46	(24)×(23)	13×13	-	30	-	
253	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡQ-46	28×28	18×17	-	45	-	
254	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡS-46	31×25	21×17	-	38	-	
255	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡS-46	33×31	16×12	-	38	-	
256	図14 (右)	八戸Ⅱ	ⅡS-46	35×33	20×15	-	33	SP256>SK25	

道標番号	種	線形	位置	開口部幅尺(m)	底面幅尺(m)	柱石間尺(m)	高さ(m)	重数	備考
257	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	64×37	47×29	—	26	—	
258	旧14(右)	入戸瓦	旧T-48	62×27	43×20	20×6	27	—	
259	旧14(右)	入戸瓦	旧T-46	34×24	29×22	20×12	13	SP259>SK30	
260	旧14(右)	入戸瓦	旧S-66	33×30	22×22	—	30	SP260・SP261<SP262	
261	旧14(右)	入戸瓦	旧S-66	33×30	25×11	—	12	SP260・SP261<SP262	
262	旧14(右)	入戸瓦	旧S-66	29×23	13×9	—	13	SP262<SP260・SP261	
263	旧14(右)	入戸瓦	旧T-46	27×19	20×13	12×12	18	SP263>SP267>SP265	
264	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	30×27	26×25	21×18	28	SK26>SK31>SP264>SK34	
265	旧14(右)	入戸瓦	旧S-66	29×28	12×7	—	33	SP265<SP267<SP263	
266	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	26×36	15×11	—	8	—	
267	旧14(右)	入戸瓦	旧S-66	28×14	13×11	—	6	SP267>SP268>SP265	
268	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	24×22	11×10	—	15	SP268・SP271<SP269	
269	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	32×31	28×25	22×20	32	SP269>SP268・SP271	
270	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	32×21	14×13	—	23	—	
271	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	32×14	11×11	—	15	SP271・SP268<SP269	
272	旧14(右)	入戸瓦	旧S-47	47×30	8×6	—	23	SP272>SK30	SK30との新旧不明
273	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	55×52	36×19	—	34	—	
274	旧14(右)	入戸瓦	旧S-47	44×36	35×31	14×12	17	SP273>SP276	
275	旧14(右)	入戸瓦	旧T-47	42×37	17×12	—	31	—	
276	旧14(右)	入戸瓦	旧S-47	33×15	12×12	—	36	SP276<SP274	
277	旧14(左)	入戸瓦	旧X-50	22×12	14×10	—	15	—	
278	旧14(左)	入戸瓦	旧X-49	40×36	30×25	—	22	—	
279	旧14(左)	入戸瓦	旧X-49	43×37	32×32	—	30	—	
280	旧14(左)	入戸瓦	旧X-49	54×46	34×24	—	37	—	
281	旧14(左)	入戸瓦	旧X-49	27×27	19×11	—	13	—	
282	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	42×36	24×16	16×15	31	SP282>SP288・SP292	
283	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	51×32	29×15	—	22	SP283>SP290	
284	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	27×26	18×13	—	15	SP284>SP289	
285	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	22×22	18×15	—	11	—	
286	旧14(左)	入戸瓦	旧W-48	29×21	24×18	—	7	—	
287	旧14(左)	入戸瓦	旧W-49	40×30	29×24	29×20	37	—	
288	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	36×29	29×24	24×17	24	SP288・SP292<SP282	
289	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	31×31	23×29	17×17	35	SP284>SP289	
290	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	23×21	14×14	—	17	SP290<SP283	
291	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	32×26	23×20	16×15	23	—	
292	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	29×25	17×15	—	17	SP288・SP292<SP282	
293	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	16×15	6×8	—	12	—	
294	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	26×17	21×11	—	10	SP294>SP300>SP303	
295	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	20×12	14×6	—	10	—	
296	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	19×18	13×11	—	12	—	
297	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	22×13	12×10	—	12	—	
298	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	14×10	14×8	—	13	—	
299	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	12×11	11×9	—	11	—	
300	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	14×13	10×6	—	11	SP294>SP300>SP303	
301	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	13×7	9×7	—	6	—	
302	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	12×11	5×3	—	9	—	
303	旧14(左)	入戸瓦	旧V-49	15×10	10×5	—	25	SP303>SP300>SP294	
304	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	45×44	32×30	24×16	37	—	
305	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	20×15	9×5	—	29	—	
306	旧14(左)	入戸瓦	旧U-48	33×26	27×26	16×16	19	—	
307	旧14(左)	入戸瓦	旧U-47	32×23	23×15	16×14	18	—	
308	旧14(左)	入戸瓦	旧U-48	28×28	11×8	18×17	24	—	
309	旧14(左)	入戸瓦	旧U-48	37×32	15×11	24×19	31	—	
310	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	51×44	38×34	30×23	29	—	
311	旧14(左)	入戸瓦	旧U-47	32×32	31×26	21×16	38	—	
312	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	40×26	13×13	23×16	37	—	
313	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	94×91	69×51	32×31	33	—	
314	旧14(左)	入戸瓦	旧V-48	58×48	33×14	24×20	42	—	

道標番号	所	線形	位置	開口部幅尺(m)	底面幅尺(m)	柱径幅尺(m)	高さ(m)	重数	備考
315	旧14(左)	入戸瓦	ⅡV-48	32×25	22×22	20×14	30	-	
316	旧14(左)	入戸瓦	ⅡV-48	20×18	11×10	12×10	15	-	
317	旧14(左)	入戸瓦	ⅡV-48	27×21	8×4	9×9	10	-	
318	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-47	(33)×(37)	(30)×(33)	18×13	36	-	
319	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-47	29×25	16×15	10×10	16	-	
320	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-48	75×66	59×53	-	14	-	
321	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-48	19×10	12×7	-	7	-	
322	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-48	(54)×(50)	(59)×(53)	32×29	14	SP322<SP326	
323	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-48	135×64	61×61	-	21	SP322>SP325	
324	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-48	73×66	65×52	-	12	-	
325	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-48	(73)×(41)	(47)×(32)	24×19	38	SP325<SP323	
326	旧14(左)	入戸瓦	ⅡU-48	61×43	21×17	29×24	62	SP326>SP322	
327	旧10(左)	入戸瓦	ⅡO-73	64×63	14×13	32×30	24	-	
328	旧10(左)	入戸瓦	ⅡN-72	56×44	16×14	18×16	30	-	
329	旧10(左)	入戸瓦	ⅡM-72	44×30	25×21	18×17	48	-	
330	旧10(左)	入戸瓦	ⅡM-71	54×53	27×19	33×29	38	-	
331	旧10(左)	入戸瓦	ⅡM-71	46×36	34×30	20×19	54	-	
332	旧10(右)	入戸瓦	ⅡL-71	33×23	14×10	16×10	37	-	
333	旧10(右)	入戸瓦	ⅡM-72	30×25	19×19	-	14	SP333>SP423	
334	旧10(右)	入戸瓦	ⅡL-71	29×24	20×17	-	15	SP334・SP335>SK37	
335	旧10(右)	入戸瓦	ⅡL-71	30×23	20×19	13×9	9	SP334・SP335>SK37	
336	旧10(左)	入戸瓦	ⅡM-71	30×28	23×18	20×15	10	-	
337	旧10(右)	入戸瓦	ⅡL-71	37×37	27×21	21×17	34	SP337>SP400	
338	旧10(左)	入戸瓦	ⅡN-72	23×22	14×12	10×8	30	-	
339	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-71	37×36	25×18	-	63	-	
340	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-70	34×31	13×12	21×20	38	-	
341	旧10(右)	入戸瓦	ⅡK-70	34×29	21×19	16×13	30	-	
342	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-69	37×32	17×13	19×18	36	SP342>SP354	
343	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-69	(13)×(31)	14×9	15×11	64	-	
344	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	26×24	8×6	17×13	22	-	
345	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	31×29	16×12	12×8	30	-	
346	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	36×30	36×21	18×12	11	-	
347	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-70	28×27	14×11	17×11	11	-	
348	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	34×33	23×20	17×12	14	-	
349	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	30×26	15×8	12×10	42	-	
350	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	23×20	10×6	14×14	41	-	
351	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	25×22	14×10	14×10	38	-	
352	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	(26)×(25)	11×5	16×14	27	-	
353	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	46×24	17×11	25×16	19	-	
354	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-69	(44)×(39)	37×35	20×18	35	SP354<SP342	
355	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-70	(32)×(28)	(25)×(22)	18×17	19	SP355<SP366	
356	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	30×29	19×11	20×16	25	-	
357	旧10(左)	入戸瓦	ⅡM-72	34×22	15×14	-	30	-	
358	旧10(左)	入戸瓦	ⅡO-73	24×20	17×13	-	16	-	
359	旧10(右)	入戸瓦	ⅡH-70	34×33	17×11	-	30	-	
360	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	23×19	14×4	-	12	-	
361	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	22×18	11×11	-	14	-	
362	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-69	(33)×(26)	22×10	-	18	-	
363	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-69	28×21	15×12	-	21	-	
364	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-69	23×21	16×11	-	31	-	
365	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-70	28×23	16×14	-	14	-	
366	旧10(右)	入戸瓦	ⅡI-70	28×28	15×14	-	42	SP366>SP355	
367	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-70	27×24	10×10	-	29	-	
368	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-71	19×18	15×10	-	12	-	
369	旧10(右)	入戸瓦	ⅡJ-71	20×16	10×9	-	14	-	
370	旧11(左)	入戸瓦	ⅡF-67	33×48	48×35	-	21	SP370>SP378	
371	旧11(左)	入戸瓦	ⅡE-67	32×28	24×12	-	10	SP371>SP380	
372	旧11(左)	入戸瓦	ⅡE-67	22×20	10×5	-	6	SP372>SP381	

遺構番号	期	礎礎向	位置	開口部長尺(m)	底面長尺(m)	柱間長尺(m)	深さ(m)	重数	備考
373	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	26×25	15×9	—	12	SP373>SP391	
374	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	35×32	22×12	—	14	SP374>SP390	
375	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VF-68	23×30	13×10	—	8	—	
376	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VF-68	29×23	18×14	—	8	—	
377	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VO-72	62×61	33×45	—	28	—	
378	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VF-67	(44)×(44)	(23)×(14)	—	19	SP378>SP370	
379	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-67	41×25	16×8	—	13	—	
380	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-67	(24)×(18)	10×9	—	10	SP280>SP371	
381	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-67	(20)×(19)	9×6	—	16	SP381>SP372	
382	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-67	24×23	16×10	—	10	—	
383	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	21×30	18×16	—	11	—	
384	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	48×41	25×12	—	34	SP280>SV01	
385	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VF-67	35×27	21×18	—	12	—	
386	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VF-68	67×41	46×25	—	32	—	
387	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VF-69	74×44	38×28	—	26	—	
388	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VI-69	24×23	13×12	—	6	—	
389	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VF-68	(34)×(28)	13×10	—	12	—	
390	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	(26)×(26)	12×7	—	14	SP290>SP374	
391	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	(36)×(33)	(12)×(10)	—	13	SP391>SP373	
392	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	32×24	9×5	—	6	—	
393	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-68	45×32	15×10	—	45	—	
394	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-67	60×37	44×44	—	26	—	
395	Ⅱ11(左)	△PⅡ	VE-67	26×30	12×11	—	7	—	
396	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VK-71	33×32	17×16	—	47	—	
397	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VK-71	29×28	17×10	—	25	—	
398	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VK-71	28×27	21×13	—	32	—	
399	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-71	33×29	19×15	—	45	—	
400	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-71	(26)×(26)	19×8	—	30	SP400>SP337	
401	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-71	26×25	17×14	—	40	—	
402	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-71	28×26	16×9	—	32	—	
403	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-70	24×19	15×7	—	21	—	
404	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-71	28×22	13×11	—	8	—	
405	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-71	30×24	21×16	—	16	—	
406	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VL-71	26×24	9×6	—	17	—	
407	Ⅱ10(右)	△PⅡ	VK-72	(61)×(14)	(22)×(6)	—	76	—	
408	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-71	24×20	16×15	—	11	—	
409	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-71	(26)×(16)	16×13	—	26	—	
410	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-71	26×21	17×13	—	15	—	
411	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-71	24×21	11×9	—	28	—	
412	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-71	36×24	25×17	—	14	—	
413	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-72	37×18	19×11	—	11	—	
414	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-72	26×20	13×8	—	24	—	
415	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-72	(32)×(29)	22×15	—	14	SP417>SP415>SP416	
416	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-72	(34)×(28)	(27)×(16)	—	10	SP417>SP415>SP416	
417	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VL-72	24×19	13×11	—	16	SP417>SP415>SP416	
418	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-72	26×21	26×14	—	18	—	
419	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-72	40×36	20×18	—	35	—	
420	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-71	34×28	19×16	—	34	—	
421	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-71	36×30	26×18	—	20	—	
422	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-71	(53)×(19)	(34)×(14)	—	28	—	
423	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-72	(31)×(29)	17×14	—	49	SP423>SP333	
424	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-72	(53)×(25)	(22)×(6)	—	108	—	
425	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VM-72	18×17	16×11	—	12	—	
426	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VN-72	37×31	15×13	—	95	—	
427	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VN-71	(50)×(26)	(36)×(23)	—	30	—	
428	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VN-72	27×23	12×17	—	16	—	
429	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VN-72	23×22	15×13	—	23	—	
430	Ⅱ10(左)	△PⅡ	VN-72	28×22	17×9	—	54	—	

道標番号	種	線形点	位置	開口部間隔(m)	底面間隔(m)	柱石間隔(m)	高さ(m)	重量	備考
431	既10(左)	入戸瓦	VN-72	31×19	24×10	--	8	--	
432	既10(左)	入戸瓦	VN-72	54×33	22×16	--	47	--	
433	既10(左)	入戸瓦	VN-72	29×36	19×13	--	42	--	
434	既10(左)	入戸瓦	VN-72	38×34	44×34	--	45	--	
435	既10(左)	入戸瓦	VN-72	62×34	46×44	--	23	--	
436	既10(左)	入戸瓦	VN-72	34×31	23×20	--	17	--	
437	既10(左)	入戸瓦	VN-72	(50)×(39)	(42)×(34)	--	21	--	
438	既10(左)	入戸瓦	VN-72	(20)×(14)	(20)×(9)	--	26	--	
439	既10(左)	入戸瓦	VN-72	(25)×(21)	12×11	--	22	--	
440	既10(左)	入戸瓦	VN-72	25×22	21×17	--	16	--	
441	既10(左)	入戸瓦	VN-72	20×16	11×7	--	24	--	
442	既10(左)	入戸瓦	VL-73	18×17	15×9	--	7	--	
443	既10(左)	入戸瓦	VL-73	24×17	19×9	--	13	--	
444	既10(左)	入戸瓦	VL-73	20×19	14×11	--	25	--	
445	既10(左)	入戸瓦	VL-73	17×10	10×9	--	9	--	
446	既10(左)	入戸瓦	VL-73	57×57	39×32	--	36	--	
447	既10(左)	入戸瓦	VL-73	30×19	17×11	--	18	--	
448	既10(左)	入戸瓦	VO-72	(62)×(49)	(51)×(41)	--	25	--	
449	既10(左)	入戸瓦	VO-73	60×39	12×6	--	22	--	
450	既11(左)	入戸瓦	VC-65	49×39	34×17	18×13	27	--	
451	既11(左)	入戸瓦	VC-66	44×42	30×25	25×22	22	--	
452	既11(左)	入戸瓦	VD-67	43×29	25×13	--	31	SP452・SP454・SP453	
453	既11(左)	入戸瓦	VD-67	(42)×(38)	(30)×(23)	23×16	23	SP452・SP454・SP453	
454	既11(左)	入戸瓦	VD-67	33×31	22×13	16×13	40	SP452・SP454・SP453	
455	既11(左)	入戸瓦	VC-67	53×48	29×17	--	46	--	
456	既11(左)	入戸瓦	VC-67	38×36	25×23	--	24	--	
457	既11(左)	入戸瓦	VC-66	37×32	20×13	--	30	--	
458	既11(左)	入戸瓦	VD-67	22×22	11×10	--	6	--	
459	既12(左)	入戸瓦	BR-61	24×23	16×15	--	30	--	
460	既12(左)	入戸瓦	BR-60	52×45	30×28	27×22	40	SP460・SP461	
461	既12(左)	入戸瓦	BR-60	48×32	42×28	28×18	12	--	
462	既12(左)	入戸瓦	BR-60	35×27	14×9	18×17	25	--	
463	既12(左)	入戸瓦	BR-60	23×22	16×12	14×9	12	--	
464	既12(左)	入戸瓦	BS-61	59×31	50×44	35×31	30	--	
465	既12(左)	入戸瓦	BS-61	26×22	15×10	19×19	30	--	
466	既12(左)	入戸瓦	BS-61	56×49	36×33	23×14	68	SP466・SP519・SP520・SK41	
467	既12(左)	入戸瓦	BS-61	34×31	14×10	23×21	30	--	
468	既12(左)	入戸瓦	BS-61	30×36	22×12	--	19	SP468・SK41	
469	既12(左)	入戸瓦	BS-62	29×36	17×10	13×10	42	--	
470	既12(左)	入戸瓦	BS-61	29×36	10×9	--	19	--	
471	既12(左)	入戸瓦	BS-61	28×27	16×8	--	26	--	
472	既12(左)	入戸瓦	BR-60	60×52	30×29	25×21	40	--	
473	既12(左)	入戸瓦	BS-61	32×28	19×17	18×17	33	--	
474	既12(左)	入戸瓦	BR-61	28×24	12×8	--	25	--	
475	既12(左)	入戸瓦	BS-60	36×36	23×21	23×20	54	--	
476	既12(左)	入戸瓦	BR-61	25×20	15×14	--	13	--	
477	既12(左)	入戸瓦	BS-60	25×22	18×16	--	18	--	
478	既12(左)	入戸瓦	BS-60	57×49	43×35	--	14	--	
479	既12(左)	入戸瓦	BQ-60	28×36	13×11	16×13	26	SP479・SP489	
480	既12(左)	入戸瓦	BQ-60	29×36	22×18	12×11	7	--	
481	既12(左)	入戸瓦	BQ-59	25×27	16×12	--	29	--	
482	既12(左)	入戸瓦	BR-61	31×27	19×16	--	27	--	
483	既12(左)	入戸瓦	BR-61	21×17	13×8	--	18	--	
484	既12(左)	入戸瓦	BR-61	(34)×(33)	22×17	--	26	SP484・SP490	
485	既12(左)	入戸瓦	BR-60	(28)×(25)	(10)×(10)	--	26	--	
486	既12(左)	入戸瓦	BR-60	38×34	43×42	--	16	--	
487	既12(左)	入戸瓦	BR-60	(21)×(13)	14×8	--	15	--	
488	既12(左)	入戸瓦	BR-60	(19)×(15)	7×6	--	18	--	

遺構番号	期	礎礎向	位置	開口部長尺(cm)	底面長尺(cm)	柱礎長尺(cm)	厚さ(cm)	重数	備考
489	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	(30)×(28)	16×12	13×13	18	SP490<SP479	
490	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	28×22	12×11	13×12	10	--	
491	Ⅱ12(左)	⊥FV	BR60	62×47	22×20	--	32	--	
492	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS61	29×29	14×9	--	22	--	
493	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS61	40×27	22×17	--	24	--	
494	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS61	(33)×(16)	(20)×(12)	--	21	--	
495	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	20×17	12×8	12×8	11	--	
496	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP60	31×23	18×13	19×18	8	--	
497	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP59	29×24	14×6	16×13	30	--	
498	Ⅱ12(右)	⊥FV	BO59	28×23	11×7	18×16	14	--	
499	Ⅱ12(右)	⊥FV	BP59	38×31	21×16	--	30	SP499>SP508>SP544	
500	Ⅱ12(左)	⊥FV	BR61	31×36	24×19	--	7	--	
501	Ⅱ12(左)	⊥FV	BR60	43×35	32×19	--	13	--	
502	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	26×16	12×7	--	14	--	
503	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	37×36	17×12	--	22	--	
504	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	38×32	19×12	--	26	--	
505	Ⅱ12(左)	⊥FV	BR60	31×23	24×22	--	10	--	
506	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	58×51	42×24	--	24	--	
507	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP60	29×28	15×13	--	54	--	
508	Ⅱ12(右)	⊥FV	BP59	(41)×(16)	33×8	--	14	SP499>SP508>SP544	
509	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP60	18×18	13×12	--	7	--	
510	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP60	25×19	14×10	--	23	--	
511	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP60	25×21	13×11	--	11	--	
512	Ⅱ12(右)	⊥FV	BP60	21×19	10×10	--	17	--	
513	Ⅱ12(右)	⊥FV	BP60	15×11	9×7	--	10	--	
514	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ59	46×38	33×24	--	7	--	
515	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ60	32×28	18×14	--	15	--	
516	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS61	18×16	13×9	--	6	--	
517	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS61	(13)×(13)	(10)×(6)	--	18	--	
518	Ⅱ12(左)	⊥FV	BR61	(36)×(38)	(36)×(37)	--	12	--	
519	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS61	40×35	26×26	--	30	SP466・SP519・SP520>SK41	
520	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS60	35×28	17×14	--	22	SP466・SP519・SP520>SK41	
521	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS61	20×13	13×9	--	4	--	
522	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS60	18×16	11×6	--	7	--	
523	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS60	14×10	5×3	--	15	--	
524	Ⅱ12(左)	⊥FV	BS60	20×13	13×11	--	9	--	
525	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP60	19×17	10×9	--	20	SP525>SP526	
526	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP60	22×19	14×10	--	14	SP526<SP525	
527	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP59	33×26	22×5	--	10	--	
528	Ⅱ12(左)	⊥FV	BP59	21×18	9×8	--	15	--	
529	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ59	63×52	46×35	--	31	--	
530	Ⅱ12(左)	⊥FV	BQ59	34×33	27×24	--	15	--	
531	Ⅱ12(右)	⊥FV	BO59	40×34	32×29	28×26	10	--	
532	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	45×38	28×20	19×18	41	--	
533	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	35×35	22×18	14×9	50	--	
534	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	34×30	14×10	22×18	22	--	
535	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	33×31	22×18	19×18	37	--	
536	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	48×39	32×25	33×27	36	--	
537	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	35×30	13×12	--	34	--	
538	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	32×31	15×14	17×13	34	--	
539	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	24×20	17×14	--	26	--	
540	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	19×17	14×13	--	17	--	
541	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	40×37	24×21	21×17	29	SP541>SK49	
542	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	29×16	17×12	16×8	13	--	
543	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	39×35	30×20	--	10	--	
544	Ⅱ12(右)	⊥FV	BP59	(40)×(21)	(27)×(9)	--	8	SP544<SP508<SP499	
545	Ⅱ12(右)	⊥FV	BO59	62×58	45×39	--	27	--	
546	Ⅱ12(右)	⊥FV	BL57	26×14	8×4	--	16	--	

## 八幡道路Ⅱ・千石屋敷道路Ⅱ

道標番号	所	線形点	位置	開口部縦長(m)	底面縦長(m)	柱状部縦長(m)	高さ(m)	重載	備考
547	旧12(右)	AJW	BM-58	29×23	14×9	--	16	--	
548	旧12(右)	AJW	BM-58	19×18	12×10	--	7	--	
549	旧12(右)	AJW	BM-57	34×26	9×4	--	16	--	
550	旧12(右)	AJW	BM-57	26×15	13×9	--	10	--	
551	旧12(右)	AJW	BL-57	25×21	11×10	--	11	--	
552	旧12(右)	AJW	BL-57	32×27	23×13	--	35	--	
553	旧12(右)	AJW	BL-57	23×16	15×9	--	6	--	
554	旧12(右)	AJW	BL-57	23×20	13×11	--	23	--	
555	旧12(右)	AJW	BL-57	35×33	14×10	--	30	--	
556	旧12(右)	AJW	BL-57	28×27	17×16	--	16	--	
557	旧12(右)	AJW	BL-57	29×28	20×17	--	7	--	
558	旧12(右)	AJW	BK-57	30×29	20×18	--	34	--	
559	旧12(右)	AJW	BK-57	30×26	18×16	--	40	--	
560	旧12(右)	AJW	BK-57	42×36	27×25	--	10	--	
561	旧12(右)	AJW	BM-57	23×20	15×11	--	31	--	
562	旧12(右)	AJW	BM-57	33×29	17×14	--	22	SP562>SK49	
563	旧12(右)	AJW	BM-57	22×20	12×10	--	15	--	
564	旧12(右)	AJW	BM-57	27×21	16×13	--	91	--	
565	旧12(右)	AJW	BL-57	33×23	24×13	--	12	--	
566	旧12(右)	AJW	BL-57	18×13	9×5	--	6	--	
567	旧12(右)	AJW	BL-59	20×18	14×11	--	15	--	
568	旧13(右)	AJW	BA-51	47×36	18×14	--	42	--	
569	旧13(右)	AJW	BA-51	39×34	19×15	--	18	--	
570	旧13(右)	AJW	BB-50	(35)×(12)	(20)×(6)	--	12	--	
571	旧13(右)	AJW	BE-53	37×33	28×24	27×26	12	--	
572	旧13(右)	AJW	BF-53	66×64	50×48	--	38	SP572>SP577	
573	旧13(右)	AJW	BE-53	42×27	28×14	--	18	--	
574	旧13(右)	AJW	BE-53	26×22	15×12	--	19	--	
575	旧13(右)	AJW	BE-53	28×23	17×13	--	34	--	
576	旧13(右)	AJW	BE-54	(35)×(13)	(17)×(4)	--	40	--	
577	旧13(右)	AJW	BE-53	(23)×(13)	6×5	--	16	SP577<SP572	
578	旧13(右)	AJW	BE-53	60×55	49×44	--	28	--	
579	旧13(右)	AJW	BE-53	27×23	18×10	--	12	--	
580	旧13(右)	AJW	BE-53	28×22	17×9	18×16	14	--	
581	旧13(右)	AJW	BD-52	20×15	17×10	--	9	--	
582	旧13(右)	AJW	BE-52	41×27	19×10	--	32	--	
583	旧13(右)	AJW	BE-52	21×19	12×10	--	28	--	
584	旧13(右)	AJW	BE-52	22×20	10×7	--	41	--	
585	旧13(右)	AJW	BE-52	22×20	11×8	--	19	--	
586	旧13(右)	AJW	BE-52	(47)×(41)	19×16	19×14	78	--	
587	旧13(右)	AJW	BE-52	36×22	17×16	16×12	13	--	
588	旧13(右)	AJW	BE-53	28×25	13×8	--	37	--	
589	旧13(右)	AJW	BE-53	24×23	11×9	--	31	--	
590	旧13(右)	AJW	BE-53	60×59	46×45	--	23	--	
591	旧13(右)	AJW	BE-53	25×18	17×14	--	10	--	
592	旧13(右)	AJW	BE-53	25×23	16×14	--	17	--	
593	旧13(右)	AJW	BE-53	19×14	14×7	--	6	--	
594	旧13(右)	AJW	BE-53	19×14	9×8	--	13	--	
595	旧13(右)	AJW	BE-52	30×19	12×8	--	24	--	
596	旧13(右)	AJW	BE-52	(24)×(19)	13×11	--	43	--	
597	旧13(右)	AJW	BD-53	(71)×(70)	51×48	--	31	--	
598	旧13(右)	AJW	BE-52	29×23	10×4	--	36	--	
599	旧13(右)	AJW	BE-52	21×15	9×8	--	8	--	
600	旧11(右)	AJW	BY-42	38×32	9×7	16×9	60	--	
601	旧11(右)	AJW	BV-43	42×41	32×29	--	35	--	
602	旧11(右)	AJW	BV-43	21×20	14×12	--	10	--	
603	旧11(右)	AJW	BV-43	26×19	15×11	--	13	--	
604	旧11(右)	AJW	BX-43	33×18	17×12	--	20	--	

## 遺物観察表

土器 (出土)

調査	器種	出土地点	層位・取上番号	外面特徴	内面特徴	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
19-16	甕	BK-66-BX-50(A区)	表層	突起・ミヤキ	沈線→ミヤキ	-	-	-	
19-17	甕	IX-20	表上	LR	凹線・ナデ	-	-	-	

土器 (1層部)

調査	器種	出土地点	層位・取上番号	外面特徴	内面特徴	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
19-18	杯	IX-20	表上	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	
19-19	甕	BK-56-BT-62(C区)	表層	ハケメ→ナズリ	ハケメ	-	-	-	外底面・ハケメ

陶磁器

( ) 復元後

調査	器種	遺構名	層位	取上番号	外面特徴	内面特徴	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	産地	特徴等
19-1	缸鉢	SK22	甕土	陶磁器1	白磁釉		-	-	-	肥前系	型作り成形
19-2	碗	SK47	甕土(4層)	陶2	高台・砂目		7.7	4.4	3.5	肥前系	口縁部の欠損は意図的破壊による可能性あり 耳無
19-3	碗	SK47	甕土(4層)	陶4	松か・草		8.5	5.3	3.5	肥前系	耳無
19-4	碗	SK47	甕土(床直)	-	丸文	隠線	(10.0)	(4.1)	-	肥前系	耳無
19-5	碗	SK47	甕土	-	植物?		-	-	-	肥前系	V型
19-6	碗	SK47	甕土	-			-	-	-	肥前系	口縁・縁い流状。破断面：漆跡さ
19-7	出物か	SK47	甕土	-		無釉 茶色物質付着	-	-	-	不明	輪彩色調・緑灰色 (7.5Y7.7) 胎土色調：灰色 (5Y5.1) 胎土は、きめ細かく均一的
19-8	碗	SK47	甕土(4層)	陶2	灰釉	灰釉	8.8	5.2	3.6	在産系	輪彩色調：灰白色 (10Y7.2) 胎土色調：灰黄色 (2.5Y6.2)・明黄褐色 (10YR6.5) 小丸感減少
19-9	不明	SK48	甕土	-			-	-	-	在産系	輪彩色調・緑灰色 (7.5Y6.1) 胎土色調：灰黄色 (2.5Y6.2)・明黄褐色 (10YR6.5) 胎土の色調・質感は小丸感現 (陶19-12) に類似
19-10	不明	SK50	甕土	-	青磁釉	青磁釉	-	-	-	中国	輪厚：1～1.5mm 14世紀後半～15世紀前半
19-11	片割碗	SP325	甕土	陶磁器	灰釉	灰釉	-	-	-	瀬戸・美濃系	大器4期後半～末 (1590年～1610頃)
19-12	甕・瓶	SP384	甕土	-	灰釉	灰釉	-	-	-	在産系	輪彩色調：灰白色 (10Y7.2) 胎土色調：灰黄色 (2.5Y6.2)・明黄褐色 (10YR6.5) 小丸感減少
19-13	皿?	SP494	甕土	-	人物像		-	-	-	肥前系	縁い・縁詰さ V型か
19-14	碗	SP540	甕土	-	鉄釉→灰釉	灰釉	(10.0)	(5.0)	-	瀬戸・美濃系	縁部破 18～19世紀
19-15	碗	SP582	甕土	-	鉄釉	灰釉	-	-	-	瀬戸・美濃系	縁部破か 18～19世紀か

銭貨

調査	出土地点	層位	取上番号	銭種	鋳造年	直径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
20-1	SK22	甕土	銭6	豊徳元寶	1004	2.5	0.6	3.2	
20-2	SK22	甕土	銭2	持世元寶	1008	2.4	0.6	2.7	
20-3	SK22	甕土	銭1	天福通寶	1017	2.4	0.6	3.6	
20-4	SK22	甕土	銭6	皇宋通寶	1029	2.3	0.6	2.9	
20-5	SK22	甕土	銭3	熙寧元寶	1068	2.3	0.7	2.6	
20-6	SK22	甕土	銭2	熙寧元寶	1068	2.3	0.6	3.6	
20-7	SK22	甕土	銭1	元豊通寶	1078	2.4	0.7	3.7	
20-8	SK22	甕土	銭5	元豊通寶	1078	2.4	0.7	2.7	
20-9	SK22	甕土	銭1	元祐通寶	1086	2.4	0.6	2.4	
20-10	SK22	甕土	銭2	正隆元寶	1158	2.4	0.6	2.8	
20-11	SK22	甕土	銭6	宣徳通寶	1433	2.5	0.5	3.6	
20-12	SK22	甕土	銭4	元祐通寶	-	2.4	0.7	1.9	日本の鑑銭
20-13	SK29	甕土	銭1	□元寶	1368	-	-	0.4	
20-14	SK33	甕土	銭4	□元寶	1368	-	-	0.4	
20-15	SK33	甕土	銭1	永樂通寶	1408	2.0	-	0.6	
20-16	SK33	甕土	銭2・5	永樂通寶	1408	2.4	0.6	1.1	
20-17	SK33	甕土	銭1	寛永通寶 (新)	1697	2.3	0.7	2.1	
20-18	SK34	甕土	銭1	寛永通寶 (古)	1636	2.4	0.5	2.9	
20-19	SK36	甕土	1	寛永通寶 (古)	1636	2.4	0.6	2.1	
20-20	SK37	甕土	1	寛永通寶 (新)	1697	2.3	0.7	2.0	
20-21	SK41	甕土	2	永樂通寶	1408	2.2	0.6	1.5	
20-22	SK41	甕土	3	永樂通寶	1408	-	0.5	1.1	
20-23	SK41	甕土	1	永樂通寶	1408	-	0.7	0.7	
20-24	SK41	甕土	-	寛永通寶 (新)	1697	-	-	0.9	

回号	出土地点	層位	取上番号	図様	制作年	直径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
20-25	SK43	覆土	1-1	寛水通貫 (古)	1636	2.3	0.5	3.7	
20-26	SK43	覆土	1-2	寛水通貫 (晋文)	1668	2.5	0.6	2.9	
20-27	SK43	覆土	1-3	寛水通貫 (晋文)	1668	2.2	0.6	3.0	
20-28	SK45	覆土	1	水栗通貫	1408	-	-	0.5	
20-29	SK46	覆土	1	寛水通貫 (古)	1636	2.7	0.6	3.0	
20-30	SK47	覆土	1	寛水通貫 (古)	1636	2.8	0.6	2.7	
20-31	SK48	覆土	1	寛水通貫 (新)	1697	2.3	0.6	2.2	
20-32	SK50	覆土	一括	□架□口	1408?	-	-	0.5	
20-33	SK50	覆土	鉄2	水栗通貫	1408	2.3	0.8	1.1	
20-34	SK50	覆土	鉄1	水栗通貫	1408	2.1	0.7	0.7	
20-35	SK50	覆土	鉄3	□口□	不明	-	-	0.2	
20-36	SP313	覆土	鉄	水栗通貫	1408	-	-	0.5	
20-37	SP322	覆土	鉄	水栗通貫	1408	2.3	0.6	1.6	
20-38	SP322	覆土	鉄1	水栗通貫	1408	2.3	0.6	1.4	
20-39	SP322	覆土	鉄2	(材質不能)	-	-	-	0.2	
20-40	SP459	覆土	1	水栗通貫	1408	-	0.7	0.5	
20-41	SP459	覆土	2	水栗通貫	1408	-	0.6	0.6	
20-42	SP471	覆土	3	水栗通貫	1408	1.8	0.8	0.4	
20-43	SP471	覆土	4-1	水栗通貫	1408	2.1	0.6	0.6	
20-44	SP471	覆土	5-7	水栗通貫	1408	2.1	0.6	1.0	接合資料
20-45	SP471	覆土	6	水栗通貫	1408	2.2	0.7	1.0	孔形状が丸く、s+可能性あり
20-46	SP471	覆土	8	水栗通貫	1408	-	0.6	0.6	
21-1	SP471	覆土	9	水栗通貫	1408	1.9	0.7	0.7	
21-2	SP471	覆土	10	水栗通貫	1408	-	0.5	0.4	
21-3	SP471	覆土	1	水栗通貫?	1408?	-	-	0.4	
21-4	SP471	覆土	2	水栗通貫	1408	-	-	0.3	
21-5	SP471	覆土	4-2	(材質不能)	-	-	-	0.2	水栗通貫小
21-6	SP474	覆土	1	水栗通貫	1408	2.3	0.6	0.8	
21-7	SP474	覆土	2	水栗通貫	1408	-	0.6	0.3	
21-8	SP474	覆土	4	水栗通貫	1408	-	0.7	0.9	
21-9	SP474	覆土	6	水栗通貫	1408	-	0.7	0.5	
21-10	表探	-	-	水栗通貫	1408	2.2	0.6	1.3	
21-11	表探	-	-	寛水通貫 (新)	1697	2.3	0.7	2.4	

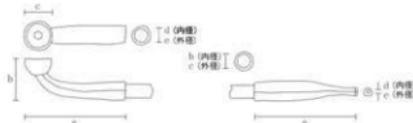
## 銅製品

回号	図様	出土地点	層位	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
21-12	釘?	SK36	覆土	銅製品	3.4	0.4	0.4	3.7	
21-13	釘	SK47	覆土	鉄1	2.3	0.9	0.7	3.1	
21-14	釘	SK47	覆土	釘	4.1	0.9	0.3	1.8	
21-15	釘	SK47	覆土	鉄1	2.7	0.4	0.3	0.9	
21-16	釘?	SK48	覆土	鉄1	3.2	1.0	0.7	2.2	
21-17	釘?	SK49	覆土	鉄1	3.6	1.0	0.5	4.3	
21-18	釘?	SK50	覆土	鉄	2.9	0.6	0.3	1.9	
21-19	不明製品	SK51	覆土	鉄	3.2	2.1	0.7	4.3	

## 鎌

( ) 残存部

回号	図様	出土地点	層位	取上番号	a (cm)	b (cm)	c (cm)	d (cm)	e (cm)	重量 (g)	備考
21-20	鎌首	SP326	覆土	キキ6-1	7.3	(1.1)	(0.8)	1.1	1.2	8.8	穂部及び古位輪半並段階
21-21	喉口	SK47	底面直上	キキ6-1	6.4	0.7	0.8	0.2	0.6	4.7	



## 銅製品

回号	図様	出土地点	層位	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
21-22	板状製品	SK29	覆土	銅製品1	6.1	3.0	0.6	20.4	輪+杖、非目地小
21-23	不明製品	SP294	覆土	銅製品	2.2	5.3	0.6	13.5	

## 第4章 自然科学的分析

### 第1節 千石屋敷遺跡出土炭化材および木材の樹種同定

(株)パレオ・ラボ

#### 1. はじめに

八戸市に所在する千石屋敷遺跡で近世の遺構から出土した炭化材と木材について、樹種同定を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、いずれもSK47から出土した炭化材および木材で、底面から出土した炭化材が8点と、覆土から出土した木材が2点と炭化材が1点の、計11点である。遺構の時期は、江戸時代後期頃の廃絶と推定されている。

炭化材については、樹種同定に先立ち、目視と実体顕微鏡を用いて木取りの確認と径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

木材の樹種同定は、木取りの確認後、試料から剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。残りの試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

#### 3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属のみ1分類群、広葉樹ではコナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）のみ1分類群の、計2分類群が確認された。

結果の一覧を表1に示す。炭化材はすべてコナラ属コナラ節、木材は2点ともマツ属複維管束亜属であった。試料の形状は、木-1が芯持丸木、炭化材-2が角材？、炭化材-7がみかん割り状で、その他はすべて3cm角以下の破片であった。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、顕微鏡写真を図版に示す。

##### (1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版1 1a-1c (木-1)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

##### (2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 2a-2c (炭化材-1)、3a-3c (炭化材-2)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単

列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

表1 千石屋敷遺跡から出土した炭化材および木材の樹種同定結果

No.	サンプル種別	調査区	遺構名	取上地点	樹種	形状	残存径	時期
木-1-1	木材	C	SK47	覆土	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	半径1.5cm	江戸時代後期頃の廃絶
木-1-2	炭化材	C	SK47	覆土	コナラ属コナラ節	破片	0.5×1.2cm	江戸時代後期頃の廃絶
木-2	木材	C	SK47	覆土	マツ属複雑管束亜属	破片	半径2cm以下	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-1	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	破片	1×3cm	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-2	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	角材?	3×4.5cm	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-3	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	破片	2cm角以下	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-4	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	破片	2cm角以下	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-5A	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	破片	2.5×3.5cm	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-5B	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	破片	2cm角以下	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-6	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	破片	3cm角以下	江戸時代後期頃の廃絶
炭化材-7	炭化材	C	SK47	底面	コナラ属コナラ節	みかん割り状	半径2.5cm	江戸時代後期頃の廃絶

#### 4. 考察

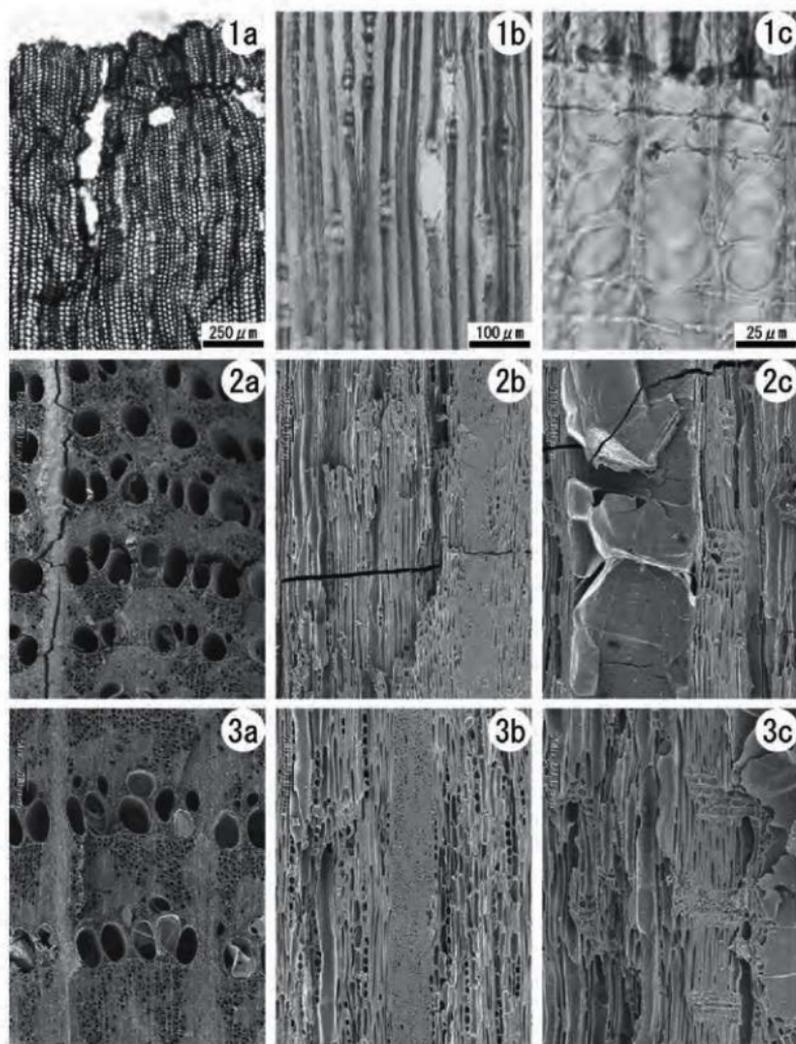
SK47から出土した炭化材は、すべてコナラ節であった。形状は3cm角以下の破片が多いが、角材? (炭化材-2) やみかん割り状 (炭化材-7) の試料もみられた。用途は不明であるが、みかん割り状の試料は半径が2.5cmで小径であり、燃料材の可能性が考えられる。青森県では古墳時代以降の炭化材の同定例ではコナラ節が多い傾向があり、八戸市の葦窪遺跡でも江戸時代後半の燃料材でコナラ節が多数確認されている (伊東・山田編, 2012)。コナラ節の材は重硬で、燃料材としては火持ちが良く有用な材である。

一方、SK47から出土した生の木材は2点ともマツ属複雑管束亜属であった。試料の状態は悪いが、2点とも元は丸木であったと思われる。半径2cm以下で小径のため枝材と推測されるが、用途は不明である。

(黒沼保子)

#### 引用文献

伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学-出土木製品用材データベース-, 449p, 海青社。



図版1 千石屋敷遺跡出土炭化材および木材の顕微鏡写真

1a-1c. マツ属椎葉管束亜属 (木-1-1)、2a-2c. コナラ属コナラ節 (炭化材-1)、3a-3c. コナラ属コナラ節 (炭化材-2)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

## 第2節 千石屋敷遺跡出土の種実遺体

(株) バレオ・ラボ

## 1. はじめに

八戸市に所在する千石屋敷遺跡で近世の遺構から出土した種実遺体について同定を行った。

## 2. 試料と方法

試料は、発掘調査現場で取り上げられた1試料である。試料の種実遺体は、近世の墓坑であるA区SK33の覆土から出土した銭に付着していた。

種実の同定・計数を肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

## 3. 結果

同定した結果、草本植物のヒエ有ふ果が得られた(表1)。産出数は完形個体が8点、破片が2点であった。

次に、種実遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) ヒエ *Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz 有ふ果  
イネ科

黄褐色で、楕円形。先端と基部はやや尖り、内穎側は膨らまない。微細な縦筋がある。壁は薄く、光沢がある。計測可能な5点の大きさは、長さ2.8～3.1(平均2.9)mm、幅2.0～2.8(平均2.2)mm。

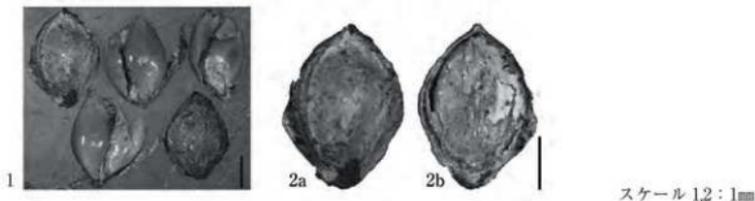
表1 出土した種実遺体

調査区	A区	
遺構名	SK33	
層位	覆土	
遺物番号	銭	
分類群	時期	近世
ヒエ	有ふ果	8(2)
括弧内は破片数		

## 4. 考察

近世の墓に副葬された銭に付着していた種実遺体を同定した結果、すべて栽培植物のヒエ有ふ果であった。ヒエは有ふ果のみで、苞穎はみられなかった。このため、少なくとも脱穀を行い、苞穎を除去した段階で銭とともに副葬したと考えられる。

(佐々木由香・バンダリ スタルシヤン)



図版1 千石屋敷遺跡SK33から出土した大型植物遺体

1・2 ヒエ有ふ果

## 第3節 千石屋敷遺跡出土漆器の塗膜分析

(株) バレオ・ラボ

## 1. はじめに

千石屋敷遺跡より出土した漆器について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

## 2. 試料と方法

分析対象は、1668年以降の遺構とみられている墓坑 SK43より出土した漆器3点と江戸時代後期頃の庵籠とみられている SK47より出土した漆器1点の、計4点である(表1)。いずれも表面は赤色で、胎部は消失して塗膜片のみとなっている。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。

表1 分析対象一覧

分析No.	出土遺構	取上地点	遺構の時期	特徴	備考
1	SK43	覆土	1668～	赤色、胎部消失	漆
2	SK43	覆土	1668～	赤色、胎部消失	漆-1
3	SK43	覆土	1668～	赤色、胎部消失	漆-2
4	SK47	覆土	江戸後期庵籠	赤色、胎部消失	漆

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

赤外分光分析は、塗膜の表面から手術用メスを用いて薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光(株)製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム(#2000)を用いて厚さ約50μm前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-5900LV)による反射電子像観察を行った。さらに、主に赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置(同JED-2200)による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム(#2000)を用いて厚さ約20μm前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

## 3. 結果および考察

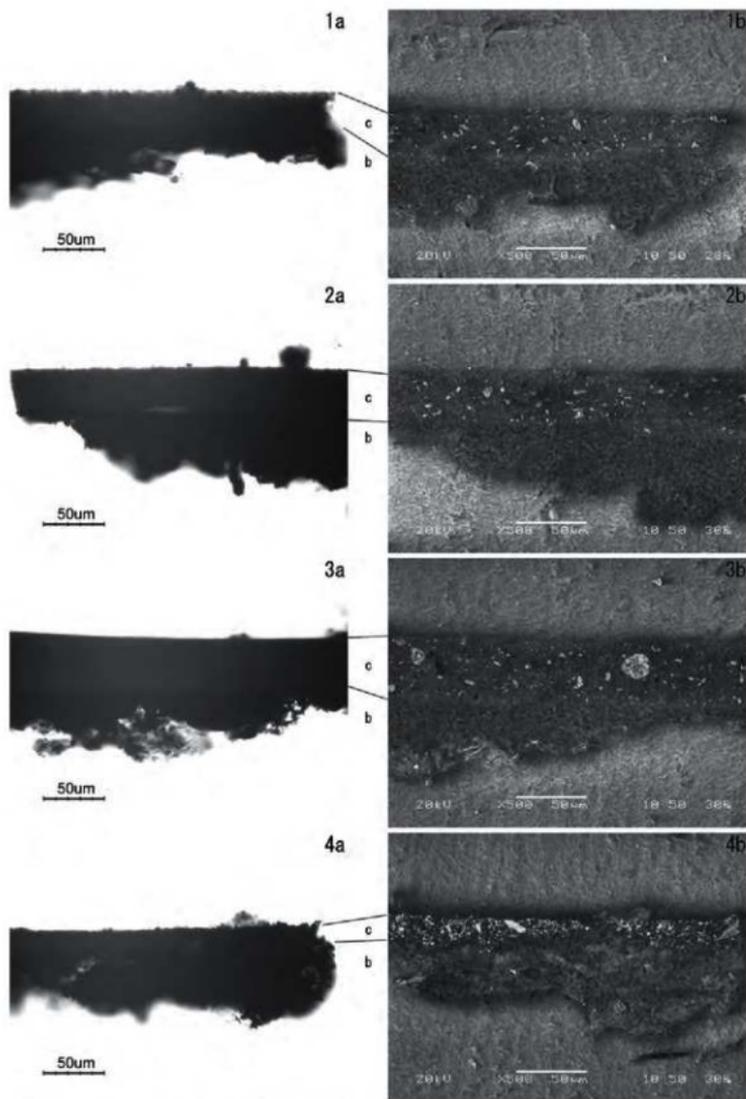
以下に、塗膜分析結果について述べる。なお、図1の赤外吸収スペクトルは、縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber( $\text{cm}^{-1}$ ;カイザー))である。また、各スペクトルはノーマライズされている。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す(表2)。

いずれの赤色塗膜も、炭粉からなる下地b層の上に赤色漆が1層(c層)塗られていた(図版1)。

赤外分光分析では、分析No.1とNo.3、No.4から生漆を特徴づけるウルシオール(吸収No.6～No.8)が認められた(図1-1、3、4)。また、分析No.2からは、ウルシオールの

表2 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシオール成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	



図版1 塗製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b)

1. 分析 No.1赤色塗膜 2. 分析 No.2赤色塗膜 3. 分析 No.3赤色塗膜 4. 分析 No.4赤色塗膜

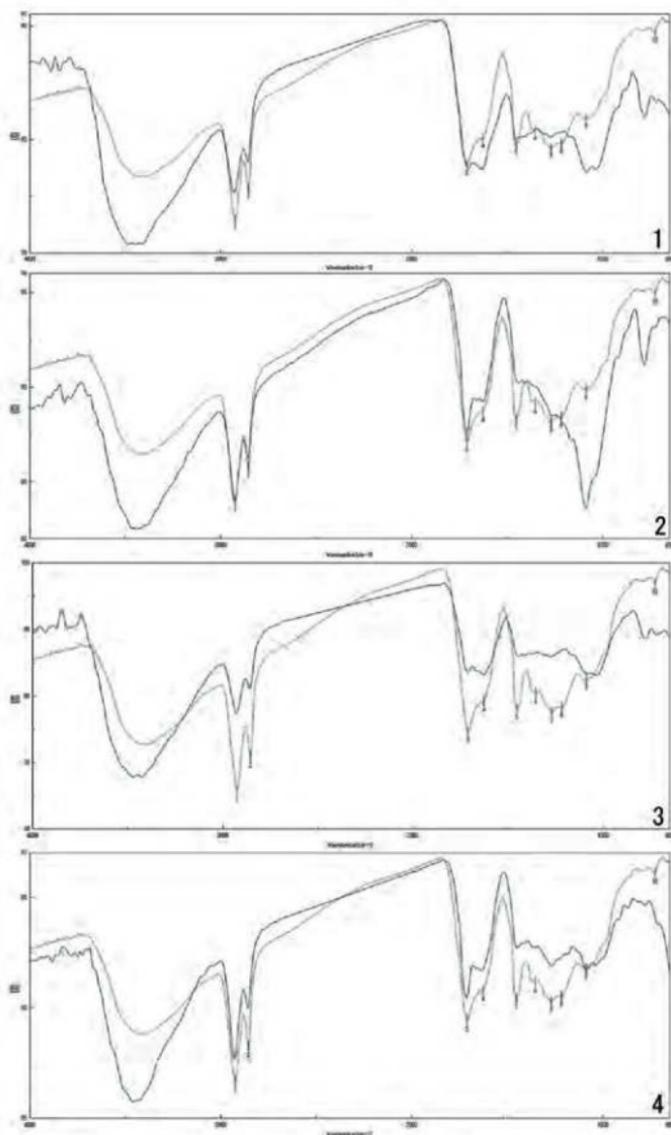


図1 塗膜の赤外分光スペクトル (実線：塗膜、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置)

1. 分析No.1 2. 分析No.2 3. 分析No.3 4. 分析No.4

一部吸収（吸収 No.7）が認められた（図1-2）。分析 No. 2 は、吸収 No. 9 付近にゴム質の大きな吸収がみられたため、劣化が著しいと考えられる。いずれも漆と同定された。

いずれの試料も赤色漆層 c 層からは、X線分析で鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）が検出されており（表3）、ベンガラが使用されていると考えられる。SK47出土の分析 No.4は、鉄の含有量がSK43出土の3点よりも多い。また、分析 No.4は反射電子像においてもベンガラに由来すると考えられる明色粒子がSK43出土の3点よりもやや多く（図版1-1b～4b）、漆にベンガラが比較的多く混ぜ込まれていたといえる。

各塗膜の特徴をまとめた一覧を表4に示す。

#### 4. おわりに

千石屋敷遺跡から出土した漆器4点について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、いずれも炭粉下地にベンガラの赤色漆層1層が観察された。

（竹原弘展・藤根久・米田恭子）

表3 赤色塗膜層のX線分析結果（mass%）

分析No.	塗膜層	C	$\text{Al}_2\text{O}_3$	$\text{SiO}_2$	CaO	$\text{Fe}_2\text{O}_3$	total
1	c層	64.94	—	7.42	1.42	26.22	100.0
2	c層	60.00	1.23	12.18	—	26.58	100.0
3	c層	58.02	—	12.17	—	29.81	100.0
4	c層	38.22	—	2.17	—	59.61	100.0

表4 塗膜分析結果

分析No.	下地	塗膜層
1	炭粉 1層	赤色漆層（ベンガラ）
2	炭粉 1層	赤色漆層（ベンガラ）
3	炭粉 1層	赤色漆層（ベンガラ）
4	炭粉 1層	赤色漆層（ベンガラ、 顔料含有量やや多い）

## 第4節 千石屋敷遺跡から出土した骨

(株) バレオ・ラボ

## 1. はじめに

青森県八戸市に位置する千石屋敷遺跡の発掘調査で出土した骨のうち、人骨と同定された試料以外について報告する。

試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

## 2. 試料と方法

試料は、土坑であるSK27の2試料、SK33の1試料、SK50の1試料の、計4試料である。遺構の時期は、SK27が不明(中・近世?)、SK33が1697年以降、SK50が1408年以降である。

## 3. 結果と考察

いずれの試料も残存状態は悪く、部位の同定ができず、分類群も哺乳綱の同定に留まった(表1)。残存状態の悪さは、生の骨であるため、埋没中に分解が進んだためと思われる。哺乳綱とした試料には明らかにヒトと判断できる骨は無かったものの、ヒトを含んでいる可能性は排除できない。焼けている骨片は見られなかった。破片数は多いが、いずれも小片である。3遺構とも、何個体の動物に由来するかは不明であった。

(中村賢太郎)

表1 千石屋敷遺跡出土骨

分析No.	試料名	遺構名	層・位置	時期	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
1	骨-1	SK27	覆土	不明(中・近世?)	哺乳綱	不明	不明	破片	8	
2	頭蓋骨-1		底面	不明(中・近世?)	哺乳綱	不明	不明	破片	17	頭蓋骨?
3	骨-1	SK33	覆土	1697～	哺乳綱	不明	不明	破片	6	
4	骨-1	SK50	覆土	1408～	哺乳綱	不明	不明	破片	5	



図版1 千石屋敷遺跡から出土した骨

1. 哺乳綱部位不明(分析No.2, SK27) 2. 哺乳綱部位不明(分析No.3, SK33) 3. 哺乳綱部位不明(分析No.4, SK50)

## 第5節 千石屋敷遺跡から出土した人骨

(株)パレオ・ラボ

## 1. はじめに

千石屋敷遺跡は、青森県八戸市に所在する中世～近世を主とする遺跡であり、平成25年に青森県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査された。人骨は、中世と近世の土坑墓から各1体ずつ、計2体が出土した。以下、2体分の出土人骨について記載する。なお、同一個体で放射性炭素年代測定と安定同位体比測定も行っている（放射性炭素年代測定および安定同位体比測定の報告を参照）。同定および記載については、梶ヶ山真理氏にご指導いただいた。

試料は、青森県埋蔵文化財調査センターで保管されている。

## 2. 人骨所見

SK22（中世墓）：土葬された人骨である。保存状態が非常に悪く、保存されている人骨の部位は図1の通りである。

右側頭骨外板は、骨表面の著しい風化による傷みが非常に強い。原型をとどめていない。一方、内板はかろうじて静脈溝の圧痕が観察できる程度である。また、錐体を含んでおり、下顎関節窩や外耳孔は比較的観察できる。錐体は普通程度の大きさであり、外耳孔は楕円形を呈している。右側頭骨の乳様突起の発達は弱く、小さい。女性的な形態である。頬骨弓は大きく破損している。右の顎関節窩はとくに広く大きいとはいえない。辺縁部には骨棘は形成されていない。顎関節症の痕跡はみられない。また、加齢などは観察できる範囲からはない。



図1 SK22の人骨部位

さらに、右上顎骨と右下顎骨および歯が検出されている。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

表1 SK22（中世墓）出土人骨の歯式

M3	M2	M1	P2		
/	/	M1	P2	P1	

歯の咬耗は、エナメル質が大きくすり減り、象牙質の露出がある。一部の大白歯は、咬耗程度が著しくすすんでおり、象牙質が面状に露出した状態である。プロカのⅡ～Ⅲに相当し、成人（後半）～熟年の段階に相当すると思われる。また、1.5×0.4cmほどの大きさの右眼高上縁の一部が保存されている。銅製品が密着していたようで、緑色に変色して検出された。

右寛骨臼と右大腿骨頭および右大腿骨体近位部の連結部、いわゆる右股関節が保存されている。保存状態は非常に不良である。骨質が脆く傷みが激しい。寛骨臼は半円ほど残っている。大腿骨頭窩は

骨増殖によりすべてふさがり、経年性的変化が著しい。また、骨表面が破損した箇所から観察できる骨体内の海綿質が非常に粗造である。いわゆる骨粗鬆症の所見である。骨体部分は普通の太さである。性差が確認できるほどの顕著な特徴はない。

以上のことから、当土坑墓から検出された人骨は、乳様突起の形態や外耳孔の大きさから、女性の可能性が高い。骨粗鬆症は女性によく見られる特徴でもある。

年齢は、歯の咬耗から成人（後半）～熟年であろう。

SK43（近世墓）：乳歯と永久歯、頭蓋骨の一部が検出されている。同一個体の歯である。歯の保存状態は以下の歯式に示した。

表2 SK43（近世墓）出土人骨の歯式

M1			I2	I1		I2			M1
	p2	p1					c	p1	p2
			p1	c			c	p1	p2
M1	p2			I		I			M1

太字・大文字は永久歯である。細字・小文字は乳歯である。永久歯はすべて未萌出であり、歯冠が未完成である。特に、上顎中切歯の歯冠は半分程度しか形成されていない。しかし、歯冠が非常に大きく、舌側面には両側に深い溝状のものが形成されており、明らかにシャベル型である。歯冠計測値から性別を判断することは困難であるが、この個体の中切歯の大きさは非常に大きく、男性と推測したほうが矛盾はない。

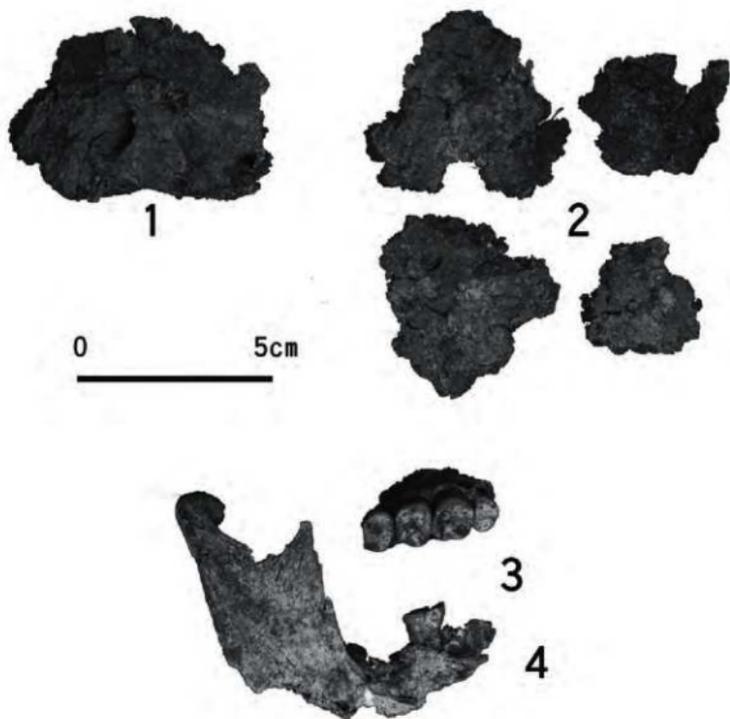
歯以外に左錐体が1点保存されている。非常に小さく乳幼児のものである。

この個体は、歯の萌出状態や永久歯歯冠の形成状態から判断して、4～5才の幼児と推測される。性別については、第2次成長期を経っていないので骨に表れていない。そのため、ここでは性別不明としか判断できない。特に、保存状態が悪く、性差判別の際に用いる部位（寛骨等）が保存されていないために判定は不可能である。しかしながら、歯冠が形成中の右上顎中切歯は非常に大きく、男性（男子）の可能性を示唆する。

### 3. まとめ

千石屋敷遺跡から出土した人骨2体のうち、SK22（中世墓）から出土した人骨は、年齢が成人（後半）～熟年で、性別は女性の可能性が高い個体である。また、SK43（近世墓）から出土した人骨は、4～5才の幼児個体である。性別の判断は、性別判定に用いる部位がないことや、未成年であるのでわからない。しかしながら、上顎中切歯が非常に大きいことを考えると男子である可能性を指摘したい。

（中村賢太郎・孔智賢）



図版1 SK22の人骨部位

1. 右踵体 2. 右側頭骨 3. 右上顎骨 4. 右下顎骨

## 第6節 千石屋敷遺跡出土人骨の放射性炭素年代測定

(株) パレオ・ラボ

## 1. はじめに

青森県八戸市に位置する千石屋敷遺跡より出土した人骨について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

## 2. 試料と方法

試料は、中世墓（中世後期）であるSK22より出土したヒト歯（右下第1・2前臼歯）と近世墓であるSK43より出土したヒト歯（破片）の2点である。SK22出土人骨の測定番号はPLD-27159、SK43出土人骨の測定番号はPLD-27160である。それぞれの試料からコラーゲンを抽出した。抽出したコラーゲンの一部は、コラーゲンの質チェック用のC/N比、食性推定用の炭素・窒素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ ）の測定に供した（別項参照）。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製15SDH）を用いて測定した。得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$ 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による想定年代	前処理データ	前処理
PLD-27159	遺構：SK22	種類：骨（ヒト，右下P1.2） 状態：dry	中世後期	前処理前重量：714.25mg 燃焼量：7.89mg 精製炭素量：3.12mg 炭素回収量：1.05mg	超音波洗浄 コラーゲン抽出
PLD-27160	遺構：SK43	種類：骨（ヒト，歯，破片） 状態：dry	近世	前処理前重量：679.41mg 燃焼量：1.91mg 精製炭素量：0.61mg 炭素回収量：0.52mg	超音波洗浄 コラーゲン抽出

## 3. 結果

表2に、測定回数と、炭素・窒素同位体比を求めるために質量分析計で測定した炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正に用いるために加速器で測定した炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した $^{14}\text{C}$ 年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代（yrBP）の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期5730 $\pm$ 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) 質量分析計で測定	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) AMSで測定	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-27159	9	-13.9	-14.63 $\pm$ 0.13	422 $\pm$ 19	420 $\pm$ 20	1441AD(68.2%)1464AD	1435AD(95.4%)1485AD
PLD-27160	8	-15.7	-13.81 $\pm$ 0.26	229 $\pm$ 21	230 $\pm$ 20	1653AD(39.0%)1666AD 1785AD(29.2%)1796AD	1642AD(51.4%)1675AD 1777AD(37.6%)1800AD 1941AD( 6.5%)...

#### 4. 考察

中世墓 SK22出土人骨(PLD-27159)から抽出したコラーゲンは、C/N比が3.33、コラーゲン収率が6.01%と、深刻な変質や劣化は被っていないと判断された。ただし、炭素安定同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )と窒素安定同位体比( $\delta^{15}\text{N}$ )から、SK22出土人骨は、生前、海産物を摂取していた可能性も考えられ、海洋リザーバー効果により見かけ上の<sup>14</sup>C年代が古くなっている可能性がある。なお、八戸周辺海域における陸産物と海産物の<sup>14</sup>C年代差は350~400<sup>14</sup>C years程度である(Yoshida et al., 2010)。PLD-27159は、<sup>14</sup>C年代が420 $\pm$ 20<sup>14</sup>C BP、2 $\sigma$ 暦年代範囲が1435-1485 cal AD(95.4%)であった。15世紀あるいはそれよりいくぶん新しい時期が人骨の時期と言えらる。銅銭などの遺物から想定された中世後期と矛盾しない。

近世墓 SK43出土人骨(PLD-27160)から抽出したコラーゲンは、C/N比が3.87と、基準となる2.9~3.6(DeNiro, 1985)を越えており、コラーゲン収率が0.56%と低かったため、コラーゲンの変質や劣化の可能性がある。そのため、骨の外部に由来する炭素による汚染の影響を考慮する必要がある。PLD-27160は、<sup>14</sup>C年代が230 $\pm$ 20<sup>14</sup>C BP、2 $\sigma$ 暦年代範囲が1642-1675 cal AD(51.4%)、1777-1800 cal AD(37.6%)、1941 cal AD以降(6.5%)と17~20世紀の年代が得られたが、汚染が疑われるコラーゲンの測定結果であるため、参考値として扱うべきである。

(伊藤茂・安昭彦・廣田正史・山形秀樹・小林絃一)  
(Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎)

## 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- DeNiro, M. J. (1985) Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. *Nature* 317: 806-9.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代」: 3-20. 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.
- Yoshida, K., Hara, T., Kunikita, D., Miyazaki, Y., Sasaki, T., Yoneda, M. and Matsuzaki, H. (2010) Pre-Bomb Marine Reservoir Ages in the Western Pacific. *Radiocarbon*, 52 (2-3), 1197-1206.

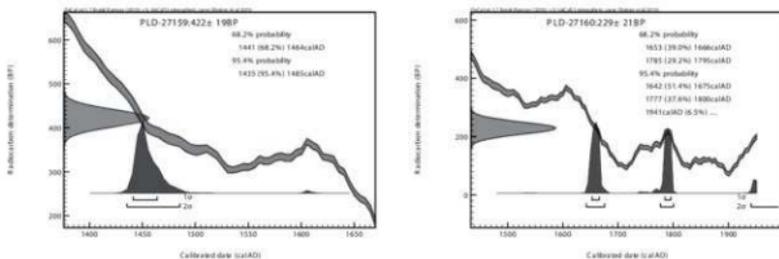


図1 暦年較正結果

## 第7節 千石屋敷遺跡出土人骨の炭素・窒素安定同位体比分析

(株)パレオ・ラボ

## 1. はじめに

青森県八戸市に位置する千石屋敷遺跡より検出された人骨を対象として、食性を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、コラーゲンの質チェック用に炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定を行っている（放射性炭素年代測定参照）。

## 2. 試料および方法

試料は、中世墓（中世後期）であるSK22より出土したヒト歯（右下第1・2前臼歯）と近世墓であるSK43より出土したヒト歯（破片）の2点であり、試料番号として放射性炭素年代測定の測定番号を用いている。

測定を実施するにあたり、試料は、超音波洗浄を施して表面に付着した汚れを除去した後、試料からコラーゲンを抽出し、それを用いて測定を行った。

炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。

炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ ）および窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$ ）の測定には、質量分析計DELTAplus Advantage（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比ではIAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比ではIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで $\text{CO}_2$ と $\text{N}_2$ を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度 $1000^\circ\text{C}$ 、還元炉温度 $680^\circ\text{C}$ 、分離カラム温度 $45^\circ\text{C}$ である。分離した $\text{CO}_2$ および $\text{N}_2$ はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

## 3. 結果

表1に、試料情報と炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ ）、窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$ ）、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。

表1 結果一覧表

試料番号	試料情報	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
PLD-27159	遺構：SK22 種類：人骨（歯） 備考：右F P1.2	-139	9.71	40.0	14.0	3.33
PLD-27160	遺構：SK43 種類：人骨（歯） 備考：破片	-13.7	13.5	26.7	8.04	3.87

一般的に骨のコラーゲンのC/N比は2.9～3.6の間に取まる (DeNiro, 1985)。試料のC/N比は、SK22のPLD-27159が3.33でこの範囲内に取まる。一方、SK43のPLD-27160は3.87であり、この範囲よりやや高い値を示したことから、コラーゲンの質に問題があると思われる。すなわち、C/N比がこの範囲より高い場合、試料のコラーゲン由来ではない炭素が混入している可能性が考えられる。さらに、SK43のPLD-27160はコラーゲン収率も0.56%と低い。そのため、SK43のPLD-27160は考察の対象から除外する。

図1に炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係を示した。

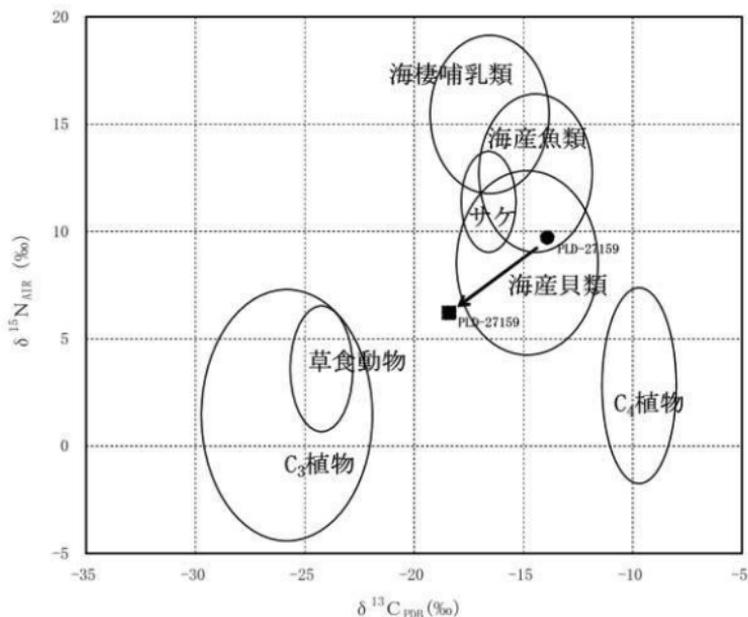


図1 炭素・窒素安定同位体比 (吉田・西田 (2009) に基づいて作成)

#### 4. 考察

人の成長に必要な生体組織を構成する際、食物に含まれているタンパク質が利用される。このとき、食物の分子組成は変化するが、同位体組成はほとんど変えることなく体組織の一部に残存する。このため、人の体組織の同位体組成から、主に消費した食物の情報を推定することが可能となる。

人が食物中のタンパク質を利用して体組織を構成する際に同位体分別が起きる。人骨中のコラーゲンについては、分析値に $\delta^{13}\text{C}$ で4.5%、 $\delta^{15}\text{N}$ で3.5%差し引くことにより体内での同位体分別効果を補正することができる (Ambrose, 1993)。図1に同位体分別効果を補正する前の値を丸(●)で、

補正した結果を四角 (■) で示した。

中世墓である SK22 の PLD-27159 は、補正後の値が海産貝類付近を示したため、海産貝類などの海産物を主に食していた可能性がある。あるいは、プロットされた位置は、 $C_3$ 植物と  $C_4$ 植物の間でもあるため、イネなど大多数の植物が含まれる  $C_3$ 植物とアワやヒエ、キビなどの雑穀類が含まれる  $C_4$ 植物の両方に依存した食生活だった可能性もある。海産物依存なのか、 $C_3$ 植物と  $C_4$ 植物両方への依存なのかを区別するためには分析する個体数を増やし、図 1 における複数個体の分布傾向を見る必要がある。また、個体間を比較して、 $\delta^{13}C$  が高いほど  $^{14}C$  年代が古くなる傾向があれば、海洋リザーバーの影響と判断できるため、海産物を主に食していた可能性がある。反対に  $\delta^{13}C$  が高くとも  $^{14}C$  年代が同じならば、 $C_3$ 植物と  $C_4$ 植物の両方に依存した食生活である可能性がある。

(山形秀樹・中村賢太郎)

#### 引用・参考文献

- DeNiro, M. J. (1985) Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. *Nature* 317: 806-9.
- 赤澤 威・南川雅男 (1989) 炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元. 田中 琢・佐原 眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」: 132-143. クバプロ.
- Ambrose, S. H. (1993) Isotopic analysis of paleodiet: methodological and interpretive considerations. In: Sandford MK, editor. *Investigations of ancient human tissue: chemical analysis in anthropology*. Langhorne: Gordon and Breach. 59-130.
- 吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 平成16-18年度科学研究補助金基礎研究 B (課題番号16300290) 研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」, 85-95.
- 吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国 新潟」: 87-99. 新潟日報事業社.

## 第5章 総括

八幡遺跡および千石屋敷遺跡は、八戸市街地西方の馬淵川右岸に位置し、遺跡の中央部には旧三戸街道を起源とする国道104号線が貫く。一帯には南部一宮に列せられる古社、櫛引八幡宮が鎮座し、周辺には櫛引遺跡・殿見遺跡などの著名な遺跡も存在するなど文化的遺産に恵まれた土地柄である。このように同一の地理的・歴史的環境によって育まれた両遺跡は、これまでに幾度か発掘調査が実施されており、その都度、歴史の解明がなされている（下表）。

八幡遺跡発掘調査報告書一覧

機関	発行年	書名	シリーズ名	調査地点
八戸市教育委員会	1988	「八幡遺跡発掘調査報告書」	市26集	1・2
八戸市教育委員会	1992	「八幡遺跡発掘調査報告書Ⅱ」	市47集	3
八戸市教育委員会	2005	「八幡遺跡第3次」〔八戸市内遺跡発掘調査報告書〕22	市109集	4（試掘）
八戸市教育委員会	2007	「八幡遺跡－発掘調査報告書Ⅳ－」	市115集	4
八戸市教育委員会	2010	「八幡遺跡第5地点」〔八戸市内遺跡発掘調査報告書〕27	市124集	5
八戸市教育委員会	2010	「八幡遺跡Ⅴ」	市131集	5
八戸市教育委員会	2014	「八幡遺跡第6地点」〔八戸市内遺跡発掘調査報告書〕31	市143集	6
青森県教育委員会	2013	「八幡遺跡 千石屋敷遺跡」	県524集	国道104号

千石屋敷遺跡発掘調査報告書一覧

機関	発行年	書名	シリーズ名	調査地点
八戸市教育委員会	2010	「千石屋敷遺跡第1地点」〔八戸市内遺跡発掘調査報告書〕27	市124集	1
八戸市教育委員会	2010	「千石屋敷遺跡第2地点」〔八戸市内遺跡発掘調査報告書〕27	市124集	2
八戸市教育委員会	2011	「千石屋敷遺跡第3・4・5地点」〔八戸市内遺跡発掘調査報告書〕28	市134集	3～5
八戸市教育委員会	2014	「千石屋敷遺跡第6・7地点」〔八戸市内遺跡発掘調査報告書〕31	市143集	6・7
青森県教育委員会	2013	「八幡遺跡 千石屋敷遺跡」	県524集	国道104号

さて、今回の調査は、県事業としては第2次調査にあたる。前回同様、交通量が多い幹線道路沿いの住宅街に設けられた調査区を分割しながら順次終了させていく工程となった。全般的に近・現代の整地・盛土・擾乱が著しく、今日に至るまでの人的活動が盛んだった様子を示す。

調査の結果、過去の調査と同様の成果が得られ、幾つか新発見も認められた。総じて、縄文時代晩期と古代は八幡遺跡側が中心であり、中世後半以降、千石屋敷遺跡側においても屋敷や墓が築かれ、次第に今日の姿が形作られていったように見受けられる。以下、幾つか要点を掲げ、結びとする。

### 八幡遺跡

縄文時代早期・晩期、奈良・平安時代、中・近世の資料が各々少量発見された。縄文時代は早期の貝殻文段階の土器片が1点認められた。晩期も土器の僅かに出土に留まり、遺跡主体部から離れている模様である。古代も断片的な資料が主体となるが、これまでの調査同様、8世紀代から10世紀にかけて集落が形成された様子をうかがわせる。

## 千石屋敷遺跡

縄文時代早期・晩期、中・近世の資料が得られた。縄文時代は、早期に落とし穴が築かれたことに加え、晩期の資料が希薄であることが判明した。古代も同様の傾向があり、八幡遺跡から本遺跡第1次調査区北端まで認められる集落の広がり、今回の第2次調査区には及ばず、遺物の出土量もごく僅かであった。

しかし、中世段階は、千石屋敷遺跡側にも遺構・遺物の広がりが認められる。15世紀以降、掘立柱による扉または建物等の施設や土坑墓が姿を現す。断片的に捉えた施設は、南北軸N-34°-E前後を示し、柱の南東側埋土に永楽通寶を選択的・意図的に埋納した柱穴によって構成される（SP459・471・474）。このような事例は全国的にみても稀であるため明言し得ないが、恐らく銭貨の「永楽」という吉祥文字に因んだ地鎮等の祭祀・儀礼的行為と考える。その他、土坑墓内に埋葬された成人女性とみられる人骨の分析により、当時の食生活について幾つかの可能性が示された（SK22）。なお、時期不明の施設として指摘した幾つかは、上記の南北軸に類似または調和するものが含まれる（SP572ほか、SP237ほか、SP479ほか、SP287ほか）。また、本段階の建物長軸は、南北に長く、桁行が通りに沿う可能性が高い。

続く中世末～近世初期段階には、南北軸N-28°-Eを示す掘立柱建物が構築されており（SP313ほか）、18世紀代に改修された可能性を指摘した（SP311ほか）。以後、江戸時代以降の構築・廃絶を示す施設の多くは、南北軸N-29°-E前後を示す傾向にあり（SP460ほか、SP532ほか、SP537ほか）、18世紀以降が確実視される施設には柱間190cm（6.3尺）が用いられる。時期不明として指摘した施設の中にも同様の軸が認められ（SP327ほか、SP277ほか、SP461ほか）、やはり柱間190cm（6.3尺）が含まれる。本段階の建物長軸は、東西に長く、梁行が通りに沿う傾向にある。但し、中には中世段階に類似する南北軸の建物が江戸時代前期頃まで存在した可能性も考えられる（SP254ほか）。17世紀後半以降、幼児の土坑墓（SK43）が築かれるなど、いわゆる屋敷墓を形成する段階もあった模様である。この頃には、堅穴遺構が複数築かれていた様子も窺い知れ、なかでもSK47は江戸時代後期頃の好例となる。

ところで、南部藩士漆戸茂樹が記した『北奥路程記』によると、江戸時代後期頃の千石屋敷遺跡から八幡遺跡一帯は、櫛引八幡宮とこれに関わる代官・寺院・衆徒・百姓などの屋敷や畑が存在し、「五日市」と記された場所に今の国道104号線と考えられる道が描かれている。県教育委員会による2度の調査地点は、この道の脇に該当するとみられ、発見された遺構は漆戸が記録したような屋敷地の一部と捉えられる。

最後に、今回示した中・近世の軸は、狭い調査区内における断片的な資料に基づく指摘となった。ゆえに、今後更なる検証を要するが、目下、北東から南西へ延びる2つの道、すなわち中世から続く旧三戸街道を踏襲しているといわれる国道104号と、この南東側に平行する櫛引八幡宮から普門院跡にかけて延びる参道と調和的であり、将来、街道・集落・門前の景観および歴史を復元する際の検討事項となり得る（註）。当地域の歴史の変遷については、絵図や古地図等を交えた詳細な検討が必須となるが、今回の調査成果に限ってみれば、街道と集落の原形は少なくとも中世後半～末頃にまで遡り、近世初期から前期頃に少し軸を変え、今に引き継がれていると理解される。加えて、街道を軸に比較的確然とした家並みや景観が形作られていたとみられ、これを街道と建物長軸の関係から考えると、

中世後半段階は通りに面して間口を広く構えつつ屋根の平側をみせる家屋が主流だったのに対し、近世は通りに面して間口が狭く屋根の妻側をみせる家屋が主流化していったと仮定される。

(佐藤)

注：八戸市教育委員会が調査した千石屋敷遺跡第5地点の調査では、中・近世とされた施設(SA・SB)がN-34°-E、あるいはこれに直交するN-56°-Wが多く、やはり街道を意識した配置と捉えたい。これに対し、普門院跡とされる八幡遺跡第4地点の調査では、掘立柱建物跡の多くがN-11°-23°-Eの範囲に取まるとされており、差異を指摘し得る。

#### 引用・参考文献

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 「梅の木沢遺跡発掘調査報告書」

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第460集

藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大宮編年の再検討」『研究紀要』第10輯 財団法人埋蔵文化財センター

中村隼人 2007 「八幡遺跡の掘立柱建物跡について」『八幡遺跡-発掘調査報告書Ⅳ-』

八戸市埋蔵文化財調査報告書第115集

平山明寿 2002 「青森県」『中世の地鎮と銭貨』(第2分冊) 出土銭貨研究会

(社)岩手県文化財愛護協会 2002 『読み下し文 北奥路程記』

※八幡遺跡・千石屋敷遺跡に関わる発掘調査報告書は、第5章中の発掘調査・報告一覧表を参照のこと。

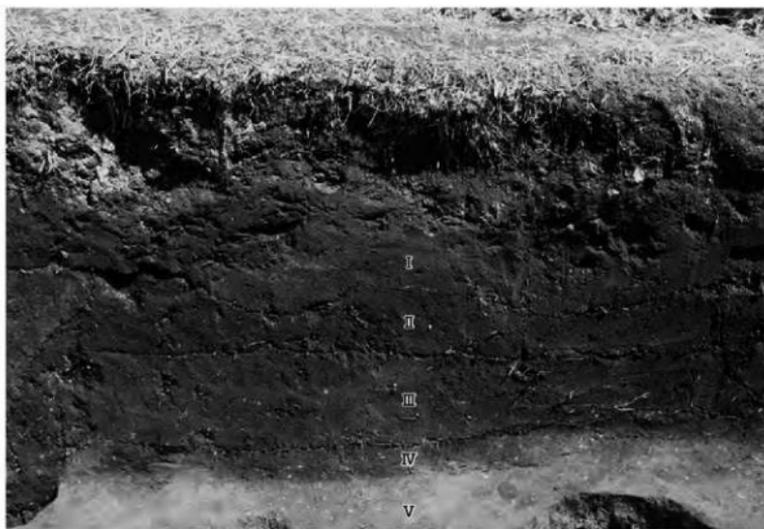


Ⅲ R-46 から北東方向 (SW →)



Ⅲ P-45 から南西方向 (NE →)

写真 1 八幡・千石屋敷遺跡 調査前風景



基本土層 Ⅲ S-47 (W→)



作業状況 Ⅲ W-49 周辺 (N→)

写真2 八幡・千石屋敷遺跡 基本土層・作業状況



第1号竖穴住居跡 (NW→)



第5号竖穴住居跡 (NE→)

写真3 八幡遺跡 竖穴住居跡



Ⅲ S-47 周辺 (SW →)



Ⅲ V-48 周辺 (NE →)

写真4 千石屋敷遺跡 調査区完掘状況 (A区)



V E-67 周辺 (SW →)



V I-69 周辺 (SW →)

写真5 千石屋敷遺跡 調査区完掘状況 (B区)



IV S-61 周辺 (NE →)



IV P-59 周辺 (SW →)

写真6 千石屋敷遺跡 調査区完掘状況 (C区)



IV E-53 周辺 (SW →)

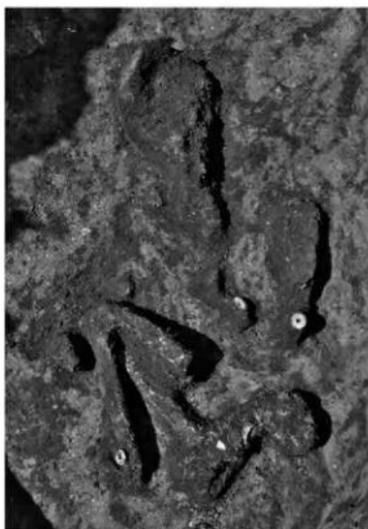


IV V-62 周辺 (SW →)

写真7 千石屋敷遺跡 調査区完掘状況 (D・E区)



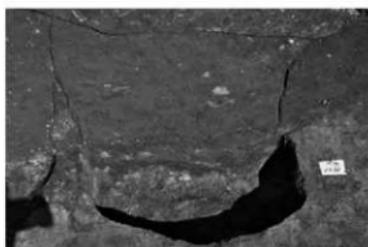
第22号土坑 (S→)



第22号土坑 出土人骨 (S→)



第23号土坑 土層断面 (NE→)



第24号土坑 (NW→)



第25号土坑 (E→)

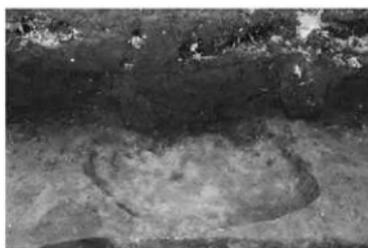


第25号土坑 土層断面 (E→)

写真8 千石屋敷遺跡 土坑①



第26号土坑 (NW→)



第27号土坑 (SE→)



第27号土坑 出土人骨 (SE→)



第28号土坑 (NE→)



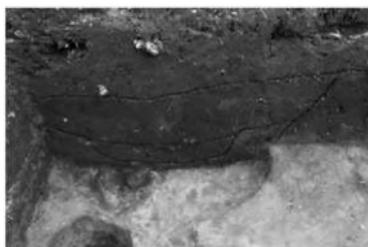
第29号土坑 (NW→)



第29号土坑 銅製品断片 (NW→)



第30号土坑 (NW→)

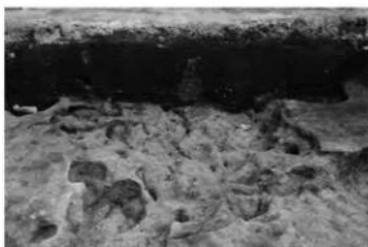


第32号土坑 (SE→)

写真9 千石屋敷遺跡 土坑②



第33号土坑 (NE →)



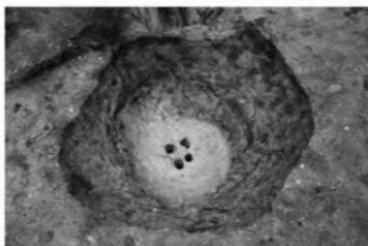
第34号土坑 (NW →)



第35号土坑 (NW →)



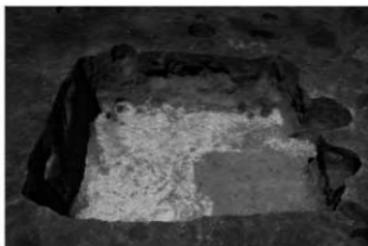
第36号土坑 (SE →)



第38号土坑 (NW →)



第38号土坑 土層断面 (NW →)



第41号土坑 (SE →)

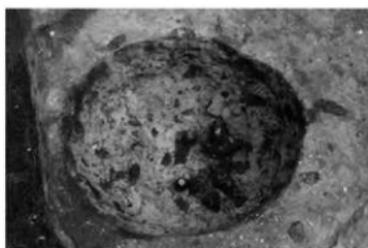


第41号土坑 土層断面 (SW →)

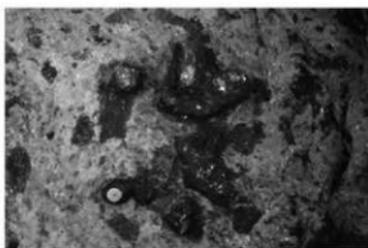
写真10 千石屋敷遺跡 土坑③



第42号土坑 (SE→)



第43号土坑 (NW→)



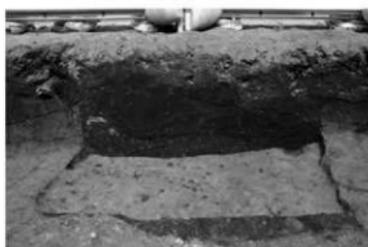
第43号土坑 出土人骨 (NW→)



第44号土坑 (SW→)



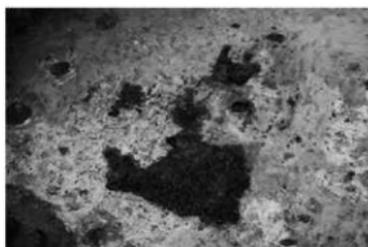
第45号土坑 (NE→)



第46号土坑 (SE→)



第47号土坑 陶磁器出土状況 (NW→)



第47号土坑 底面破熱状況 (S→)

写真11 千石屋敷遺跡 土坑④



第47号土坑 (SE一)



第47号土坑 土層断面 (SE一)

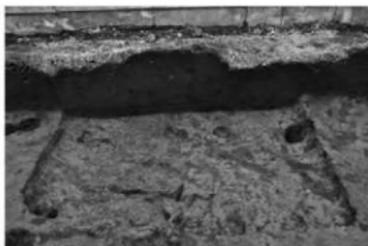
写真12 千石屋敷遺跡 土坑⑤



第48・49土坑 (SE→)



第50号土坑 (SW→)



第51号土坑 (SE→)

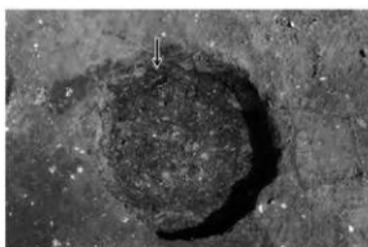


第1号溝状土坑 (NW→)

写真13 千石屋敷遺跡 土坑⑥・溝状土坑



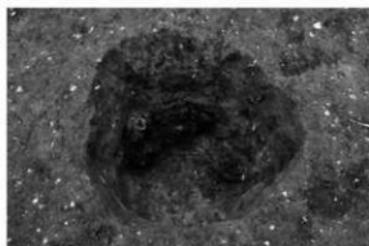
SP459・471・474 (NE →)



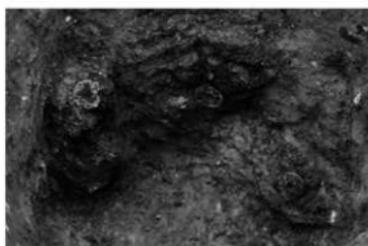
SP459 出土銭① (NW →)



SP459 出土銭② (NW →)



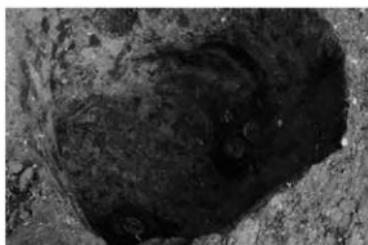
SP471 出土銭 (NW →)



同左 拡大 (NW →)



SP474 出土銭 (N →)



同左 拡大 (N →)

写真 14 千石屋敷遺跡 柱穴

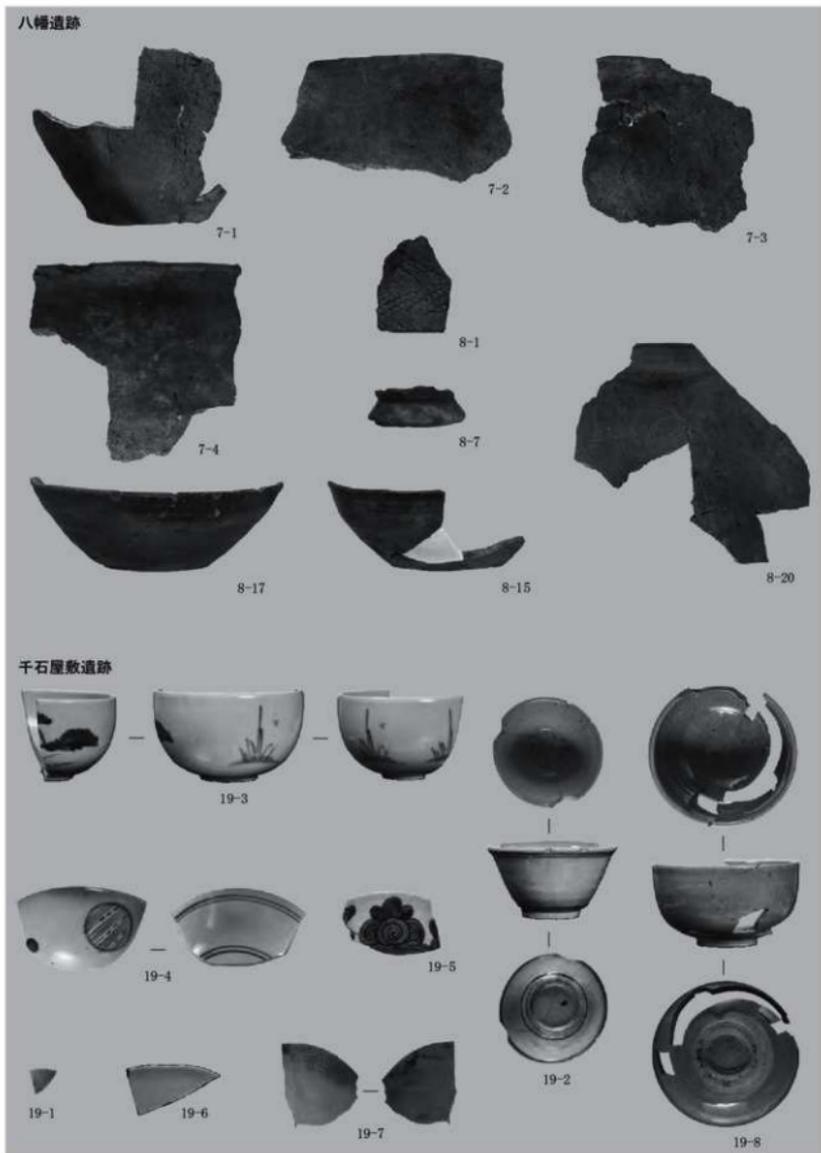


写真 15 八幡遺跡出土遺物・千石屋敷出土遺物①

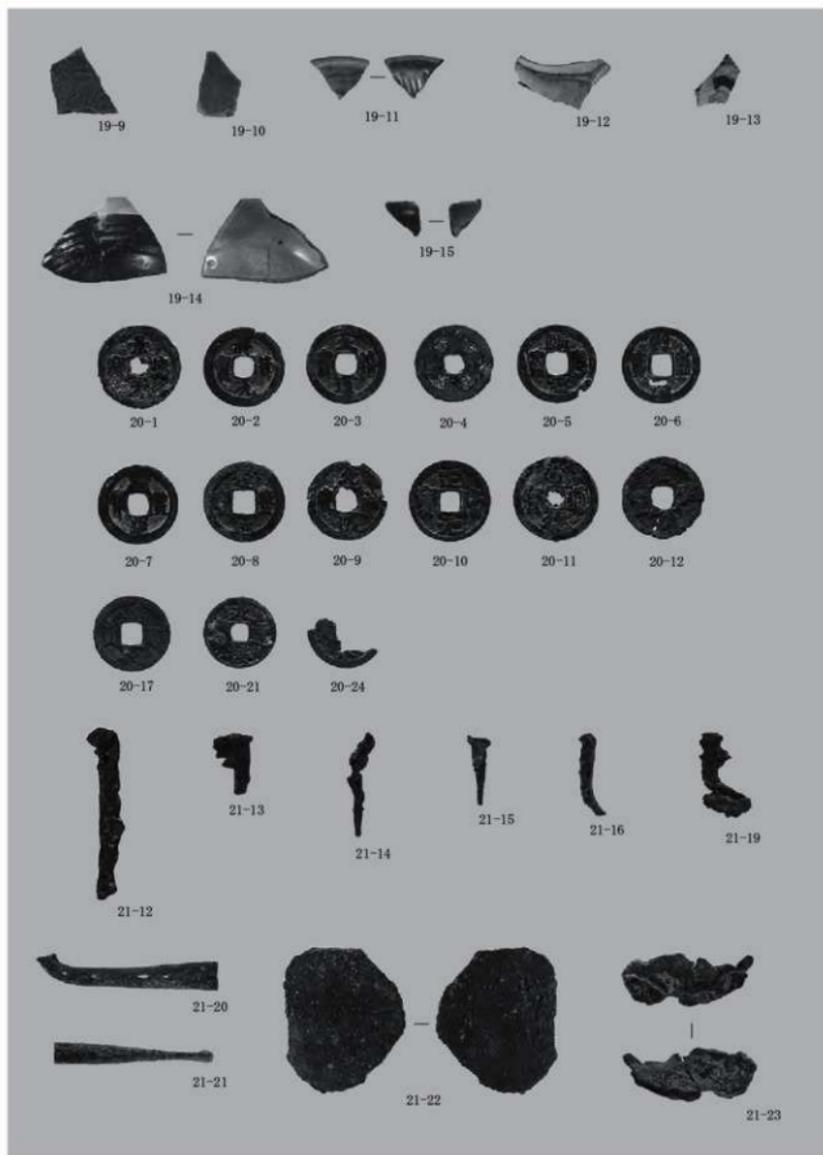


写真 16 千石屋敷出土遺物②

## 報告書抄録

ふりがな	やわたいせきに せんごくやしきいせきに							
書名	八幡遺跡Ⅱ・千石屋敷遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道104号八戸市八幡歩道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第550集							
編著者名	佐藤智生・野村信生							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2015年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
八幡遺跡	青森県八戸市大字八幡字ノノ下外	02203	203026	40° 29' 11"	141° 25' 51"	20130514 ～ 20130729	160	記録保存 調査
千石屋敷遺跡	青森県八戸市大字八幡字五日町外	02203	203038	40° 29' 16"	141° 25' 57"		920	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八幡遺跡	集落	古代 中世以降	竪穴住居跡 3 溝跡 1 土坑 1 柱穴 1 0 1	土師器・須恵器				
千石屋敷遺跡	集落	縄文 古代 中世以降	土坑 3 0 溝状土坑 1 柱穴 3 6 9	陶磁器・人骨・金属製品・銭貨 銭貨	中世後半の土坑墓。 柱穴内に水築通寶のみを埋納した掘立柱建物跡または堀跡。 土坑墓。 近世の竪穴遺構。			
要約	<p>八幡遺跡：縄文時代早期・晩期、奈良・平安時代、中・近世の資料が少量発見された。 千石屋敷遺跡：縄文時代早期・晩期、平安時代、中・近世の資料が発見された。中・近世が主体である。15世紀以降、土坑墓のほか、掘立柱による塚または建物と思われる施設が築かれ、後者は南北軸N-34°-E前後を示す。柱穴内に水築通寶ばかりを複数埋納したものが存在し、「水築」という吉祥文字に因んだ地鎮等の祭祀的行為があったと考えられる。近世以後は、1697年以降の構築・廃絶を示す遺構が多く、一部、近・現代にかかる遺構を含む可能性があるが、掘立柱建物は南北軸N-29°-E前後を示す。江戸時代中・後期には竪穴遺構が複数築かれていた様子も窺い知ることができる。</p>							

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第550集

# 八幡遺跡Ⅱ

## 千石屋敷遺跡Ⅱ

— 一般国道104号八戸市八幡歩道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2015年（平成27年）3月26日  
発行者 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15  
TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702  
印刷 長尾印刷株式会社  
〒030-0931 青森県青森市平新田字森越17-1  
TEL. 017-726-7121 FAX. 017-726-9237

---